
ロックオン・バーディー ～契約少女と衛生兵～

ともみつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロックオン・バーディー ～契約少女と衛生兵～

【Nコード】

N5125G

【作者名】

ともみつ

【あらすじ】

戦争とはビジネス。その中で生きる少女たちは、死の概念がない。それは一度死んでいるから。そんな中で、戦争を強く反対し、しかしあまりにも小さな衛生兵は、逆らうことも出来ずに戦場へ借り出される。そこで衛生兵は出会う。戦場にはいけない少女が、誰よりも戦争を楽しむ様子に、衛生兵は立ち上がる。少女には少女としての生きるべき道があることを示す為に。

そして少女は、そんな戦場ではあまりにもつまらない、平和ボケの

人間が言うような言葉に、面白そうに、契約少女の意味を教える為
に、その出会いに微笑んだ。

1st・戦場の花（前書き）

去年書いたラノベです。

更新が遅れ気味なので、お詫びとして掲載します。

とある同人賞を頂いた作品なので、少しでも楽しんでもらえたらと思います、今後の連載中の作品の更新を待つ間の暇つぶしに利用して下さい。

1st・戦場の花

その戦場は、既に戦場とは言えない。

証拠に、戦場とはその名の通り、戦う場だ。

しかし、この戦場のどこに戦いがあるのか。

もはや追い込まれ、殺される前に足掻く人間を、狩る戯画でしかない。

戦場に立つ一人の少女と、身の丈の倍を超える重厚な銃と極太の剣。

風に流れるものは屍臭。

砲撃の鐘が地獄を呼び起こし、誰が為に闘うことを忘れた愚者が血を啜る。

水の味すら忘れる黒い雨が降る。泥を弾き、肉を殺ぎ、血飛沫が跳ねる。

あるものは敵と味方。だが、それすら把握出来ない時の経過。隣に居る者が誰なのか、気にした時には仲間は肉塊に変わる。そこに少女は居た。

「さて、そろそろ出番かな」

少女は好む、戦場を。

少女は戯れる、撃弾の嵐を。

少女は舞う、血の雨の下を。

少女は引く、戦場を貫く砲閃の一筋を。

少女は駆ける、艶髪を靡かせて。

少女は笑う、天使の笑みで。

少女は捧げる、戦場に生きる女神として。

少女は駆逐する、敵という同属を。

そして、その少女は、挑発的に引き金を引く。

故に少女には授けられし称号があった。

戦場に咲く冷花。

無慈悲な殺戮兵器のごとく敵を殲滅する。そして、銃を持つ者からのもう一つの称号。

Rock On B ardy .

決して怯まず、敵を挑発的に狙い討つ。だが、その名は知られることは少ない。知る者は後に狙われ、この世界を脱してしまうからだ。

全ては少女に課せられた契約の名の下に。

弾奏は不調律を奏でる。弾雨に一瞬の砂塵が舞い、壁が崩れる。

瓦礫の下には人間だった足が埋もれる。一般市民ではない、迷彩服を纏っていた軍人。

少女は照準器^{サイト}を覗く。だが、その照準器は通常狙撃でも使用しない大きさ。夜間照準^{ナイトサイト}から赤外線照射、熱源探査、透過測視、光学増幅視の多機能を備えている。故に少女の覗き込む先には、いかに戦士が兵士として優秀であろうと、少女の狙撃能力の前では無力。

「それで隠れてるつもり？ 丸見えだよ」

少女は笑いながら、己の身体の数倍、もはや高射砲ほどの巨大な銃のレバーを弄る。銃口が合わせて動く。小銃のような手軽さはない。銃だと言っ歪な造物。

「はい、さようなら」

少女が引き金を引く。少女の体が反動に揺れる。耳を劈く射出音と火薬臭。零れ落ちる弾骸は、砲のごとき太きもの。ヘリが町へ落

ちる。立ち上る黒煙と小銃音。悲鳴も減っていく。倒れるものを人として介抱する人間はいない。踏みつけ、退かし、戦車が塊を押しつぶす。正義はない。その中で、コンクリートの壁が崩れ落ちていく。狙撃音に続いての地を抉る兆速の弾爆。少女のサイトに熱源反応が薄れていく影が映し出される。それがものの数分も経たぬ前には、人として数えられていたものが、今では物として捨てられていた。

「はい、いつちよあがり」

少女は繰り返す。それが敵だと理解しているからこそ、引き金を引くことを止めはしない。推定狙撃距離は悠に七百を越えている。少女が引き金を引き、櫓いんやが軋む度に彼方で小さな音が戻ってくる。立ち上る屑煙。少女の狙い撃った兵士の身に着けていた手榴弾の暴発だった。少女は見えてはいない。郊外とは言え、そこは町。敵兵の潜伏先は建物という建物の壁に覆われ、肉眼においての搜索は不可能。だが、少女は見ていた。生き残り、逃げ惑う住民の姿と、それを追う、少女にとっての敵として対立する兵士。それを少女は討つ。その場をまるで動くことをせず、ただ照準を合わせ、引き金を引く。単純にして明確な戦法、狙撃。だが、少女は異常であり、脅威であった。少女を守るものはいない。櫓には少女が一人。あるものは巨大な銃と背負う剣。ただ、それだけ。

「へりもいるんだ。相変わらず資金繰りは良いみたいだね」

少女の狙撃に気づいたかは露知らず、一機の攻撃へりが向きを変えらる。

「あの辺りは遊撃部隊がいたんだっけ？ 撃ち落とすのは向こう辺りかな？」

少女はサイトの望遠レンズを弄る。町中にある小さな広場。少女の視線はそこを捕らえている。へりは前面を傾ける。進行方向に櫓は立つ。高台に作られた家を改装した簡易的な櫓。泥壁は少女が引き金を引く度に波動で崩れ、空にはその度に小さな土煙が上る。敵軍へりはそれを見つけたのだろう。へりの前方のチューンガンが光

を放つ。

「良いよ。勝負だね」

それに合わせて少女は弾倉を取り外す。そこへ銃の隣、少女の足元においてあるトランクケースから別の弾倉を取り出す。大きさが先ほどの数倍。もはや小銃用の弾ではない。対戦車及び航空戦力機関銃。その弾だった。だが、弾倉は問題なく装填される。おかしいのではない。少女の設置した銃が異常なのだ。小銃弾から機関銃弾まで取り込み、射出してしまう銃。

「狙撃の腕はこっちが上。ばっちり見えてるってば」

サイトを覗く少女は、バルカン砲の軌道に合わせ、引き金を引く。空中に爆発が起きる。高射砲でもなんでもない、白の爆発。少女の耳に音の波紋が広がり、櫓共々少女の体が揺れる。だが、少女は表情を変えない。目も口も鼻も動かない。ただ指先がかすかに動くだけ。振動で揺れるが、狂わぬ腕がチューンガンとのガンマンを相殺する。

「あははっ、不思議がってる。でも、本番はこれからだよ？」

少女は一瞬の笑みを風の中に消し、目を細めた。サイトの向こうに映るものは、コックピット座る二人の男。その奥にもう二人いるが、少女にはどうでも良い。

「もう少しこっちにおいで。そこで落としたりしないんだから」

へりは速度を保ち少女へ接近する。警戒しているのだろう。だが、少女は待つ。その下には住居があることを見越し、その先にある広場へ到達するまでは手を出しはせず、ただ木の葉から落ちる滴を待つように、見つめ続けていた。

「ターゲット……ロックオンッ！」

その瞬間、少女は小さな指一本で引き金を引く。小さな体が反動に大きく銃ごと揺れる。櫓の周りには振動による埃が立ち、白く染まる。同時に空では爆発音が響く。かぜに流れる煙の向こう、少女のサイトの先には、進行していたはずのへりが、安定を崩し機体を揺らめかせる。たった一発の銃弾。されどその一発にへりは落ちる。

「良いよ、そのままそのまま」

片目でサイトを覗く少女は、笑っていた。ローターの回転速度が落ち、機体前部には大きな穴。少女は立て続けに数発を放つ。コックピット前面のウィンドウが雪のように散った。その奥には鎮座する二人の兵士が背もたれに赤を残して身動きしない。搭乗員の兵士が操縦桿を握ろうとするが、少女は見逃しはしなかった。

「悪く思わないでね。こっちも、仕事、だから」

少女は回転する機体の動きを読み、割れた前面に見える兵士を待つ。銃口からは白煙が消え、次弾を装填する音が櫓に轟く。

「じゃあね。次に会う時は戦争にも気づけない平和で愚かな世界だと良いね」

少女は呑気な口調とは裏腹に、無慈悲に撃発する。軋む櫓。転がる薬莖^{やつきょう}。少女の銃は口径が二十ミリの小銃弾から砲とされる三十三ミリ弾すら易々と撃発する。少女の撃つへりをも貫通させたものは、軍保持武類においては榴弾砲とされる、一〇五ミリ以上。その全ての弾を少女は、たった一つの銃から放つ。非現実でありながら、少女は現実^{じゆんじつ}にへりを落とす。もはや対へりミサイルのように、打ち抜かれた攻撃へりは成す術はなかった。不気味な風切音を出したまま、へりは地上へローターで土を抉り、破損した。だが、火災も爆発も起きない。

「はい、終了つと。遊撃、聞こえてる？　へりは撃ち落してあげたよ」

手元の無線に少女は呼びかける。雑音の中から男の声が返ってくる。

《第三区画……殲滅、確認……助かったぜ》

男の声は驚きと興奮に、笑っているようだった。

「ならさつさと他地域の援護に回って。残りは私が片付けるから」

《頼んだぜ……女……神さんよ》

荒れる天候に無線が雑音の波を起こす。だが、屋根に身を置く少女は誰が死のうと生きようと興味を持たず、サイトから状況を見下

ろしていた。ヘリへ救援など駆けつけるものはいない。

「第二強襲隊。そつちが最後。これから雨降らせるからさっさと退かないと死ぬよ?」

少女が銃口を操る。標的は空。サイトが捕らえるは灰色の雲。少女はそこへ放つ。光が空を突き抜け、血に降り注ぐ。爆煙も悲鳴も上がらない。ただ、少女のサイトは敵の生体反応がなくなった。

「いっちょあーがりいーっ」

明るく笑う長い黒髪の少女。後ろ髪を小さく二つに束ね、残りを後風に流す。少女には相棒が居る。背中に負う盾を負う剣。カスタマイズを繰り返し、歪にもなった超銃火器。剣は名を、盾の剣。銃の名を、トレイシエールマスタライズ。戦場の仲間はこの二つ。雇われの味も、次なるは敵。昨日の友は今日の屍。故に少女に戦友はない。だが、少女は孤独ではない。少女は孤高にして風。少女に授けられし神の名は、セフィア。サクラント・セフィア。天使と悪魔に愛される妖精。戦場に咲く、破壊と美貌の熾天使より受け継ぐ名。

「撃つよ」

《了解した》

別の一個小隊に向け、少女は空へ銃を放つ。鈍角に空へ直進する無数の光は、やがての時を経て、地上へ降り注ぐ。少女には何も聞こえないし、見えもしない。だが、少女はトレイシエールマスタライズの銃口から絶えず銃弾を発す。薬莢が足元に散乱する。それを気にかけることもなく、新たな弾倉を装填した。

「五番街の三叉路ストリート。援護するから突破して」

《……大丈夫、なのか?》

少女のサイトの捕らえる町の中のわずかな広がり。瞬間的に導き出した弾道で空へ放物線を描く少女の銃弾。だが、距離は七百以上はある。

「即射するから、二十八秒後にストリートの左端を通過して突破。やって」

少女は問わない。ただ、行けと言うのみ。如何なるものの命令も

聞かず、単独にて全てを把握している。

「じゃあ、行くよ」

言葉を皮切りに、少女は新たな弾を空へ放つ。連射される爆音が銃口から光を放ち、薬莖の臭いが立ち込める。

「七、八、九、十……」

撃発音に合わせてのカウント。解放された無線の向こう側でも同様にカウントが行われている。

「二十六、二十七、二十八、行けっ！」

少女が叫ぶ。一点に集中して放っていた銃口を数十発ごとに狙撃位置を変える。その先に入るであろう味方が、安全に突破できるように。無線の向こうから少女の下へ無数の弾音が響く。昏間を染める白の光が銃口より噴出す。

《行け行け行けっ！》

《怯むなっ！ こつちには女神がついてるんだっ》

《マルクスが負傷したっ！ 誰か手当てをしてやれっ！》

《右により過ぎるなっ！ ケインッ！ 手榴弾だっ》

様々な声が少女に届く。

「良いよ、そのまま行っちゃえっ！」

少女は聞きながら楽しげに笑う。自動式フルオートなのか、たった一本の指が戦場に悪魔の雨を降らせている。少女は女神ではないだろう、敵にとつては。だが、侵攻する味方には女神だった。

少女の向ける銃口の先に、黒煙が数本昇る。手榴弾のものだろう。

《状況確認を急げっ！ まだいる可能性がある、マイケル、ケイン、援護しろっ！》

交戦音が明確に減る。少女の耳にもそれは確認できる。

「そつち、状況は？」

そこで少女は引き金から手を引いた。頭を振り、乱れた髪を揺らす。

《……敵、全滅。状況……終了……》

警戒しながらも疲労した声が戻る。

「うん、よくやった。これで戦闘終結だよっ」

少女は笑った。勝利に満ちた嬉しさの笑みで。そして少女は櫓の屋根の外に出る。風を吸い込んだ後に、無線に呼びかける。

「はい、みんな、こっち見てーっ」

少女が無線で呼びかける。そこは櫓の外、町の見渡せる空の下。少女は立った。

「今をもって、この町は私たちのものになったよっ！」

そして少女は雄たけび。背中に背負っていた、あり得ないほどに太く長い剣を空に片手で翳した。雲の切れ間から咲きこむ陽光が、その剣を煌めかせる。

《うおおおおお　っ！》

無線から響く雄たけび。櫓の下の前線基地からも声が上がる。誰しもが歓喜に満ち、少女の掲げた太剣の光に勝利を宣言したのだから。

「やっぱり勝つって気持ち良いねー」

その声に少女は、初めて姿に相応なあどけない笑みで笑っていた。

「セフィア。よくやってくれたな」

勝利は血の味に満ち、戦場から弾奏は消えた。

「お疲れ様。報酬は？」

「おいおい。せっかく戦況を一蹴したつてのに、それが先なのか？」

男は軍装。顔は迷彩化粧が雨に爛れ、腕には赤に滲む包帯がある。

「他は興味ないもん。とりあえず治めたんだから、払うものは払ってもらおう。それが私たちとの契約でしょ？」

少女は戦場に居るとは思えぬ装束。戦場において何より目立つ白降伏を示す白。そのワンピース。男が屍臭を漂わせている中で、少女はフローラルに香り、夏の雲のように何一つその装束は他色に染まらない。

「司令部は？」

「ここは前線だ。本部なら、ここから百七十キロ先のハーベス準空基地にある」

「じゃあ、そっちに報奨金があるのね？」

「なあセフィアよ。俺としてはお前みたいな可憐な女には、生残者に一つや二つ、言葉をかけてやって欲しいもんだが？」

熱を失う銃火器をセフィアは分解する。丁寧に白いタオルで汚れを拭き取りながら。

「私の契約はラクス郊外の戦闘を早期終結に結びつけること。報奨金契約は千三百万^{ルース}R。私を呼んだからには、契約に上乘せ条件が付加する場合は、これがいるの。と言うよりも、戦場の男って性欲に満ちてるでしょ。そんなところに私が立ったら襲われちゃうじゃない」

セフィアが笑う。それはジョークでもあり、事実でもある。だからこそ、セフィアは笑って受け流し、自己の成果に対する見返りを求める。

「戦場なんて愚命の捨て場。生き残ることが当たり前。生きてるならそれで良いじゃない。私が生き残りに言葉、かけても良いの？人殺して罵っちゃうよ？」

笑顔。戦場にはあまりに不相应な幼い笑顔。だが、男はその言葉にかすかに眉を動かす。その言葉に続く言葉は明確な罵詈雑言ではない。そう読めたのだろう。

「さすがは、ロックオンバーディー、か。お前こそが銃そのものようだな」

「動けるものが兵器なら、私は人間よりも兵器の方が好き。それだけだよ」

セフィアが身の丈ほどの皮製トランクケースにトレイシエールマスタライズを仕舞い、背負っていた剣に花柄のケースを掛け、再び背負う。

「降ろすのを手伝おう」

「へえ。戦場に紳士がいたんだ？ 紳士なら逃げ出してると思ったのに」

櫓には無数の薬莖が散乱する。セフィアはそれを片付けようとは

しない。二人が歩く度に靴が軽やかに葉莢を蹴り、勝利の鐘を模す。「契約上は前線指令区指揮官だ。それくらいは女神の為にして罰はないだろう?」

「そう。じゃ、お願いね」

漂う火薬と血臭。郊外に家はなくなつた。弾創痕に外壁は蜂の巣。建造物は戦車弾にことごとく破壊されていた。航空戦力による空爆に、人は人と言う形を亡くしている。兵士であろうと住民であろうと、その区別は何もない。あるものは既に人として数えられない物体。子を守ろうと背に無数の血筋を垂らしている母。だが、肉で銃弾は防げはしない。血と母であつた物に挟まれる子は、母から貫かれた銃弾に倒れた。犬も猫も家畜も、全ては人により守られ、人により育てられ、人により殺される。星を支配する人間が星の小さな場所を奪う為に殺しあう。愚かでない場所に、少女は花のように咲いていた。幾多の屍を作っている者でありながら。

「……………っ?」

セフィアの小さな手からトランクケースを受け取る男。表情に驚きとかなかな苦痛が彫られる。重音が櫓に響く。

「どうしたの? 早くしてくれない?」

先に階段に足を下ろしたセフィアが振り返る。

「……気に、するな」

男は先に降りていくセフィアの背中を、怖気を浮かばせて全身に力を入れた。

「化け物か、あれは…………?」

セフィアが軽々と持ち上げたケースを、男は青筋を浮かべながら、少女に追いつけない速度で階段を引きずつた。

「ちよつと、いつまで待たせるわけ?」

息を切らした指揮官が降りた頃、セフィアが指揮官の座に腰を下ろし、鏡に己が顔を映し出していた。

「これは、携帯、するも、のでは……………ないだろ……………」

男の途切れる声に、セフィアは笑う。子供に相応な無垢の笑みで。

「あはははっ。何言ってるの？　これが重いだなんて、力ないんじゃない？」

椅子を立つセフィア。男が音を立て置いたケース取っ手に触れる。「疲れてるんでしょ。早く愛する人の元に帰って抱いてもらいなさい」

セフィアが男が全身を疲労させた旅行カバンのような皮トランクを、容易く片手で持ち上げた。男が言葉を呑んだ。

「それじゃ、私は次の現場と報奨金の受け取りに行くから。誰でも良いけど車ない？」

セフィアは片手に銃ケース、背中に大剣、そしてもう片手には流浪力バンのあった。少女には不相応な大きさのものばかり。見ている者の目が奇怪だ。だが、セフィアはカバンから麦藁帽子を取り出し被る。戦場を花畑とでも勘違いしている。男たちの目は物語っているが、セフィアは気に留めるだけ無駄なものは視界に取り入れない。

「この状況下では残骸に阻まれるだろう。調達したヘリがある。用意させよう」

「どうでも良いけど早くして。次の戦場の時間もあるから」

次の戦場。セフィアのその言葉に基地に戻る心身疲労困憊の兵士の表情が凍りつく。今しがた一戦場を治めたばかり。人が殺しあう戦争とは疲労が尋常ではない。殺す恐怖、殺される恐怖が常時接している。前線にて敵を殲滅する目的は双方同意。だからこそ、終結を迎えた後は、その緊張が解ける。

張り詰めすぎる恐怖は人を壊す。人間の区別がつかなくなり、足音一つが、小石を蹴る音すら身体に突き刺さり、本能の一つ、反射を以って銃を構え、撃つ。その繰り返し。

だからこそ、戦場を経験した人間は、一般生活を取り戻すことに苦勞を要する。差はないのだ。ただ、そこに銃があるかないか。並びに、そこが安寧の地か否か。それだけで人は恐怖と混乱を履き違える。だが、少女は違う。日常生活と同じように洒落た衣を纏い、戦

場との区別に歪を持つ。疲労はない。ちょっとした用事を済ませて、次の目的地へ移動する。ただそれだけでしかないのだ。

「それにしても最近では依頼が多くて困っちゃうね」

割りには笑い声が響く。セフィア以外、誰も笑みを浮かべられるものはいない。

「まあ、その分は随分儲けさせてもらってるんだけど」

戦場において死者を冒瀆することも、懺悔することも、誇ることも全ては罪。起きることこそが罪と罰であり、セフィアは一言たりとも後言を発しはしない。だが、その笑みは嘲笑。生き残ることに命を掛けたものたちへの嘲笑だった。

「お前、何とも思わねえのかよ？ 何人こつちも死んだと思ってるだよ」

そこへ一兵士の怒の感情がかかる。だが、セフィアの鋭い視線が男を容易く射抜く。

「あのさ、私、敵しか殺してないんだけど？ 住民にまで被害を出してるのはそつちじゃない。人に言う前に負傷者、生存者の捜索に出るべきでしょ？ 自分たちが勝ったら何人殺したで英雄？ 何機撃墜したかでエース？ 馬鹿じゃないの？ 所詮は犯罪者でしょ、あんたたち。それが嫌ならやるべきことをする。私の契約はここままで。でも、あなたたちのするべきことは、これからでしょ？ ならさっさと行動に移れば？」

「それは、お前もだろうがよっ」

兵士は疲労に労いも無く嘲笑され、セフィアに詰め寄る。

「あたしは自覚してる。だから兵士しか殺さない。それが戦争であつて、終結に結びつける契約だから」

セフィアは言い放つ。無の感情を以って。その言葉は自身の溢れ、絶対的信条において守られし少女の戦術。それは軍にはない責任の孤独。セフィアの言葉に兵士が唇を噛む。

「止めておけ。彼女は俺たちに勝利をもたらした。住民にも被害を出すことなくだ。言っていることに誤りは無い」

先ほどの指揮官の男が止めに入る。セフィアが満足げに肯く。その時、上空に三機の軍用輸送攻撃ヘリが姿を現す。ゲリラが持つには勇壮な代物だ。そして、ただ一人の少女を指令本部へ送り届ける為だけに三機。その待遇は誰もが啞然とするしかない。

「じゃあね。次に会う時は敵かもしれないから、空と壁際には気をつけたほうが良いよ。私の銃弾はどこにいても貫いちゃうから。その体を、ねっ？」

あはは、と、セフィアが指で作る鉄砲で一人の兵士の胸に「バーン」と冗談めかして指を胸から空へ上げた。ただそれだけのことでしかない、子供の冗談だが、この場においてそれは、撃たれた兵を始め、セフィアの加担した軍の人間に怖気を走らせた。

臨時ヘリポート一機が降りてくると、セフィアは搭乗員に導かれ、ヘリ機内へ入った。すぐに上昇を開始するヘリは、そのまま前線基地から遠のく。夢が覚めるように静けさが増した。

「何なんだよ、あいつ……」

「あれは、戦場に咲く冷花だ」

指揮官の言葉に兵が男を見る。

「戦場において冷酷こそが勝者になる。あれはただそれを実行する兵器も同じだ。人の温もりなど知らぬ哀しい奴だろう。だが、成果は保障つきだ。敵にすれば恐ろしいがな」

指揮官の言葉に、兵士たちは空を見送っていた。

1st・戦場の花（後書き）

閲覧ありがとうございました。

この作品は、自分の中では続編を描いてますが、とりあえずはここまでで終わらせることにします。

評価などを見て、続きを連載するか判断したいと思しますので、評価・感想をいただければ幸いです。

2nd・契約少女と衛生兵

「ご苦労であった。状況は既に把握している」
「なら出すものは出して。パトリツツア銀行への振込みでも構わないけど？」

指令本部。戦場であり、戦場ではない守られた基地。セフィアは最高司令官を目の前にしても態度を変えはしなかった。そして向き合う男たちの態度も、子ども扱いではない、契約者としての一女として接していた。現場と職務室の差が浮き彫りにあった。

「それは先に済ませてある。君たち組織の者が手配に来た」

「あっそ。じゃあ用はないね」

置いた荷物を持ち上げると背を向ける。用件を先済されたのであれば、ここに用はない。セフィアは出された紅茶に目を向けることも無く室内の戸に立つ男を見た。

「次の戦況は、敵になるだろう」

不意にセフィア男が声をかけた。

「ふーん。良いけど、その時は容赦しないよ？」

セフィアの笑いは少女のもであるが、誰もが少女を厳しい瞳で見つめるだけだった。

「頼りたくなったらいつでも連絡をお待ちしてまーす。私たちは、これ次第だから」

セフィアは場違いな笑みと指で作る金の形を残して本部を後にする。

「セフィア」

基地のゲートを抜けると、一台のスポーツカーが停止していた。その傍らには男。煙草に火をつけ大きく吐き出した。

「あっ、ルーシュ。迎えに来てくれたの？」

「これが俺の仕事だからな。早く乗れ」

「はい」

スーツ姿で青い瞳の男。セフィアの荷物を軽々と狭い後部に載せた。先にセフィアが助手席に乗り込む。男はほとんど吸い終えていない煙草を胸ポケットから取り出した。携帯灰皿に押し付け、乗り込んだ。走り出す車内で、セフィアがオーディオを弄る。

「好きだな、この曲」

流れ始めたのは、フランツ・シューベルトの歌曲、アヴェ・マリア。

「イギリスの詩人のウォルター・スコットの湖上の美人の七つの詩の、六つ目のエレンの第三番。いい曲だよな」

「お前は、宗教音楽が好きなのか？」

ルースが横目を向ける。誰しもが聞いたことのあるクラシックの名曲だ。

「違うよ。これは宗教音楽じゃないの。シューベルトが作詞したわけじゃないし、歌曲

だよ。聞いたことあるのにそんなことも知らないで言う人間って馬鹿だよなえ」

セフィアが笑う。ルーシュは何も言わない。恥じているのだろう。少女に馬鹿にされる屈辱を感じているようだ。

「この歌詞のエレンはね、父親と王の仇討ちから逃げるために、ゴブリンの洞窟に逃げるの。それでエレンは救いを求めて祈るの。そうしたら、その祈りを口ずさんだエレンの言葉は、氏族を戦いへ導くように山奥にいた二人を匿って、ロデリックの元に届いてエレンと父親の罪は許されたんだって」

セフィアの曲の解説にルーシュは何も言わなかった。知らないこ

となのдарうつ。

「良いよね、そういうのって」

「何がだ？」

車窓に映る景色は惨劇。だが車内は水滴を纏うジュースのカップが振動に揺れ、爽やかな香りが溢れている。

「祈りが戦争を引き起こすの。二人を助ける為に。でも、その二人の罪は許されるの。戦争を起こしたのに。それってさ、戦争に勝ったから、二人は裁かれなかつたんだよね？」

セフィアがルーシュを見る。ルーシュはストリート通りに散乱する瓦礫を交わしつつ、バックミラー見る。避けたそれが人の体であり、後続のトラックが迷うことなく踏み潰した。

「さあな。だが、そうなんだろう。でなければ、犯した罪は逃亡者には消えはしない」

荒れる路面に二人は時折大きく揺れる。蓋のされたジュースも大きく揺れる。セフィアがそれを取り、ストローから口に含んだ。車内は親子の旅中にしか見えない。

「だよな」

セフィアがジュースを飲みながら前を見る。ルーシュは何度か横目に向けた後、一言口にした。その沈黙を破る為に。

「……お前は、許されたいのか？ この役目から」

真剣なルーシュの言葉。二人は顔を見合わせることは無く、平行した視線の先は交わることは無かった。

「全然。私は私で楽しいし、後悔することもない。死なないもん。でも、私がおかしいって自覚はあるんだよ？ こう見えても」

戦場に咲く花と味方には崇められ、戦場に降り立つ悪魔と敵には恐れられる。戦争に加担するには不相応な出で立ち。言葉は哀愁を運んでも、セフィアの瞳は無だった。

「だが、それこそがお前たちだ。そうあると契約を交わした以上、その終わりはない」

だからこそ、ルーシュも突き放すように言う。それが役目だと固持するように。

「知ってる。あゝあ、早くハウスに帰りたくないなあ。あ、そうそうルーシュ、私のハーブ園、どうなってる？ もう一月は戻ってないけど、大丈夫かな？」

話題は車窓に切り離された日常。それこそが相応。だが、不相応なのだ、セフィアに
おいては。

「気に病むな。お前のハーブ園の世話はフェティシーがきちんとなしている。ラベン

ダーが花開いたと連絡があった」

「ほんと？ そっかあ。フェティシーなら安心だね。早く帰って見たいなあ」

目に光が宿る。戦場での笑顔とはまるで異なる少女。一瞬、ルーシュが小さく鼻で笑うが、すぐに表情を改める。

「残念だが、お前にはこのまま次に向かってもらおう」
「どこ？」

セフィアに不満の感情は無かった。それは諦めを割り切っているようでもあった。だからこそ、セフィアは笑っていた。切り捨てた場所を埋め尽くすモノを戦場に求めて。

「ここから二百二十キロ先にあるガトラスと言う町の交戦区だ。この国では最も激しい戦闘区域だが、やれるな？」

男の横目を、セフィアの笑顔が迎える。

「楽しい？ 契約任務の内容は？」

「飽きはしないだろう」

えへへ、とセフィアが笑む。だが、ルーシュはその笑みに付け加えて言った。

「次の任務では一人の護衛を担当してもらおう」

「護衛？ 殺すんじゃないの？」

罪の意識はない物言いに、男が苦笑する。

「戦争はただ人を殺せば良いわけじゃない。時には守ることも戦争だ。今、お前がこれを聞いて言っていたことも同じだろう？」

「えーそうかな？ これは作品だから素晴らしいんだよ？ 現実がそんなのって冷めるだけじゃない？」

「お前も相変わらずだな……」

不満ではないようだが、興味が無いのか鼻を鳴らし聞き流す。ルーシユは肩を竦めて苦笑した。

「それで誰の護衛？ 大統領？ 司令官？ 官僚？」

自分に見合う護衛対象者を想像し、セフィアが楽しみに笑む。

「衛生兵だ」

ルーシユは冷静に一言で片付けた。

「えー……生兵？」

セフィアが不満に語尾を繋げる。

「一つ言い忘れたが、ガトラスの町には生物兵器使用反応が出ている。前線小隊に多数の被爆者がいるらしい。そこに本部からのワクチンを持った衛生兵を派遣する」

「だから私に護衛をしらうってこと？」

そうだと、男が短く言う。セフィアがストローを強く吸い、カップの中から途切れる音が響いた。

「今は落ち着いているらしいが、交戦は続いている。最少人数で早急に済ませる」

「めんどくさい」

初めて不満らしく不満を言うセフィア。

「依頼だ。戦場で味方が死にかけてるのを救援に行く。その護衛をお前が任された。敵を殺すだけのお前が味方を殺しても良いのか？」

「それはいや。契約したんなら従うもん」

だからこそ男は、瓦礫と遺体の散乱するストリートを加速して通

過した。町を抜けると瓦礫に家だったものが散乱するばかりの破壊された道に入る。二人はそこで会話を区切る。ルーシユの視線はバックミラー。セフィアの視線はサイドミラー。後方にはトラックが速度を上げ、接近していた。

「ついてきてるよ、あれ」

「反感を買うことはしたか？」

ルーシユが問う。ルーシユは路肩に入っては道を蛇行修正していた。それを追うトラックは、やはり後続している。セフィアがサイドミラーから状況を読む。

「するわけないじゃん。契約には従順だよ、私？」

そう言いながらセフィアが後部座席のケースを開く。

「どうだ？」

取り出したものはサイト。セフィアが後部窓から見ると

「うーん。上位は二等陸尉ってところ。隠れてるつもりなんだろうけど、前部丸見え」

小さくセフィアが笑う。そしてケースを漁る。

「でもさあ、さっきまで私が勝たせてあげたところだよ？ 理不尽じゃない？」

そしてセフィアはサイト越しにトラックの運転座席にいる男の服装に頬を膨らませる。

「恐らく混在する中で情報が漏れたんだろう」

冷静にルーシユは加速する。車内の振動は大きくなるが、距離は縮まらず、遠ざかりもしない。後部座席に身を乗り出す小さなセフィアの背中を、ルーシユが押さえていた。瓦礫に乗り上げ、車が跳ねる。トラックはその瓦礫を粉碎した。

「情報？」

「お前の次の任務は、連中と敵対するゲリラ軍への護衛だ」

「だからってひどくない？ 今の今、勝利させてあげたのに殺しに来る、普通？ とんだ恩返しじゃない」

「戦争とはそう言うものだ」

セフィアが頬を膨らませつつ、ケースから分解されたトレイシエールマスタライズの一部品を取り出し、組み立てる。

「ルーシユ、サンルーフ開けて」

ルーシユがドアウィンドウのボタンの隣を押す。天井が開き、風が舞い込み、セフィアの髪を靡かせる。

「出来るだけ蛇行してね。無反動砲積んでるよ、二十六口径の」

「無誘導なら問題ない。こいつの装甲は二十八までは耐えられる」

ルーシユがアクセルを踏み込む。激しい揺れの中、セフィアは車体上部の窓から身を乗り出す。構えるはマスタライズの一部品を組み合わせた超長身狙撃銃。車体上部のボディに設置すると、銃口は車長を越えていた。

「撃つてくるよ」

「殲滅しろ」

セフィアに気づくと助手席の男が短機関銃サブマシンガンを窓から覗かせる。

「りょーかーい」

その瞬間、セフィアはサイトを覗き、マシンガンを地へ落とす。

放り出された銃は地上を転がる。そして二つに分かれた。一つはサブマシンガン。もう一つはそれを支えていた軍人の腕だった。助手席では男が腕を抑え暴れていた。トラックが蛇行し、ルーシユの運転する車と差が開く。セフィアはサイトを覗き続け、数発を撃つ。

周囲に破裂音が響き、トラックが大きく揺れ、車体が左に蛇行する。右前輪がパンクしていた。運転手は焦ったのだらう。ハンドルを切りながら速度を上げてきた。

「何人だ？」

「一人は腕吹っ飛ばしたよ。後はドライバーと荷台に合わせて十人かな？」

熱源探知に切り替え、セフィアが数えた。郊外道を走る車は二台だけ。後続のトラックの荷台を覆っていたカバーが不意に外れ、後方に散った。

「撃つてくるよ。しかも全員ランチャーなんだけど？」

セフィアに向けられる十を越える砲口。どれもが二十口径を越えていた。

「さすがに連発の被弾はきついで。先にやれ」

「はい。じゃあやっちゃうよお」

樂しげにセフィアがサイトを覗き込む。一斉に荷台上部から顔を覗かせる兵士とランチャー。順を追うように光と白煙が包む。同時にルーシユの車も発射音を轟かせる。セフィアが引き金を引く。ランチャーの初速は遅い。二段階において加速する。セフィアはその瞬間を狙って撃つ。ほぼ同時に放たれた双方の弾が爆発を起こす。兵の撃った砲弾をセフィアの銃弾が迎え撃ち、相殺した。だが、セフィアは容赦をしない。視界を遮られランチャーが動きを止める中で、セフィアはサイトをかすかにずらし、銃口も比例する。そして放つ。十以上顔を出していた砲口が八に減る。硝煙に隠れる中で、セフィアの記憶が兵士を貫いた。

「あれえ？ もう終わり？ つまんないの」

セフィアはそれでも命令に従い、引き金を引いた。七、六、五、四、三、二、とセフィアに向けられるランチャーが減った。セフィアはランチャーが発射される寸前に兵を撃った。蛇行するトラックから撃たれた兵が落ちる。だが、トラックは停止するどころか向かってくる。

「だから、無駄だつて気づかないのかな？」

最後の一つが吼える。だが、吼えた瞬間にそれは爆発し、荷台に火柱が走りぬけた。ランチャーが砲弾を放った瞬間を見越し、セフィアが砲口に銃弾を押し付けた。砲弾を貫通した銃弾は炸裂し、火薬を爆発させ、最後の砲口は包む黒煙の中、吹き飛び消えた。

「さすがだな、お前の狙撃能力は」

バックミラーで始終を目撃していたルーシユが軽く口笛を囁かせた。殺気のない銃弾は任務を終え、敵戦力内に消えた。

「でしょ？ 私に勝てる奴なんていないんだから、こんなところじゃ」

ルーシユの驚きに、笑みで応えるセフィア。しかし、銃を仕舞おうとはせず、身も乗り出したまま。

「ルーシユ、雷弾取って。まだ使う機会無かったから、ここで試してみる」

セフィアに言われ、ハンドルを片手に、ルーシユがトランクケースから、七色順に並べられている弾倉の中から黄色の弾倉を、手だけ車内に差し伸べるセフィアに渡す。強風にセフィアの髪がルーシユに撒きついていった。

「お前、括るかしたほうが良いぞ」

「やだ。括ると癖毛になるもん。このさらさらが良いの」

弾倉を受け取ると、弾倉を取り替える。通常の黒い弾倉が流れる車窓を転がり跳ね、トラックの吸風口の網に傷をつけた。黒光りする超長身狙撃銃に取り付けられた奇怪な弾倉。セフィアがスライドを引き、装填する。その際に静電気がセフィアの髪をかすかに広げた。

「ん、ピリピリするよ、これ」

「当然だ。通常は合成ゴムグリップを使う。頬はつけるな。トーストなるぞ」

「それはやだね。でも大丈夫。ターゲットは大きいし」

速度を上げ、恐らくは捨て身。突っ込んでくるトラック。既に後方では炎が上がっている。何もせずと燃料タンクに引火し、大爆発は免れない。だが、セフィアはモルモットを使役する研究員だった。新薬の投与による効能の検証。セフィアはサイトを覗くことなく、銃口を蛇行するトラックに合わせて振る。

「新弾検証、スタートッ！」

引き金は人差し指のみで引き寄せられた。銃口が噴く。通常弾とはまるで別の稲妻を纏う銃弾を。射出音も振動していた。積雷雲から振り落ちる業雷のごとくに。吸風口に撃進した銃弾は、炸裂はしなかった。だが、衝突口は火花と青白い静電気が内部の搭載機器を襲っていた。

「いったあー……失敗作だよ、これ」

射出した狙撃銃は小さな雷を纏い、静電気を光らせた。小さな痛み
の連続にセフィアが思わず銃を離し、身を車内に寄せる。一方で
トラックの吸風口からは小さな爆発が噴出す。セフィアは見てはい
なかった。それが雷弾の効果だとルーシユも気づかなかった。

「だから言っただろう。忠告は聞くものだぞ」

静電気に髪が踊っているセフィアに、ルーシユが小さく笑った。
同時に車内を振動が包む。後続のトラックが黒煙に包まれていた。
炎だけではなく、稲光に包まれ、大破した。外部ではなく、内部の
爆発によるもの。巨体が浮き上がる。

「時差があるのか、そいつは」

「やっぱり使えない。私は速攻じゃないと使わないし」

向かい来る爆風に、ルーシユはアクセルを踏み込んだ。後部ウイン
ドウに欠片が音色を奏で、兵たちのせめてもの攻撃のように飛来し、
風に散った。炎上するトラックは車輪が左右に転がり、そこで終結
した。

「それにこんな battlefield で使ったら感電死しちゃう。もっと開発局に
改善しろって言っついてよ、ルーシユ」

不満げにセフィアが銃を仕舞う。弾倉を投げ捨てた。使う気はも
うないのだろう。車内から投げ出された弾倉は、転がり、散乱した。

「武器を気安く捨てるな。けが人が出る可能性があるんだぞ」

「じゃあ、こうすれば良いんでしょ？」

ケースから何から取り出し、セフィアはそれを散乱した弾倉に向
けて投げた。小さな手玉のような物体。投げ出され数秒後、それは
爆発した。土を巻き上げ、抉り、散乱した銃弾を巻き込みさらに爆
発した。

「お前のやることは極端だぞ……」

ルーシユは停止することも無く、先を急いだ。不発弾処理を爆弾
で行うセフィアに多少呆れ顔ではあったが、確認する余裕は無いよ
うだ。

それからしばらく車は走った。すれ違う車は避難民を乗せた乗り合いトラックか、軍事車両。一般車など路肩に骨組みを残すばかりだった。

味方をしたものの裏切りも束の間、やがて見えてくるは検問。正規国家軍ではない。武装もまばら、統一されていない装束。せめて軍人と分かるように表面だけを塗装したポンコツ車だった。

「止まれ。ここから先に何の用だ？」

銃口を窓に押し付け、開けるよう促す。

「誰だと心得ている？ これを見て分かんのか？」

ルーシュがダツシュボードの中から契約書の複写を見せる。

「ちよつと待っている」

一見した男がそれを持ったまま、別の兵士にその場を任せ、姿を消す。

「私たちを見れば分からないのかな？」

「末端のボンクレは捨て駒だ。伝わるわけがないだろ」

目の前に兵士がいるというのに、二人の口調は平然たるものだった。

「待たせたな。よく来てくれた。歓迎しよう」

しばらく停車させられた後、一人の男が開いた窓から握手を求める。ルーシュはサングラスを掛け、セフィアは男を見るだけに終わる。彷徨させた手を男が息を吐きつつ、静かに引くと、入れ替わりに紙を渡す。

「ここに書かれている場所へ向かえ。そこからは戦場だ。生憎だが、こちらは人員不足で援護はないと思え」

「だから呼ばれたただけ？ そんなことも分からない？」

さっそくセフィアが物申す。人員が満足いくものであれば来はしない。契約を交わしたことはすなわち、そう言うことでしかない。

「そうだな。あんたには言うだけ無駄だったな」

「そういうことだ。ゲートを空けてもらおう」

ルーシュが窓を閉める。外では男が手を振り、ゲート管理者が封

鎖していたフェンスを退ける。ルーシュがアクセルを踏み込み、通過する。

「弱そうだね、このって」

「そう言うな。正規ではないにしろ、バックには中東の石油投資会社がついている。なかなかの得意先だ。大事にしておけ」

戦争とは商売であり、商売でしかない。故に人は人を殺し、国は国を支配する。

「人間ってほんと馬鹿だよなえ」

それを知るセフィアが一蹴する。

「だからこそ、需要があるんだ」

分かっているもん、とセフィアは商売や政治などに示す心は持ち合わせていない。車窓から見える山吹色の山肌に点在する対空砲や破壊された残骸に目を向けていた。

しばらく未舗装の道を砂塵を巻き上げ走ると、小さな村が姿を見せる。

「この町だ。護衛対象者はこの先の通信中継施設にいるらしい」

車を降りると、そこは人気のないゴーストタウンだった。兵士はいる。時折散発的な小争が起きている。火災も自然鎮火を待つかのように、町は燃えて崩れていた。

「ルーシュ。最近の私さ、汚い場所ばかり派遣されてる気がするんだけど、気のせい？」

戦場に降り立つセフィアはやはり違和感の塊だった。

「この任務が終わればハウスに戻れる。既にスケジュールはそうなっている」

「それなら良いけど。じゃあ、行くね。帰りの迎えの手配、よろしく」

再びセフィアは戦場を歩き出す。どう見ても少女には荷の重いものばかりだが、セフィアは平然と歩く。瓦礫を軽々と飛び越え、通信中継地に向かう。破壊に満ち溢れ、ルーシュの車は進行不可だった。

「つまんない町。サボテンの水で持つてるのかな？」

皮肉も返答を得ない。数時間ほど前に勝利を収めた戦場を後にして、変わらぬ光景。男は脳天を撃ちぬかれ、血も酸化に黒ずみ、少女は裸体を犯され、後頭部を撃ちぬかれ、陰部にはレイプの体液、みな死んでいる。赤子でさえ胴体がまともに残ってはいない。通りに横たわる死体には野鳥に、虫が集る。この町の戦況は今に始まったものではないのだろう。

「臭いな、もあ。服に臭いついちゃうじゃない」

その中を真白な少女が、カントリーのグランマの家を訪ねる娘のように麦藁帽子に日差しを受け、両手と背中に愛らしいケースを負う。異常な光景。天使が下り立つ地を誤ったようでもある。

「えーと、この辺にあるんじゃないのかな？」

ルーシユとの別れ際に渡された簡易的な地図。セフィアが付近まで来る。そこには何も無い。あるのは瓦礫の山々。

「その少女、止まれっ！」

不意に周囲の瓦礫の向こうから数人の男たちが銃を向ける。

「あんたたち？ 私を呼んだのは？」

警戒する男に、セフィアは軽く言う。

「お前が……サクラント・セフィアか？」

「契約内容はワクチンの護衛だっけ？ で、その衛生兵はどこ？」
声をかける無精髭の男を見る。男もセフィアへ歩み寄る。銃口はセフィアの額を狙っていた。セフィアは警戒などしない。ただ、いつでも戦闘態勢が取れるよう、男の足を見て、間合いを取っていた。気づかれることも無く。

「レクス、出て来い」

銃を腰に構え、男が手を振る。瓦礫の影から一人の男が姿を現す。
「え？ それ？ 大丈夫なわけ、そいつ」

レクスと呼ばれた男が姿を見せる。ひ弱に細い筋肉の少ない体。戦闘慣れしていないのだろう。銃の構えが明らかに下手だった。

「いや、君には言われたくないんだけど……」

だが、口は達者なのだろうか。平然と一言が漏れた。

「言うね？ 素人でしょ、あんた。衛生兵の分際で私に意見なんていいと思ってるわけ？」

「レクス、彼女は見た目こそ幼いが、階級は元帥だ。口には気をつける」

「えっ！？ げ、元帥なのですかっ？」

レクスの表情が一気に変貌する。

兵種は多岐に渡る。新兵、二等兵、一等兵、上等兵、兵長の兵と呼ばれる下階級、伍長、軍曹、曹長の下士官、そして士官である、准尉、少尉、中尉、大尉、少佐、中佐、大佐、准将、少将、中将、大将、元帥に分かれる。その中でセフィアは一般的な国においての階級は元帥。大国ともなれば大将として扱われる。その為はその態度は権力の元にある。だが風体は少女。故に大人たちの中では歪であり、対応も様々。

「まあ国によつて、大将クラスだけどね」

「お前を前線の部隊まで護衛してくれるサクラント・セフィア元帥だ」

「ねえ、その元帥ってやめてくれない？ 私、軍人じゃないんだけど？」

階級による上下支配が戦争では指揮に影響する。だが、セフィアはそれを嫌悪する。

「そうだったな。お前たちは社員だったか？」

「そう。私はセグレアの第三派狙撃手。だから名前の呼び捨てで良いよ」

小隊長とセフィアが投合する。従う兵たちは啞然としている。

「俺たちはここの守備があるから、応援には参加出来ない。この先は最前線だ。こいつのことは頼むぞ」

隊長がレクスに箱を渡す。

「それがワクチンってわけ？」

「は、はい。そうです。これを二日以内に届けないと前線の部隊が

全滅します」

急に言葉遣いを変えるレクス。セフィアはそこへ注目はない。「制限まであるの？ また面倒そう。それで、ここからの総距離は？」

「約四百八十キロはある。まあ戦闘を避けて通れば問題はないだろう。ここから先はいくつか戦線が分離している。中間の町以外の町は占領下に取りられている。気をつける」

隊長の言葉にセフィアが一息つく。

「車くらいはあるんでしょ？ 徒歩とか言ったら契約解除するからね」

「それは、僕がこれを運転します」

レクスが瓦礫の壁の向こうから、二輪車を押してくる。それは軍仕様に塗装された超大型自動二輪だった。

「こつちの方がこの先の道には相応だろう。生身になるのは仕方がないと思って諦めてくれ。上空の制空権も既に落ちている」

セフィアが盛大に息を吐いた。大型とは言え、積載量の限界がある。二人を乗せ、武器を載せてはそれで終わる。セフィアの持参したケースが乗りそうにはない。

「まあ、仕方が無いか。この辺りの戦闘はひとまず小康状態みたいだから、これ、あんたたちの隠れ家にも置いておいて。それからセグレアのルーシュって男に電話して荷物の回収を頼んでおいて。

これ、電話番号だから」

セフィアがいそいそとケースの中から持参する武器を選び始める。周囲の兵は近辺へ警戒しつつも、セフィアの動向を横目に見ていた。「ほら、何してるわけ？ 荷物あるんでしょ？ 水とかちゃんと用意してよ」

「あ、は、はいっ」

呆然と見ていたレクスをセフィアが叱責すると、慌ててレクスが自分のリュックから最低限の所持物を物色し始めた。

「準備整いましたっ」

レクスがセフィアに向かって敬礼をする。階級に支配されているのだらう。不快そうにセフィアが息を吐くが、何も言わない。額に小さな手を当てただけで。

「あのさ、それって何？ 私から意見が欲しくてやってるわけ？」

「はっ？ 何のことでしょうか？」

至極真面目に応える。二人が搭乗予定の大型自動二輪の後部には荷台代わりの小スペースが設置されてある。レクスは足元に、何が詰まっているやら大きなリュックを置く。

「何が入ってるわけ？」

「はい。ワクチンが二十本に包帯が十一本、オキシドール一リットル、水六リットル、輸血用血液五パック、簡易治療用手術器具一式、並びに消毒散布液五リットル、アルコール500ミリ、それから…」

レクスは続ける。その度にセフィアの表情に呆れに沈む。

「あのさ、私たちワクチン届けるんだよ？ 何それ？」

「これは自分の戦地医療用器具一式です。それから追加装備として、負傷兵の治療用器具も補填いたしました。準備は万端ですっ」

元帥と言う士官クラスのセフィアに敬礼を決めるが、セフィアは冷静に一言。

「必要なものはワクチンと私たちの水だけでいい。他は全て置いていきなさい」

「ええっ！？ まっ、待つてください。僕は衛生兵です。負傷した兵の治療に当たることが任務であります。何もありません。任務を遂行できません」

驚きながらも意見する。

「じゃあ、それ、どこに積むわけ？」

「それは、後部収納部に……」

言い終える前にセフィアが重音を零し、荷台部に銃を載せる。

「戦場において、銃が優先。敵のど真ん中に行くのに軽装備で行けるわけがないでしょ。ここはトレイシエールマスターライズの設置に

使用するの」

セフィアがレクスに限らず、様子を見ていた兵たちの奇異の目の中で、マスタライズを設置する。後輪が若干マスタライズの重みに潰れる。一般的な大型二輪とは種別の異なる大型自動二輪。車高も車幅も車長も小型自動車に匹敵、もしくはそれすらも超える。排気量も八千ccとという一般車すら凌駕してしまうほどに車体は強く重く、早く、陸上の二輪クルーザーと謳われるほどに価値のあるもの。だが、戦時においてはその爆音を轟かせるエンジンの燃費の悪さ、騒音、運転技術の熟練度、小回りの利かなさには悪評ばかりが連なり、路面状況の悪化に伴う交通の便の最終手段の輸送車両として用いられている。そして、今、それを使用すると言うことはここから先の路面状況は最悪に近いのだろう。だからこそ、セフィアはマスタライズを前の戦況には及ばない構造ながらも、明らかにそれが車載砲のように後部に取り付けた。

「いえ、ではワクチンなどが……」

搭載出来ないと言いたいのだろう。セフィアが自身の旅行ケースから小さなリュックを取り出し、レクスのリュックから最低限必要なものだけを入れ替えた。ワクチン、包帯、応急処置道具に水を二リットル。

「これで十分。あとは全部出してっと。ワクチンは自分で持って」
セフィアがレクスのリュックの中身を地面に引っ張り出し、マスタライズを収納していたケースから次々と弾倉や銃部品を入れていく。

「乗って。出発するよ」

セフィアがレクスを促し、半ば強制的に運転席に跨がせる。セフィアは小さなリュックを後部の収納庫に押し込み、弾倉などを詰め込んだリュックをレクスに背負わせた。

「うっ……あ、あの、お、重たいの、ですが……っ」

ただでさえ沈んでいた車体がさらに低くなる。

「そのまま背負って運転して。私はここから狙い打つから。落とす

たりしたらあんたの頭吹き飛ばすから」

セフィアがマスターライズに拘り、立ち乗り状態になる。座るスペースはレクスのリュックに支配されていた。

「おいおい、それで移動するのか？」

見かねて男がセフィアに問う。

「平気。慣れてるし。ほら、早くエンジンスタートして」

「いえ、ですが……」

わずかな出っ張りに立ち、マスターライズにしがみつくように乗るセフィアに、レクスも不安を隠しきれない。

「私の心配はしなくて良いの。自分の任務の成功だけを考えて。ほら、早く行く」

「は、はいっ」

リュックを蹴られ、弾倉の重みが背中から襲い、レクスがエンジンをスタートさせる。周囲に爆音が吹く。振動するバイクにセフィアの身体も揺れる。

「あ、忘れてた。これ耳につけといて。無線仕様の耳栓だから外さないですよ」

ワンピースのポケットからセフィアが両耳のヘッドセット取り出し、レクスに渡す。状況をイマイチ理解していないのか、素直に耳に装着した。

「それじゃ、この任務引き受けるから」

「気にはなるが、気にするだけ無駄だろう。仲間たちのことは頼むぞ」

レクスは良く聞こえていないのか、ヘルメットを装着し、バイクに備え付けてあるGPS装置に情報を打ち込んでいた。そこに隊長が肩を叩く。レクスが不思議そうに見る。

「そのヘッドフォン、完全防音だから聞こえてないって」

「らしいな。とりあえず、武運を祈る」

そう言つと隊長は、行けと指でサインを送る。レクスが一度振り返る。

「早く出発して」

セフィアがいつの間にか集音イクのついた片耳のヘッドセットを装着していた。セフィアの声に反応したレクスが肯くと、静かにアケセルを引く。だが、それでも騒音は激しかった。

「私の荷物、回収前に勝手に漁ったり失くしたりしたら、殺すからねえ」

走り出すバイクからセフィアが隊長たちに言う。男たちは銃を掲げ応えるように見送った。

「セフィア元帥」

「元帥はなし。普通にセフィアって呼んで」

走り出すバイク。レクスは両手を広げ、ハンドルを握って風を切り、セフィアは髪を風に靡かせつつ、楽しげな面持ちで立っていた。

「では、あの、セ、セフィア」

「何？」

互いにマイク越しに会話が通る。風にも邪魔されない音質は高いようだ。

「座らなくても大丈夫なのですか？」

速度は大して出ていない。セフィアの服は多少激しく靡くが、影響は無いようにセフィアは時折マスターライズを弄っていた。

「ベルトがあるから平気。むしろもっと飛ばして。このままじゃ日が暮れるってば」

セフィアは自分とマスターライズをベルトで固定していた。揺れの少ない、ある程度舗装された道を走っている最中は、両手を大きく広げ風を浴びていた。

「よ、宜しいのですか？」

恐る恐るな問いかけ。

「良いの。もしかして恐いの？ 戦場に比べたらこんな何でもないでしょ」

レクスの身体も背負う弾の重さに後ろに引き寄せられがち。安定はしているが、操縦には少々手間のようだ。

「常に背中に引張られ、セフィアが立っている状況で速度を出すのは危険かと思うのですが……」

銃身は若干ではなく、なかなか後方へ移っている。多少の速度であるならまだしも、速度の状態においては、浮き上がる空気抵抗と重心の不安定。一度前輪が浮き上がれば、恐らく立て直すことは

不可能だろう。

「ビビリすぎ。まだ加速しても大丈夫だってば。男の子でしょ。だつたらもつと堂々と行きなさいよ」

セフィアに叱咤されるレクス。傍目で二人が道を歩いていれば、間違いない兄と妹に思われるだろう。だが、事実は元帥と兵。戦争においては天地の差があるほどの二人。レクスはそのことも考慮に入れているのだろう。名前を呼び捨てに努めているとは言え、口調は下にあった。

「早く任務完了しないと、ワクチンを待つてる仲間が死んじゃうよ？ 良いの？」

セフィアの言葉に、レクスが思い出したように声を漏らす。

「私の心配する前に、仲間の心配をして。私は慣れてるし、馬鹿じゃない。分かる？」

「は、はい。し、失礼致しましたっ。で、では、もう少し加速させていただきます」

「一気に行くっ。道のりは長いんだから」

行程は約五百キロ。バイクの速度は五十キロ。単純計算で十時間。現刻は午後四時。乾燥地帯であり、南に位置するこの地域の日暮れはあと二時間ほど。

「夜間の走行は危険だから、三つ先の町に今日は泊まるから。あと二時間で着くように走って」

「は、はいっ」

町までは百キロはある。現速では日暮れぎりぎり。夜間は戦いも若干休まる。だが、夜間は部隊にとって活動の活発になる時。それまでにとりあえずの休息の場へ向かう。徐々に加速するバイクからセフィアは何もない荒野の砂塵に揺れる遠き地平線を見つめていた。

「あ、あの」

「何？」

風を切る速度が上がる。相変わらず背面に体の反るレクス。風圧も相成ってひ弱な身体には負担が増しているようだ。

「セフィアは、一人なのですか？」

「敬語は良いよ。私、十三だし。年下でしょ？」

「ええっ!? 十三歳なのですかっ!？」

その驚きに、車体が左右に振れる。セフィアの身体はさらに揺れる。

「ちよつとっ! 運転中はちゃんと運転に集中してよ」

「す、すす、すみません」

慌ててハンドルを戻るレクス。その動揺は大きいものだった。セフィア自身も把握していたのだろう。何も言いはしなかった。

「き、聞いても宜しいですか？」

「だからあ、敬語は禁止。レクス、何歳？」

いちいち名前を呼ぶのが手間なのか、短縮して呼ぶ。

「ぼ、僕は二十二です」

「ほら、年下でしょ? 私はあんたたちの軍に所属してるわけじゃない、他人なんだから警護禁止。分かった？」

「は、はいっ」

直りは遅そうだ。何もない荒野地帯。だが、路面は若干の傾斜を太いタイヤが重低音を発し進む。

「それで何だっけ? 何か聞いてこなかった？」

はためくワンピース。セフィアが全身を持って無抵抗を宣言しているようだが、セフィアの手と腰ベルトが固定されているのは、高射砲ほどの規模にも達する銃。バイクの武装ではありえない。流れる景色の中で見かける味方と思しき兵士たちの視線は、一瞬の風の中で警戒と不可解に色を溶かしていた。

「あ、はい。お一人で護衛をされるんですか？」

「私一人じゃ不安なの？」

セフィアの癩に触れたようだ。解釈の差異が招いた。

「いつ、いえっ。でも、その……」

言い淀む。正直な男だった。

「それでも私、今あなたたちが敵対してる国軍を半日前に勝利に導

いたんだけど？ 聞いてないの？ ラクス郊外の戦況」

走る。戦争とはまるで無関係の青い空と裸山。町も産業も何も無い無干渉地帯を走る一台のバイク。静かだった。風の音とエンジン音。木霊する音は旅行者のように軽やかに緩やかな傾斜を駆け上る。旅を彩る音色に、セフィアの身体は鳥のように吹かれ続ける。軍服にヘルメットとサングラスのレクスは、リラックスしているセフィアとは真逆に緊張した面持ちを崩すことが無かった。

「し、知っていますっ。さっき聞きました。え？ じゃ、じゃあ、セフィアが……？」

「そうだよ。私が治めたげたの。軽蔑する？」

悪戯に尋ねるセフィア。敵としてゲリラ軍を掃討する為に正規軍と契約し、成果を発揮した。そのセフィアが、今度は日も暮れぬ前に敵対していたゲリラ軍に加担している。レクスには驚き以外、他にはなかった。

「そ、そんな……ラクス郊外には、僕の知り合いも……」

「敵は皆殺しちゃった。きっと死んだよ、そのお友達」

ハンドルがぶれる。セフィアの小さな体が左右に揺れた。速度も落ちる。放心しているのだろうか。ヘッドフォンからは何も音は届かない。

「軽蔑したでしょ？ 私を殺したくなっただけ？」

敢えての挑発だった。それがセフィアだと誇示する為に。セフィアは笑った。死者を愚弄するように。

「どお？ 良いんだよ？ 私を殺したくなっても。私は軍の人間じゃない。ただ契約しただけだから」

怒りを誘うセフィアの言葉に、震える深呼吸が響く。風の音のよう。

「……ぼ、僕は」

「うん？」

呟きのようにレクスの言葉が小さく漏れる。セフィアは楽しげに受け取る。セフィアは怒りを見ようとしている。だが戦友を殺され

た可能性のあるレクスには、それを把握する余裕はないのだろう。

「……衛生兵です」

「だから？」

急かすセフィア。レクスがアクセルを引く。再び加速するバイク。ギアアクセルの針が振れ、強く加速する。

「……僕は、衛生兵です。だから、哀しいです。でも、それだけです。それだけなんです……」

セフィアの表情が意外そうに目が開く。口が小さくオの字に開いた。

「それだけ？ 声は怒りと悲しみの混合に聞こえるんだけど？」

「……戦争、ですから。僕も軍人です。覚悟が無いわけじゃ、ないです」

ヘッドフォンから聞こえる声は、堪えていた。

「戦地に赴いたのつて、もしかして初めてじゃない？」

セフィアが風の抵抗を受けつつも、荷台に設置したマスターライズの脚部に手を伸ばし、レクスの背負うリュックを漁る。重量と風圧にレクスは気づいてはいない。

「ど、どうしてですか？」

「だって恐がつてるじゃん。何も無いのに体震えてる。それに衛生兵って直接的に殺し合いしないもんね。通信兵と後方支援組みだったんじゃないの？」

セフィアの言葉に短く、はい、と答える。頂き付近に差し掛かったのか、峠道が平坦になり、速度が加速した。レクスがアクセルを離し、情性にて峠の下りに備える。セフィアは道の先を見てはいなかった。峠の下りには町への距離を示すように、路肩の岸壁の岩壁を結ぶ多彩な旗が、色とりどりに風にはためいていた。強風に煽られ、引きちぎれんばかりにはためく旗と、ほとんど靡かない旗。セフィアはそれを見ていた。距離にして旗のたゆたう峠の境目の岩山。セフィアは一瞬の風の中に何かを感じたのだろう。横目を向け、弾倉を取り出す。

「そ、それは……」

「別に良いよ。私の邪魔さえしなければ、ちゃんと守ってあげる。契約した以上はきちんと果たすよ、私」

口調に変化はない。だが、セフィアの動きは流線のごとくしなやかに弾倉を装填した。スライドはまだ引かない。安全装置を解除するに留まった。

「セ、セフィアは、どのくらいの……」

戦場を生きてきたのか。レクスの間いかけは区切られる。

「それはね、こういうことに、レクス気づけるかどうかってこと」

「え……っ?」

セフィアは下半身を屈める。腰ベルトのみに身を預け、サイトを覗く。体の大半はバイクの外に向いていた。スカートの揺れ間から白の脚部が支えに立つ筋力を引き出す。振動するバイクの中で、セフィアは全身を使役し銃口に安定をもたらす。それは銃と少女の一体した姿でもあった。路面すれすれまで伸びる太剣も重心を生み出している。レクスの頭上に、前方を向いていた銃口がセフィアの体重移動により、傾斜を増す。峠天頂部の旗に入る前にカーブに差し掛かり、車体が傾く。

「そのまま速度は維持。何が起きててもハンドルは路面に合わせて走らせること。良い?」

「え? あの……っ!?!」

その瞬間は、唐突だった。風を切る重低音の中に散発的に響く異常速度の衝突音。マスタライズのスライド部に火花が走る。訳も分からずレクスはハンドルを握り締める。頭上の銃口の剥く先を横目に三度ほど見て。

「びっくりしてハンドルきり過ぎないでよっ!」

言つが早いか、セフィアが引き金に指を掛け、引いた。

「うわあぁっ!?!」

だが、戦場に不慣れの男。頭上で火を噴くマスタライズの銃声だけで身を縮込める。速射砲のように、セフィアはサイトの先にある

峠の旗に打ち込む。四本の紐に吊るされる旗の数は悠に五百枚。空を覆いつくす旗の屋根が強風に靡く。

「しつかり前だけ向いて走れ馬鹿っ！」

ハンドルが恐怖に揺れ、セフィアの放つ弾丸が青空へ消える。数枚の旗に穴が空く。セフィアは不快だったようだ。狙いを外した。強風に乱れる髪を乱暴に振り払う。そしてサイトを覗く。バイクとの距離、およそ百を切る。ハンドルを取り戻すレクスを確認した後に、セフィアは再び引き金を引く。

「ビビるなっ。狙いが外れるでしょっ」

セフィアが叱咤する。その間も引き金はフルオートにより、射出を続ける。

「なっ、何？ 何なのですかっ!？」

バイクとの距離が五十を切った頃、峠の旗が爆発し、吹き飛ぶ。それは連鎖反応を引き起こし、次々と旗を燃やし尽くす。太陽がそこに落ちたような閃光を発しながら。

「焼夷弾。律儀にこの辺りの集落の境目に仕掛けてるの。旗の動きがおかしいって気づかなかったわけ？」

そして旗が炎を纏い。灰が花びらのように散る。爆発する風に、二車線の片車線に散乱していた砂が吹き飛び、砂の渦風を生み出した。

セフィアはサイトを覗き続けていた。銃口はレクスの頭上のヘルメツレクス接触するかしないか、微妙な高さで車道に構える。

「全く、私はインディみたいな冒険家じゃないってのに。レクスッ、左側を走行。ハンドル早く切ってっ！」
引き金を引く。

「は、はいっ。……わああっ！」

バイクは射出の度に速度をマスタライズに盗られる。レクスが状況把握もままならないまま、ハンドルをかすかに左に切る。レクスは思わず目を覆っていた。銃弾の貫通により、爆発したものは閃光を放ち、熱を降らせた。燃え散る旗の花の中に、爆発が全てを吹き

飛ばす。通過速度は秒速十七メートルほどだった。それは一瞬にして通過する。だが、吹き荒れる砂塵にレクスは恐怖だったのだろう。ハンドルに力が入る。前など見てはいなかった。恐怖にハンドルを握り締める。閃光と熱の中で、バランスが取れた走行が出来たことだけが、レクスには唯一だったようだ。

「ちよつ！ 馬鹿っ！」

峠の頂上部の岩壁の左を通過した際に、進行方向右路面が爆発した。左をとっさに通過したバイクも爆風と砂塵、反動に崩れ落ちる。右岩壁にレクスが慄き、左に切りすぎる。セフィアが背中を手を沿え、盾の剣を覆うケースを外すことも無く、左手に取り、前方へ突き出す。

「ひいつ！」

声にもならない恐怖にレクスは無我夢中でハンドルを取る。それが精々だった。左壁に接触は免れた。セフィアが突き出す太い剣がバイクと岩壁の間を隔離し、刃の削れる耳障りの金切り音と共に、火花が弾ける。

「もお、馬鹿馬鹿っ！ さっさとハンドル右に切って、体制整えなおしてっ！」

爆煙の中からバイクが突出する。砂塵が渦を巻き二人のバイクを見送り、セフィアが振り返る。右側の路面は崩れ落ちた瓦礫にせき止められていた。

「ちよつと、どっか止まれそうな場所に止まってっ」

「は、はいいつ！」

煙の奥は、青空と風の交差する灰色の大地がまだ続いていた。日陰のない荒野の路肩に徐々に速度を落とし、後続車も対向車もない中、レクスは方向指示器を出し、停車した。車体が傾き、レクスが足で支える。セフィアは即座にマスターライズと自身を固定していたベルトを外し、後部から飛び降りる。バイクの流線ボディには砂塵がこびりつき、元の色も変わり果て、傷も出来ていた。

「この馬鹿っ！ 何してるわけっ？ 死にたかったの？」

セフィアがレクスの隣に来て、盾の剣をレクスのヘルメット突くように押し当てる。片手で持ち上げたまま。

「す、すす、すみませんっ。で、でも、だっ、だってあんな急にだなんて……」

突然の爆発。慣れていないからこそ、怯え、立ち止まる。回避すら出来ない。ただ死に怯える平民ですらなかった。パニックになり手間を取らせるレクスに、笑顔のない本気のセフィアが剣を手向ける。それを振り下ろせば、レクスの身体は脳天から股間部までを断裂させられるだろう。いかほどの重量があるのか、セフィアの片腕の中に浮く剣は、風の中に枯れ果てるハゲワシの宿り木のように震えすらなかった。

「私は言ったよね？ このまま走ってって。貴方は私の護衛対象者。私の言うことに従っていれば、その命に傷をつけることはないの。なのに、びびっちゃってくれて。おかげでほら」

セフィアが剣を引く。その裏刃を魅せるように空に掲げる。光を乱反射し、煌めきはない。無数に傷を負った、猫の爪磨ぎ木の果てだった。花柄のケースはいつの間にか木の葉のように後方の路面に路傍の花を咲かせ、風の中に消えた。

「私の任務は貴方を無事に前線の兵の下へワクチンを届けさせること。まさかこんなところでこれを取り出す羽目になるなんて思わなかったけど。で、怪我、してない？」

「は、はい。大丈夫です……」

少女に怒声を浴びせられ、レクスは萎縮していた。

「なら、良いけど。ちょっと休憩しよ。心拍の上昇を抑えないと、またあんな運転されちゃ、この子も幾ら頑丈でも身が持たないもん」
セフィアが剣を降ろし、背のホルダーに治める。ホルダーの上から背負うリュックから水筒を取り出し、水を注ぐ。

「飲む？」

先に注いだカップを渡す。レクスは受け取る。セフィアはもう一度自分用に注ぐと小さな口元に運び、一気に飲み干す。

「あ、あの、怒って、ないんですか……？」

セフィアは先を読んでいた。両岩壁に張られた旗に取り付けられ、風にもはためかない旗。同時に右車線に撒かれた砂。周囲は荒野。吹かれた風に遊ばれた砂であるなら不自然はない。

「怒ってるよ。当然でしょ。自分で死のうとしてるようなことしたんだから」

セフィアの口調は無感情。表情も不変の無情。レクスは無情の叱責に言葉を詰まらせる。

「でも良いよ。私の落ち度もあるわけだし」

「え？ 落ち度なんてありました？ 僕には何が何だか分からないままなんですけど。結局、何があつたんですか？」

レクスもバイクを降りる。搭乗者のいないバイクは、わずかに揺れ、鎮座する。

「気づくのが少し遅れた。この風の中で旗が動かないのつてすぐに分かるはずなのに、ちよつと見とれちゃった。綺麗だったし。でもここが戦場なら、相手の狙撃手にやられたかも」

「で、でも、僕はそれにだって気づかなかつたのに……」

「当然でしょ。私と経験の差がありすぎるじゃない。それに路面の砂。あの砂、この地形にはない砂だったの。はつきりとは分からないけど、あれは一度乾燥させた砂だったかもね。撒かれ方が風向きに沿ってなかつたもん」

砂の中に隠されていたものをセフィアは打ち抜き、爆発した。その衝撃は対人地雷であり、軽車両ほどなら問題なく吹き飛ばすもの。セフィアの銃弾が打ち抜いた瞬間、アスファルトを抉り、岸壁を吹き飛ばした砂塵が吊るされた紐を全て引きちぎった。

「簡易的な罠ね。ゴムを踏むと爆発する安価な奴。でも旗に焼夷弾をつける辺り、趣味は最悪。もしあのままの車線を走行してたら、私たち今頃焚き火の枯れ枝になつてたよ」

誰が仕掛けたものか。セフィアはその安直な罠の仕掛けを読んでいた。走行する車両なり人員なりが地雷を踏む。踏んだものは即座

に吹き飛び、その爆風と熱に旗が燃え、備え付けられた焼夷弾が落下する。高度がある岸壁に備え付けられた焼夷弾は対象、又は地上に接触することで中に詰められたものが発熱、炎上する。

「あれはエレクトロン焼夷弾かも。あれだけ眩しとね」

「あ、それ、聞いたことがあります。エレクトロン合金の筒にテルミットを充填させて、テルミット反応の高温を利用した火災を起こさせる爆弾だと。でも、それはマーカーに使用することがほとんどで、攻撃に使うことはほとんどないんじゃないですか……？」

未だに口調は直らない。

「そう。だからこそ、これは罠。今だつて燃えてるでしょ？」

距離は置いた。約一キロほど。だがそれでも二人の視界は映し出す。地上に舞い降りた太陽の如き白の煌めきを。

「この手法は軍は取らない。姑息なやり方だし、何しろお金がかからない。作り方も安直。でも、簡単な手法だからこそ分かることもあるんだよ」

セフィアの怒りは自身の不手際の反省に抑制した。レクスは振り返る後姿で話を受け止める。煌々と輝き続けるエレクトロン焼夷弾。完全に反応が終わるまで、高熱と発光は水や土、現状下にあるものでは止められない。

「分かる、こと……ですか？」

水を飲み干し、セフィアがカップを受け取り水筒を仕舞う。

「そう。右車線だけに仕掛けてた。つまり、こつち方面から来るものに対して罠。この区域は戦闘終結地。引き上げた軍が仕掛けるにしておられない。でも、私たちが来ることを予測している人間がいたって考えたら？ 連絡は通ってるんでしょ？」

セフィアがバイクに寄り、マスターライズの銃口を取り外す。レクスがタンDEM使用のシーレクス乗せたままにしていたリュックから新たな銃口を取り出し、マスターライズ本体に取り付ける。

「は、はい。前線部隊からの緊急無線だったので、部隊に近い僕ら第四十八コマンドー部隊に任が与えられました」

セフィアが首を縦に数回振る。

「なら、私たちが来ることを知っているはずだから、こんなことはしない。そうになると、この辺りに今もいるか、それとも移動してるのか、まだ分からないけど民族部隊か、阻止しようとする勢力がいる。緊急無線は周波数拾いやすいから、傍受されたかもね」

セフィアの装着した銃口は小銃ほどの二十ミリ口径。グリップも固定車載銃の両手グリップではなく、狙撃超長銃用のシングルグリップに付け替える。銃口部には新たに銃口制退器マズルブレーキの反動軽減装置をつける。

「別のゲリラ？ この辺りでは聞いたことがないですけど？」

「でも、現に私たちは罠にはまりそうになってでしょ？ 何かありそうだね、この先は」

セフィアが表情を真剣に改める。閉じた口に指を当てていた。何の為にあのような仕掛けを施したのか。処理を放置した忘れ罠か、それとも意図的なものか。セフィアには情報が不足していた。だがセフィアは冷静を保つ。

「今日中に町に着きたいところだけど、ちょっと注視する必要があるりそう。ねえレクス。野宿した経験はどれくらい？」

セフィアが周囲に目を向ける。

「野宿は、ここ最近いつもでした。訓練所では三ヶ月の実地トレーニングは経験してますから、大方は平気かと」

セフィアが既に枯れたまま地に刺さる木を盾の剣で一薙ぎする。細い木は容易く散る。木の水分量を確認し、マスタライズに装着していたサイトから、前方を確認する。

「なら、今日はここから二十キロ先のあの小山を超えた辺りに野宿するよ。日も落ちてきたから、早めに場所の確保して、今日は休む良い？ 水の確保は望めないけど、これだけあれば一日は平気ですよ？」

「は、はい。でも、まだ日はありますよ？」

陽の高さは数時間は持つ。だが、セフィアは覆しはしない。

「今のうちに火を焚いて、夜間は光を出さない。早めに夕食を取ることでも大事なんだよ。これだけ遮るものがない荒野はね」

レクスが驚きの声を漏らす。知らなかった。表情は物語る。

「ここでの野宿は全部見られるし、あの小山の頂上部付近なら狙撃もしやすいし、あの辺りは木があるみたいだから小動物もいるかもしれないからね」

セフィアはリュックからやはり狙撃小銃用の二十ミリ弾倉を装填する。スライドは引かず、そのままにする。

「あ、あの、それってもしかして……」

レクスはセフィアのカスタマイズしなおすマスターライズに、何かを感じたのだろう。

「うん？ もちろん夕食用の動物を狙撃するんだけど？ サイトから見ても、この辺りで警戒するのは、さっきの峠だけみたいだからね。まあ地雷でもあったところで、私が狙い打つから大丈夫」

セフィアの当たり前のことを聞かれたような反応に、レクスは顔を引いた。経験がない。それしか表情は語らない。

「さ、往こうか。夕陽になるまでには火を焚き終えないと、炎と煙は最悪の居場所検知になっちゃうからね。ほら、早く運転」

セフィアが急かす。

「は、はい」

慌ててレクスが跨り、エンジンをスタートさせる。周囲に響く重低音の再来。セフィアが先ほどと同じようにマスターライズと身体を固定する。その背中の中の盾の剣は元の輝きを白の爪痕により、軽度損傷している。

「次は私を信じてよ。私が守ってあげることが契約なんだから、もっと信用して」

「す、すみません。じゃ、じゃあ出発します」

「ゴーゴーツ！」

セフィアが無邪気に空を指差す。遙か高度に雲を引く高高度航空戦略機が飛び立っていた。レクスはゆっくりとアクセルレバーを引

き、二人と銃を積んだバイクはまだ余裕あるボディを風と共に走らせ始めた。

4 t h ・ 白の少女

「風が気持ち良いね。浴びすぎると肌が乾燥しちゃうそうだけど」
小山を目指して走る二車線道片車線。消えかける中央線が流れ、
セフィアは空に両手を伸ばす。

「危ないですよ。きちんと掴っててくださいよ」

「平気平気。それよりももっと速度上げて。別に罨とかないから」
時折カーブの先、砂風に晒されるアスファルトをセフィアはサイ
トで覗く。危険がないと判断し、バイクは通過する。

「ねえレクスー？」

「はい？」

セフィアの髪は旗のように舞う。視線は必ずしも先を見てはいな
い。周囲の景色を楽しむようでそうでもない。

「レクスって、衛生兵なんでしょ？」

「はい。第四十八コマンドー部隊所属の衛生兵です」

セフィアがサイトを覗き込み、左前方の傾斜付近の様子を見る。

「でもさ、何でこれ、運転できるの？ 衛生兵の仕事じゃないし、
この免許って難しいって聞いているけど？」

サイトを覗きながらセフィアがスライドを引く。銃弾が装填され
る。風音にレクスは気づいてはいない。ただヘッドフォンの中から
聞こえてくるセフィアの声に応答する。

「これは趣味です。バイクが僕、趣味なんです。衛生学校にいる頃
に軍内にあつた教習所で取得したんです。戦争前は普通の教習所だ
つたんですけどね」

「ふーん。衛生兵な上に大型車種のドライバーライセンスがあるな
ら、結構いい状況に派遣されたりしないの？」

セフィアが目を細め、サイトの倍率を上げる。レクスの応えにはさ
ほど興味を示す様子はない。引き出す情報。それだけでしかないよ
うだ。

「あ、その、僕、いざって時に足が竦んで何も出来なくなることが多いので、ほとんど交代要員か後方の後方支援がほとんどで……」
レクスの自嘲。

「みただね。さっきも大したことないのに、私の剣、傷物にしたもんね」

だが、セフィアはフォローなどしない。責める。レクスも気弱な返答も聞き流した。

「あの、僕も聞いても……うわあっ！」

瞬間、レクスの頭上にあつた銃口が左前方へ傾き、火を噴いた。引き金の遊びは大きい、セフィアはものともせず、数発を山肌に向けた。銃声に驚くレクスの運転が再び揺れる。セフィアは既に銃を撃ち終えていた。硝煙がセフィアに衝突し、霧散した。

「ほんと、びびり君だね、レクスって」

揺れる体にセフィアは不安を感じることも無く、後方で反動により車体の揺れを自身で取り持つ。

「す、すみません。でも、撃つ時は言ってくださいよつ。いきなりはびっくりするじゃないですか」

「言ったらハンドルちゃんと握れるの？ 無理でしょ？ 聞き慣れるはずの銃声にすらびっくりするんだもん。そもそもそのヘッドフォンの防音ならほとんど聞こえないはずだよ？」

現にセフィアはまるで聞こえていないように反動を確認してサイトから顔を外す。

「で、でも、反動とか硝煙とか分かるじゃないですか。危ないですよ」

「大丈夫だって言ってるでしょ。子供だからって馬鹿にしないでくれない？ これでも私、高射、化学、調査、指揮、整備、通信、狙撃、偵察教導、野戦砲、士官、特殊戦技の山岳、冬季、砂漠、夜、特殊戦の教育課程は終えてるんだよ？ だから私一人でも中隊くらいなら楽勝で倒せるんだよ？」

何てことのない口調に、レクスは言葉を失う。

「レクスは衛生学校と歩兵、実地訓練の士官学校だけでしょう？　どつちを信用したら良いかなんて分かるよね？」

レクスの返答は口籠もりで、はつきりしたものではない。驚きも交えていた。

「それよりも、三百メートル先の岩場が見える？」

「え？　あ、はい。それが何か？」

「あそこでキャンプしよ。そろそろ陽も落ち始めてるし、お腹も空いたしね」

山肌に沿うように走り続けるバイク。開けていく視界の先に突出した岩があつた。セフィアは見晴らしの良いであろうそこを休息地にするようで、レクスも指示に従い、先を急いだ。

「ここですか？」

「うん。今のうちに火を使い終われば上りの様子は分かるし、下りからはその岩のおかげで見つかる心配もない。雨も防げるでしょ、ここなら」

降り立つ場は、路肩に張り出す灰色の岩場。上り車線からは見えているが、下り車線には岩陰が二人を隠す。セフィアはバイクの荷台から銃を降ろし、上り車線に向け、少々銃口を下げ、設置した。

相変わらず吹き抜ける乾燥風に、レクスが疲労を深呼吸に吐き出す。「ちよつとバイク借りるよ。レクスはそこらへんの枯れ枝使って火、起こしておいて」

「え？　セフィア？　まだ未成年じゃ？　つて、免許はないですよねっ！？」

「んっ、と」

小さな体が大きなシートを跨ぐ。両足は届かない。跨ぐ腰部はワンプイスが開き、下着が露わになる。レクスは視線を外す。セフィアは気にかけることもなく、スターターボタンを押し、アクセルを吹かす。

「ど、どこに行くんですか？　運転なら、僕が……」

銃を構える時にはなかつた、不安定感。レクスには、すぐにこけ

てしまう補助輪を外したばかりの自転車に乗る子供に見えていた。

「平気平気。さっき撃った食材取ってくるね。荷物番と火起こしは頼んだからね」

レクスの安全運転とはまるで違う。暴走馬を跨ぐロデオ乗りの少女だった。数回エンジンを吹かし、ギアを入れ替える。

「うわっ！ ギアが重過ぎるんですよっ！ 低速回域でゆっくり走らないと滑りますよっ！」

岩場に白煙が霧のように立つ。後輪が激しく焦げ臭さを立て、回転する。マフラーは轟音を奏でる。マフラーの役割を果たしてはいないほどに。だが、セフィアは楽しげに笑う。そして、ギアを入れた瞬間、周囲に滑走を始める機体の飛翔の白煙と風がレクスを襲う。「うわっ、げほっ、えほっ……セ、セフィア……？」

遠ざかるバイクのエンジン音が反響する。揺らめき消える焦げ付く煙の先に見えた下り車線には、既にセフィアの姿はなかった。

「嘘……。あんな子供があればを運転できるはずがないのに……」
取り残されたレクスは呆然と反響してくるエンジン音に、セフィアが走る姿を想像していた。セフィアの名乗る年齢は十三。二輪クルーザーと呼ばれる超大型二輪は三段階の免許を踏まえ取得できる。どの工程もセフィアは年齢が届かない。だが、響いてくるエンジン音はレクスの安全運転とは異なり、ギアチェンジを繰り返し、重低音の重さが増していく音ばかりだった。全ての事象が常識を逸脱するセフィアに、レクスは言葉を失う。

「僕の護衛は、何者なんだろう？ 見たことないよ、あんな女の子が速射砲みたいなこれとか、バイクを運転だなんて……」

レクスが設置されたマスタライズに触れる。安全装置は解除され、いつでも攻撃、迎撃は可能。引き金には触れず、グリップを握る。

「これは……何だ？ 見たことないな、こんな銃」

三脚のような脚に取り付けられるチューンガンのような形状。だが、弾倉もスライドもバレルも全てが世に出回る銃とはかけ離れた形状。銃という範疇ではない。レクスの印象はそれしかなかった。

「お、重い……。あ、あんなに軽々なんて、無理だ、これ……」

グリップを握り、サイトを覗き、向きを変える。だが、銃口はピクリとも動かない。何もロックはかかっていない状態で、レクスは全身を使い、わずかに銃口の向きを変える。それが精々だった。

「セフィアって、本当に人間の女の子？」

主人のいないマスターイズは静かに主の帰りを待つように、レクスが元の位置に力を込め、戻す。

「とりあえず、火を起こしておいたほうが良いのかも……」

置かれた荷物をレクスは漁り、持参していたライターと周囲の枯れ枝を探しに出かけた。

《……路面確認。被害形跡なし、だ》

《隊長つ。こちらの岩壁に走行接触らしき傷が伸びています》

《どうやら突破されたらしいな。薬莖もいくつか落ちている》

突き出す岩場を後にするレクス。その上にある山頂部の崖壁に、見下ろす影がレクスと、眼下に停止しているバイクを見つめる。手にしたトランシーバーには音声が垂れ流される。

「……標的、目視確認。突破は、容易に、こなされた。先に、出られる？」

《分かった。俺たち強襲部隊が月夜に仕掛ける。そちらはその後を任せるぞ》

「……うん、ボクは、任された」

セフィアのバイクを目視する。その目は無感情に無愛想。先ほど撃ったものはセフィアとレクスの夕飯になるであろう、獣を狙撃した。セフィアの姿が何かを持って歩いている。だが、距離があり、その姿を鮮明には目視出来ない。だが、無線を持つ手をだりりと下げる少女は、その姿を克明に記録すべきレンズのように見下ろし、ホワイトカラーのロングヘアーがセフィアのワンピースのように舞っていた。

「……セフィア……でも、ボクは、やる……」

少女の手には武器はない。だが、腰には細いものが刺さっている。

鞘に収められるそれは、わずかな曲線を描いていた。

「……全ては、契約の名の下に……」

白髪の少女は岸壁から身を投げる。抵抗することなく、着地に生ずる衝撃を緩衝する為に身を回転させながら、枯れ枝を拾いに姿を消し、銃の見張りを疎かにするレクスがいた突き出し岩に落ちた。

風に舞い、何の音もなく少女は身を屈め足を着く。片足に衝撃を受け止め、片足は伸ばしバランスを取る。衝撃を受けた髪だけが大きく揺らめいた。

「……ワクチンは、破壊。残存兵の、位置、情報特定。ボクの任務……」

少女の口調は静かで小さい。衣を正すように立ち上がると周囲を確認することも無く、無人のトレイシエールマスターライズへ歩み寄る。だが、手は出さない。視線を先に動かし、首が後を追う。それはレクスの背負わされたセフィアの武器類の入ったリュック。少女が手を掛ける。

「……どこ？ ワクチン……」

乱雑にリュックを開け、一瞬、中の様子に眉間に皺が寄るが、すぐに無表情に戻る。中にはセフィアの武器しか入っていない。表面の弾倉やカスタマイズ部品を見てすぐ搜索を断念する。まるで知っている。この中にはそれしかないことを。カモフラージュを施しているという線は、この少女の頭には初めからない。それと同時に理解している。セフィアがそこまでしてワクチンに気を使うことをしないことも。少女はリュックを押しつけ、立ち上がる。次の搜索の前に目の前にあるマスターライズ。そこへ手を伸ばす。

「これは、威。なら、ボクは……」

少女は腰から武器を抜く。夕陽に煌めく一薙ぎの剣、日本刀。主無きマスターライズは少女に背を向け、上り車線を向いたまま。

「悪く、思わ、ないで……」

少女が刀の鐔に親指をかけ、鯉口を切る。取り出す刃は傷一つ無い銀の輝き。刃と峰との膨らんだ鎬には、乱れる刃紋が波打つ。下

緒を解き、鞆を空いた手に持つ。

「……………」

だが、背後に枝を踏み割る音が一つ。下方から振り上げようと構える刃を止める。

「あ、れ？ ……えつと……………」

触れる瞬間、少女が小さく反応を見せる。やはり目が追い、首が動く。瞳は鋭く閉じられている。両手に枯れ枝を抱えるレクスが立ち止まる。警戒ではなく、この場において少女がいることが不思議で仕方がないという顔を浮かべる。

「……………ワクチンは、どこ……………」

レクスの非武装と、腕の衛生兵の腕章を即座に認識する。

「え？ ちょっ、な、何なんですかつ？」

下ろした刀に休まるものを与えず、切先をレクスの喉元に突きつける。その瞬時の行動にレクスは気づかず、気づいた時には夕陽が直角に曲がり瞳を貫く。抱えていた枝を落とし、両手を空に挙げる。「ワクチン……………どこ？」

切先は震えない。セフィアの銃同様に抱える腕の力は固定物のように揺るがない。

「え？ ワクチン……………？ ……つ。し、知りませんっ」

返答に、閉じかけの鋭く藍の瞳が真意を読み取る。レクスは瞬間的に悟ったのだろう。刀を手向ける少女の狙いと、自分たちの存在との対立関係を。セフィアの言葉にあったように。

「ワクチンは、どこ？ ……無抵抗を、殺しは、しない。それは契約……………」

聞かなかったことにされる。状況証拠と根拠のある少女には、事実のみを受け入れる器しかない。

「な、何者ですか？ 軍の人間じゃ、ないですよ……………」

少女の服装。それは黒の装束。動きやすさを追求したのか、スカートは袴の折り目の入ったロングスカート。上は胸元と腕の開いた皮。夕陽を宿す紅色の薄い瞳。軍の人間の装束でも、戦術でもない。

単騎攻め入る軍人などいない。いるとすれば戦況の魔に取り付かれた愚者か、死の瀬戸際に発狂した新兵。だが、少女は違う。状況も違う。争いの空気は流れない。威圧的な瞳孔と恐怖が疑問に変わる静けさ。

「ボクは、契約の元に、任務を、遂行する。ワクチンは、どこ……？」

名乗りはしない。だが簡易的な目的は告げる。

「どうする、つもりですか……？」

若干顔を反らし、視線だけを少女にレクスは向ける。

「どこ？」

答えず問う。刃は近づく。レクスは下がる。少女は動かず、答えを待つ。

「教えられません。素性も分からないものを信用する事は出来ません」

「……そう。なら探す。さよ、なら」

「っ！？」

レクスが身を屈める。頭部のあった空間を刃が薙ぐ。風が切られる。だが少女は気だるげな眼差しで見下し、刃を直角に向きを変える。レクスは刃を見上げることも無く、右に転がる。刃が降る。

「わっ……くっ……」

「無駄」

レクスが四つん這いに勢いを付け、立ち上がるうとする。少女が刃を振り上げる。軍服の上着を擦れ、生地切れ目が走る。その勢いにレクスはバランスを奪われ、転がる。

「最後。……ワクチンは、どこ？」

仰向けに尻餅をつくレクスの眼前が夕陽に紅く燃える。白の長髪がオレンジに染まる。炎を纏う少女が、燃える剣でレクスを貫かんとす。

「う、あ……」

先ほどとは異なる少女の殺気。レクスは日本刀の無の言霊に既に

貫かれていた。

「なら……一太刀で、楽に……」

「……っ」

抵抗は無かった。レクスのせめてものは、頭部を守る両手の丸みと、全身の縮こまり。兵士の姿ではない。少女は冷酷に刀を引き、顔を隠すように腕を自身に廻すその隙間に狙いを定める。切り雑ぐのではなく、突く。それは少女の慈悲。身体を一つに残し、最低限の太刀筋だけを残す。それだけの為に、命乞いのように丸くなるレクスを見下す。

「！」

だが、刃は時を経た所で何も来ない。遠くにセフィアのバイク音が岩肌を這い上がってきた。少女の視線はエンジン音を確認し、レクスを再び見下していた。

5th・セフィアとレクスの世界観

「……………」

レクスの閉じた腕がわずかに開き、光を取り戻す。

「……………何してるの？ お昼寝？」

「へ……………？ あ、れ？ セフィ……………ア？」

開いた光の中に、風に吹かる髪。暮れだす夕陽にブラウンヘアの変貌。

「そうだけど？ さつきから何してるの？」

不思議そうに視線を向けるセフィア。レクスの体勢は死を待つ覚悟の出来ていない者の痴態。

「あ、あれ？ あの女の子は？」

レクスを見下ろすセフィアは首を傾げる。

「女の子？ 私しかいないんだけど？」

パチパチと水分の弾ける音と白煙が薄れる焚き火が、冷え行く山間の空気を空へ持ち上げる。

「で、でも、今さつき、ぼ、僕襲われたんですよ。セフィアからの剣を持った女の子にっ」

音もなく姿を消し、入れ違いに立つセフィア。レクスには二人の入れ違う瞬間など聞こえも見えもしなかった。極度の死という緊張感に感覚の麻痺が、全ての外況を遮断していた。

「私くらの？ 剣？」

目を細め、顔を傾げる。表情は険しい。足場も周囲も岩場。足跡は残らない。セフィアが周囲を見回すが、散り一つは風に消えている。

「まさかね……………そんなはずはないし……………」

顎に手を添え、セフィアは呟く。レクスは緊張が解けたばかりに座り込む。

「ねえ、レクス」

「は、はい？」

レクスを見下ろす視線には殺気が宿る。それは怒の情を交えている。だが疑いが強い。

「その子、私と同じくらい髪の毛で銀髪じゃない？ それと剣って言ったけど日本刀じゃなかった？」

「は、はいっ。そうですねっ、そうでした。僕たちの荷物漁ってたんですっ。顔があつたらいきなりワクチンはどこだって、切りかかってきたんです」

レクスは状況が分からず、ただ起きたことを話す。興奮の言葉にセフィアは険しさを増す。

「……何で？」

「え？ 何がですか？」

セフィアは把握したようだが、レクスは説明を要求する。

「どうして向こう側に……？ ううん、それとも私が狙い？ セグレアが私を？ そんなはずは……どう言うこと……？」

セフィアには届いていない。だが理不尽が起きた。不文律が回り始める。セフィアは横髪を弄る。レクスが立ち上がる。上着の背中とは二つに分かれ、風にたゆたう。

「こ、これです。斬られたんです」

それを見せる。セフィアが触れる。繊維一本一本を断裂する直刃の切れ味。セフィアは首を振りながら離す。

「……とにかく、気をつけることが増えたよ。楽には終わらないよ、この任務は」

一人納得し、なにやらリュックを漁り、胸に何かを抱えると、車線側に小さな穴を掘り、そこに何かを捨てるように埋めた。そんなセフィアに、レクスは終始首を傾げるしかない。説明を求めようにもセフィアは聞く耳を持たず、ただ同じ作業を数回繰り返し、レクスの声は届かなかった。

「よし、大丈夫。狙いはレクスじゃない。さつき斬られたのは姿を見られただけ。証拠を残すなんて馬鹿のすることでしょ？」

狙いはセファイアが背負っていたリュックの中にあるワクチン。もしくは自分自身だとセファイアは考えた。だが、いずれにしてもセファイアは納得いく表情を見せず、周囲を観察していた。何も無い、ただの大自然の中を夕陽に冷える山風が駆け抜けるだけだった。

「はい、焼けたよ。調味料持ってきてないから素材の味しかないけど」

焚き火に焼かれる肉と滴る油。火の粉が空に還る。渡される枝。刺さるものは香ばしい肉。それだけ。

「あ、えつと……」

受け取ることは受け取る。だが、どうするべきか、セファイアを見るレクス。

「食べないの？ 食料、それしかないよ？」

既にセファイアはかぶりついている。小さな口は焼けた油に艶を持つ。背になる岩壁にトレイシェールマスライズの影が揺らめく。

西の日は赤く空を染め、東の月は星空を率いる。二人の距離は影一つ。間にワクチンのリュックが壁を作る。

「その、何て言うか……」

辺りには焼ける匂いに混じる血の匂い。セファイアが勘付く。

「男でしょ。これくらいしないと戦場じゃ生き抜けないよ？」

安寧の地ではない。レクスは身を以って、この場が危険だと認知した。だが、レクスにとって、その恐怖よりも脳裏に焼きついている小一時間前の調理。

「それにいつも食べてるでしょ？ お店に売ってる肉だって、誰かが捌いてるから食べれるんじゃない。肉塊が木に成る？」

「いえ、分かってはいるんです……。ただ、目の前で見るのはどうも……」

戦争において幾らの屍を見たことか。セファイアが狙撃して仕留めたのは子山羊。血抜きした血液が突き出す岩場から闇夜に消える。だが、臭いは残る。そして目の前で捌かれる様子を目撃してしまったレクス。手には香ばしさを漂わせ、空腹を促す肉がある。セファイ

アは味気なさを気にかけることもなく食す。だが、レクスの食指は動かない。

「衛生兵なのにほんと坊ちゃんだね」

最もレクスにとって痛い箇所を突く。臭いを嗅ぎ、舌で突く。恐る恐るセフィアを見た後に、前上下歯で肉を噛み千切る。小さな肉片。ゲテモノではないのだが、目の前で首を切られ、皮を剥ぎ、血を抜かれ、内臓を取り出され、食肉と化す山羊の姿がいちいち彷彿するのだろう。噛む力は弱かった。

「……あ、れ？ おい、しい……」

だが、飲み込むと同時に、表情に驚きが表れる。セフィアは下らない事を聞いたように噴出す。

「おつかしー。子山羊なんだから肉質は柔らかくて美味しいに決まってるでしょ？ 放牧よりは硬いけど、同じなんだから何今更なこと言ってるの？」

街のリストランテ以上の飲食店に赴けば、子山羊の肉は重宝される。赤ワインソースがけ。スペアリブは肉質が柔らかく、子山羊だからまだ臭みも少ない。人気の料理の一品だ。

「あ、そっか。そうですよね……」

レクスの苦笑。店で食べるものとサバイバル料理。差はそれしかない。後は野生の山羊の肉は筋肉質であり、脂身が少なく少々硬い。放牧されたものに比べれば味は落ちる。だが、同じ肉だ。それを食せる今は、兵糧米を飯盒はんごうで炊き、味気ない野菜と食うよりは断然空腹は満たされる。想像さえしなれば。

「人って、幸せだよ。でも、知らなくてもいいことを知らないから幸せなだけで、知っている人にとってはそれは感じ方が違うんだよ？」

食肉加工業者の人間にすれば、店頭に並ぶ肉を見る度に即座に思い浮かぶ。自らの手で動物の命を奪い、その皮を剥ぎ、骨を断ち、肉を切る。それを店頭に並ばせる。だが、何も知らず運ばれてくる無数の家畜。食される為に生かされ、食される為に殺される。

「……そ、それは、そうなんですけど……」

「屠殺ととくって言うの」

「え？」

セフィアの一言。聞き覚えの無い言葉に首を傾げる。

「食肉や皮革を取る為に家畜を殺すこと。そしてこれは捕殺。ねえ、どっちが動物にとつて自然な死だと思う？」

子山羊とは言え、二人の前の焚き火に焼かれる肉量が多い。空腹にレクスの手は徐々に動くが、セフィアは二本の枝についた肉を食すと、唇の油を拭き取り、水を飲んだ。

「知ってる？ 昔は私が今したみたいにナイフで頸動脈を切ったり、心臓の血管を直接切ったり、首を落としたり、銃で頭を撃ちぬいたりして食肉加工してたの。最近は動物愛護の観点から炭酸ガスの麻酔とか感電とか、極力苦しまないように加工するの」

「あ、あの、ぼ、僕、今食べてるんですけど……」

レクスの手が止まる。セフィアはどこか楽しそうにそれを小さな笑みで流す。

「知らなかったでしょ？ 当たり前に見える物をそうやって加工している人がいるの。レクスは今、その人と同じ立場で肉を食べてる。どう思う？」

「食欲が、減退してます……」

セフィアの言葉と先ほどの捕殺。思い出せば菜食主義に転換したくなるだろう。

「でしょ？ でも、それは最初だけ。可哀想って思うからそう感じるの。でもね、きっと毎日そうやって食べてると分からなくなるんだよ」

セフィアが枝を一本取り出し、突き出し岩の向こうに投げ捨てる。遙か眼下の闇の中を何かが駆ける音が風と共に吹き上がった。

「人は可哀想とか残忍だつて言うの。でも、自然界じゃそれが普通。人間の方がおかしい。分かる？」

弱肉強食。草木は小動物、草食動物に食され、それらを肉食動物

が食す。それらの死体をバクテリアが分解し、草木の栄養になる。そして繰り返し返される。

「食物連鎖なのは分かりますけど、それとこれは、違いますか？」
「同じだよ。人間だけがわがままにその連鎖を抜け出して、草花から肉食動物まで食べる。野菜や果物を殺すのは収穫。魚は漁。動物は加工してそれぞれの命を奪ってる。でも、実感ないでしょ？」

セフィアの話に、レクスは完全に食指を止める。何を言いたいのか考えようとはしているようだが、答えに辿り着かない。眉を寄せ、皺が生まれていた。

「戦争はね、それを人に移し変えてるだけなんだよ。殺しても食べないけどね」

あはは、と笑う。レクスは笑えなかった。セフィアの話が繋がるとは思ってなかったのだろう。

「でも違うこともあります。……生きるために、動物の命を食しているわけですから」

「そうだね。でも、知らない人は本当に命を思って、ご飯、食べてると思う？」

食事をする際、国によりことなる習慣がある。共通するものは祈りを捧げる。野菜、魚、肉を食す。すなわち命を食べ、永らえる。逸脱する連鎖。しかし、人は祈る。その祈りの意味をどれほどの人間が理解した上で祈るかは、特定のしようはない。だが、少ないだろう。セフィアの目は炎を眺めていた。

「いい勉強になったでしょ？ こうして私たちは生きて、殺してる。恐がることも、食べられなくなることも、哀しくなることも当たり前なんだよ。だからレクスは正常であって、異常。戦争も一緒。殺しすぎて慣れちゃうんだよ」

セフィアが笑う。レクスは首を傾げるしか出来ない。

「私からの命の授業。レクスは早く任務を終わらせて家に帰ったほうが良い。戦場においても足手まといになるだけだから」

唐突に逸れる話に困惑する。

「ど、どうしてですか？ 僕は衛生兵として任務は果たしていますよ？」

「動物一匹殺して食べられないのに？ 今まで人の血を見てすぐに対応できた？」

セフィアはレクスを戦場から引き離そうとしている。弱い男だから。戦場には不相応な男だと。

「そ、それは、研修と、実戦で何度か……」

語尾がか細さを増す。

「前線の戦闘って見たことある？ ないでしょ？」

凶星を突くセフィアは、優しさを合わせない。事実を突きつける。

「今まで、どんなことした？」

引き出す情報に、レクスは隠さずに沈黙を破る。

「そ、その…… 実地要請は今回が初めての出兵です。あとは基地待機か、医務室勤務でした」

恥ずかしがることは無いのだが、レクスはセフィアを見ようとはしない。食指の止まった二人の鼻に、肉が焦げる臭いが炎の中に消えた。セフィアは突き刺していた肉枝を焼き火の中に放り込む。弾ける油がパチパチと火花を散らす。

「軍に入隊は志願？ 召集？」

「召集、でした。それまでは、田舎の診療所で助手をしてたんです。セフィアが納得したように声を漏らす。

「なら恐がるのも分かるね。平和だったでしょ？ そこって」

田舎の診療所で助手。セフィアの想像は、のどかな自給自足の安寧なる田舎で、レクスが村の人間たちと毎日穏やかに過ごしている光景でも見えているのか、おかしげに笑む。

「でも、空爆にあつて、村は崩壊したんです。僕が召集されてから一月足らずでした……」

「そうなの？ それはご愁傷様ってやつだね」

「はい……」

セフィアには哀悼の感情は無い。レクスの握る拳を見ても、何も

気遣いを掛けない。

「両親と妹も、死にました」

「人はいつか死ぬ。平和でも、戦争でも。運が悪かった。そう思うか、どこかにいるって妄想してれば人はそれで暫くは強くなれる」

それは気遣いではなく、一時の逃避による生術。レクスは啞然とする。

「戦場に弱い人間は要らない。市民ならともかく、軍人なら、悲しみに暮れる前に果たすことをする。悲しむのはそれからだよ。じゃないと、殺されるよ？」

悲しみと言う油断は、決断を鈍らせ、ミスを犯し、突かれる。その先にあるものは死。戦場は生死しかない。

「で、でもっ、戦争なんて何も意味が無いじゃないですか。人が殺されるだけなんですよ。そんな後から悲しむなんておかしいじゃないですか」

レクスが言い返す。だが、セフィアは冷静に言い放つ。

「違う。戦争は商売。得るものはないなんて嘘。武器、政治、経済、物流、人員、資源、技術。全てが商売される。何も得られないのは日常。戦争は貧富を逆転させる好機。政治家も戦争で他国との国交を作って、利益を探す。軍人は撃墜、殺人の多さに上級の憲章がもたれる。市民だって破壊された町の再生に商売を始める。お金持ちが貧乏になって、貧乏がお金持ちにだってなる。人が殺し殺される。でも、人間は欲の塊。どんなに哀しいこと、辛いことがあっても、人間はお金の為になにかを始める。国同士の喧嘩じゃないんだよ、戦争って。この世界で最もお金が動く、ビジネスなの。だから私たちセグレアは、契約の下に戦場にいる。そこは莫大な利益を生み出す、神の戯画にしかないんだから」

セフィアの長い言葉は、レクスを黙らせる。

「戦場でどれだけ良い言葉を吐いても、そんなものは全てが道化。その裏でお金が動く。利益が循環する。だから戦争は起きて、その後には善者を立てる。そうすれば市民は再生に立ち上がる。全てはこ

れ、でしかないんだよ、戦争なんて」

セフィアの小さな指が輪を作る。それが何なのか、その話を聞いて分からないようでは、殺される家畜も同じ。と、セフィアが笑った。

「じゃ、じゃあ、セフィアは、これまで、どれくらいの人を……？」
手に掛けたのか。その言葉の事実の確証を得ようとするような問いかけ。

「私？ そうだねえ……軽く一万人くらいは殺したかな？」

レクスの瞳孔が揺れる。口が小さく開き、何かを言い出すように動くが、声は出ない。

「心配しなくても、私は軍人しか手に掛けない。だから全部軍人だよ。武器を持った、ね」

市民は一人も殺してない。セフィアは明るく言う。レクスはさらに驚きに、ただ隣を見るしかない。

「い、いつから、そんなことを……？」

恐怖を感じながらも、レクスも同様に情報を欲した。

「昔から。セグレアに身を置いて以上、それが私たちに出来ることだから」

レクスは、意を決していた。幾度か聞いた言葉。それが示すものが一体何なのか、セフィアのことを知るには、それを解き明かす必要があると踏んだ。

「あの、さっきから言ってる、セグレア？ って何なんですか？」

問いかけに、きょとんとしたセフィアの目がレクスの真剣な表情を赤く映す。

「セグレア？ 知らないんだ？ まあ正規軍じゃないから仕方が無いのかもね」

状況はゲリラ軍所属のコマンダー部隊衛生兵と、部隊が契約した少女。状況においての不利はセフィアとレクス。

「有名、なんですか？」

「有名と言えば、知られてる。戦争専門の商売機関だから」

だから、一般には名を馳せない。その一言に、気づく。

「武器商ってことですか？」

「ちよつと違うかな。セグレアは確かに独自の武器の開発、輸出もしてる。でも、一番の商売道具は、私たち」

戦争において、もつとも効率的に商売を行うのは、武器商。対立国の比重を受けることなく、金銭されれば、公平に武器を卸す。それで人間が死のうと兵器データとなり、蓄積され、より強力な武器の開発に繋げる。だからこそ、戦争を根絶させない。させては商売が成立しない商業。

「え？ セフィアたち？」

「そ。私たちはセグレアに所属する傭兵みたいなもの。市民を殺さず、依頼側と対立する、武器を持つものを駆逐する。それが基本の契約。私たちは契約を果たすことで生きることが出来るの。だから戦争で人を殺す。戦争を終わらせる為に。そして、戦争を根絶させない為に」

矛盾している。だが、セフィアは何も言わない。

「えつと、じゃ、じゃあ、セフィアは、その……」

言い淀む。セフィアが分かっているように肯く。

「気にしないで。生きる世界が違うだけ。私は商品。契約に生きることがセグレアにある居場所だから」

だから人を殺すことに躊躇いを持たない。それが契約だと割り切れている。レクスは下唇を口内に納め、鼻から息を吐いた。

「恐くとか、哀しく、思わないんですか？ 軍人だって家族はいるんですよ？ 市民を殺さないからって、軍人だって、人間じゃないですか？」

「そう、だね。でも、それが契約だし、どちらかが終わらないと戦争は悪化する。招集兵は可哀想に思う時もあるよ。でも、志願兵にはそんな情けは掛けない。それが敵なら私は殺す。私が私であるために果たすことが、セグレアの契約だから」

セフィアが立ち上がり、焚き火に砂をかける。白煙を立ち登らせ、

徐々に炎は消えていく。焦げ臭さを漂わせ。

「あ、あの、何を？」

「日が暮れるでしょ？ 火は消すの。まあ、無意味かもしれないけど」

セフィアが苦笑した。既に見つかった。レクスの先ほどの話を忘れてはいない。

「とりあえず、仮眠とってから明け方に出発しよ。夜道を走るのには危ないし。私が先に一時間くらい寝るから、交代で見張りとか仮眠ね」

「え？ あ、はい……」

リュックの中の一つの間に押し込んでいたか、一枚の毛布。セフィアはそれを被り横たわる。

「あれ？ え？ 僕、見張り……ですかっ!？」

焚き火も消え、吹き降ろし吹き上がる山風。涼ではない、冷をもたらす風の中、レクスは固まった。

「み、見張り……え、えっと、と、とりあえず、銃、ですよね……？」

バイク傍にあるリュックの中を漁る。明かりは無い。微かな月明かりの中で、身を守る剣となり盾となる銃を探す。小銃が一丁。レクス自身の支給品。小銃を手にしたレクスは、落ち着き無く周囲を歩く。安全装置を外すことも忘れ、銃を腰元に構える。バイクと大きなリュック、そして立て掛けられている太剣。そこにセフィアは眠っていた。暗闇に恐怖し、足の震えるレクスとは真逆に、安らかな寝息を奏でている。

「寝顔は、こんなに可愛いのに……」

暫く周囲に警戒を張っていたレクスが何もないと判断したのか、セフィアの隣に、岩壁を背にして腰を下ろした。

「子供、だよな。どう考えても。なのに、どうしてこんなところで、あんなものを……」

すぐ傍に鎮座するマスターライズと盾の剣。少女には歪すぎる武器。その組み合わせの疑問が晴れたわけではない。レクスには何故こん

な少女が戦場に生き甲斐を求めているのか、そしてそれに応えようとする対象であるセグレアについての不審のようなものが募っていた。

「温もりを知らないのかな、セフィアは」

人を殺すことに躊躇しない。人の温かさを知っていれば、必ず躊躇いが生まれる。

「いや、そんなことは無いはず。助けくれたじゃないか」

首を振り、その考えを払拭する。畏に怖気づいた自身をフォローした。それが契約だと聞かされても、納得できるものは、レクスの中では人としての思いだと、思い込むことが正解だと思っているようだ。

「この子は、きっと、飢えているんだ……」

愛らしい寝顔。戦場において銃を放つことを遊びのように捉え、敵を殺戮する。レクスは光景を知るわけではない。だが、人として持つ感情は理解している。だからこそ、セフィアの寝顔に、見入っていた。

「とにかく、今は僕がしつかりしないと」

明かりの無い岩に背を預け、レクスは眠るセフィアのその安らぎを守るうと、目を光らせた。

6th・セフィアとサクラ

《……ゲリラは二人だ。一人は衛生兵。もう一人は例のガキだ》

《戦場の冷花は仮眠を取っているようです。今なら狙撃も可能です》
暗躍に蠢く電波。前進する複数影。暗視照準器ナイトサイトの反射しない赤の光が緑に闇を照らし出す。

《待て。擬態かもしれん。まずは衛生兵の方を狙え。俺たちが罠を
買う。その隙に狙え。ガキの方は武器には遠い。こっちで討つ。カ
ウントだ》

下り車線側岩壁に沿い、数人が這う。先頭の隊長がスリーカウン
トを取る。それを突き出し岩の上部からロングバレルが狙う。

《取りこぼすなよ。花の蜜はそう甘くは無いぞっ》

《サーツ！》

そして、風が止む。雲が微かに月を隠す。隊長のサインに後方に
構えていた数人が銃の引き金に手をかけ、駆け出す。それに合わせ
狙撃手がスライドを引き、サイトから狙いを定め、引き金の遊びを
消す。

「っ！？ だ、誰っ！？ ……んんっ！」

風が止んだ時、レクスが異変に気づく。風音に混じるわずかな砂
利音。立ち上がり、銃を構えようとした。だが視界を闇に覆われた。
「甘いよっ。そんなに私を殺せるとでも思ってたわけっ？」

毛布が空を舞い、レクスの体を襲う。その瞬間、周囲を昼間のよ
うな眩さが眩ます。

「うわっ！ な、何だっ」

「閃光弾かつ！？」

「怯むなっ！ 撃てっ！」

隊長だろっ。その声に合わせて、銃声が轟く。

「レクスッ、邪魔っ」

「あぐっ」

レクスがセフィアの蹴りを受け、岩壁に背を打ち尻餅をつく。状況の恐怖に腰が抜けたのだろう。毛布を取ることすら忘れ、セフィアに動くなと怒声され、動かない。己が岩と念じているのだろうか。情けない男だった。

「もつと状況を良く見ておくべきだったね」

セフィアの手には小銃。毛布を取り出した際に隠し持っていたのだろう。視界の暗さは明白。だが、セフィアは引き金を引く。夕食前に地に埋めていたものは閃光弾。踏んだ程度では爆発することは無い。だからこそ、セフィアは捨てるように放り、ある程度の衝撃を加えていた。

「どこ狙ってるの？ 目が眩んだ？」

「うわっ」

セフィアは既に把握していた。閃光と同時に一瞬立ち上がる影。目が眩み、動作を奪われた者の肢体を銃弾が貫く、二人の兵士が倒れた。

「くそっ！ 悪魔がっ！ トルクッ」

ナイトゴーグルを装着している中で、セフィアに向かう銃弾は少女を貫けない。代わりに発砲した瞬間に、その肢体に穴が空く。セフィアは先に撃つことがない。わずかなタイムラグに発光箇所を見極め、最小の銃弾に抑える。その全てが防弾装備の弱い、もしくはそれすらない肢体部分を貫く。

「上でしょ？ 気づいてたよ、とっくにさっ」

セフィアがワンピースの下の腿につけていたホルスターからリボルバーを取り出し、上空を見ることもなく三発を放つ。

「ぐっ……あああっ」

銃口を差し向けたバレルが銃弾にぶらされ、その勢いに反る上体を二発目の銃弾が撃つ。防弾チョッキに守られたとは言え、衝撃に乗り出した体が勢いを付く。そこに支えを失わせる三発目の銃弾が、狙撃手の利き腕の右腕を夜空へ持ち上げた。痛みにはバランスを失う

体が、数メートル下に落ちた。

「あああ……く、う」

狙撃手は生きてはいた。だが、支えきれない肢体に横たわる。骨が折れたらしい。

「軍人のくせに、狙撃の狙の字も知らないの？ ロングバレルを下方に向けてと撃ちにくいんだよ？ 普通ので弾雨にした方が新兵でも殺せるよ？」

「うっ、うわああっ！」

そこにセフィアが微笑んでいた。銃口を突きつけたまま。

「トルクツ！」

「見え見えだつて言ってるじゃない」

仲間を助けようとしたのだろう。兵が脇に抱えた銃を乱射する。

セフィアは身をかすかに屈め、二発を足元に撃つ。痛みに転がる兵士の叫びをセフィアは無視する。

「ついでに、そっちもね」

倒れた男の銃をセフィアが銃弾で弾く。そのまま確認もすることなく岩壁に銃を乱射する。闇雲のようでそうでない。削り取られる岩が瓦礫と化す。薬莢が弾倉を空にした。

「今だっ！ 撃てるものは撃てっ！」

岩壁に隠れていた隊長が、銃弾の止んだその隙を待っていたように飛び出す。

「……おっ！」

だが、隊長の男の銃声は聞こえてこなかった。代わりに銃本体が空を舞った。男の体が地を滑る。

「あははっ。みっともないね。隊長がこけちゃったなんて」

破碎した岩の瓦礫に隊長が足を取られ、銃を離し転がる。そこへ弾倉を付け替えることなく、その銃を投げ捨て、もう片手にあつたリボルバーを男に向ける。

「くっ……」

男が地に拳を叩きつけた。

「さて、自害するか、尋問を受けるか、大人しく白状するか、選択くらいさせてあげても良いよ？」

隊長の近くにあった銃を広い、弾倉を外し、突き出しの向こうへ投げ捨てる。銃はセフィアの手の中にある。一発が装填されたまま。銃口は男を二つを捕らえる。

「ゲリラに吐くものなどない。殺したければ殺せ」

だが隊長の男は吐かない。セフィアも分かりきったように銃口をためらい無く引いた。

夜闇に一発の銃声がどこまでも反芻して消えていく。それを追うように叫び声が劈く。

「っ！ マアアアイク ツ！」

一発の銃弾。向けられた銃口。男の脳天が血を大地に垂れ流し、動きが停止した。隊長の男の叫びが木霊した。

「さ、吐く？ 吐かない？」

セフィアは見下す。

「貴様……何故だっ！」

男が怒声を浴びせる。だが、セフィアは涼しい表情のまま月明かりを背に纏う。

「殺せって言ったから殺しただけ。誰も貴方を殺せだなんて言っていないでしょ？」

セフィアの冷酷な物言いに、男が戦慄く。

「お、お前……」

口を開く男の声は震えている。下手なことを言えば仲間が殺される。それこそ部下が。戦闘において仲間が死ぬこと、勝敗が喫した上での仲間が殺される恐怖は差がありすぎる。その周囲には五人の兵が唸りを上げている。

「質問。聞きやすいように、答えるだけで良いよ」

不意にセフィアが横たわり自身を睨みつける男に人差し指を向ける。もう片手は銃口を手向けている。男の表情に若干の余裕と落ち着きが宿る。

「どうして、サクラがそっちにいるの？ セグレアの目的は何？」

「何のことだ？ サクラとは、あの女の子か？」

「そう。日本刀の女の子。どうしてそっちについてるの？」

抑揚の無い声。月明かりがりボルバーを不気味に浮かび上がらせる。

「それは俺たちが知っていると思うか？ 奴は上層部が送ってきた」

そこで男がセフィアを見上げる。だが、視線はおかしかった。気づくセフィアが振り返り、岩場を見上げた。銃口はぶれなかった。

「サクラ……」

風に靡く少女が月明かりに薄暗く浮かび上がる。双方の視線が交差する。

「……くっ……」

隊長の男が別の兵が落とした銃に手を伸ばす。

「……セフィア……どうして……？」

呟きは風に消え、セフィアがサクラと呼ぶ少女は、帯刀していた内の一本の脇差を抜き、投げ下ろす。セフィアは見上げるだけで、動かない。

「うっ……」

銃に伸ばした腕が、大地に打ち付けられる。仲間であるはずの隊長の腕を、脇差が貫く。

「今は……退く。……おやすみ」

サクラが髪を振りまき、その場に背を向け、闇へ消えた。

「私に借りを作ったわけ？ 話はちゃんと聞かせてもらうんだから、サクラ」

見上げること止め、セフィアが男の腕を貫通する脇差を抜く。痛みを男が声を漏らす。相手にはしない。

「レクス。もう終わったよ」

じつと毛布に包まり動かないレクスの体が、わずかに動き、顔が微かに覗きだす。

「ほんとびびり君だね」

「だ、大丈夫なんです……うわっ！」

うつすらと見える敵兵の呻き声の惨状に、レクスが身体を強張らせる。既に戦意はどこにもない。時間にしてわずか十分足らず。七対一の決着は圧勝だった。

「ここはもう終わり。ここまで来てる以上、先を急ぐしかないみたい。出発の支度して」

セフィアがリボルバーに銃弾を装填しホルスターに収め、マスタライズをバイク後部に設置する。呻いている兵士たちは、無線で応援を呼ぼうとしているようだが、暗闇の中、無線機はどこかへ消えていた。

「むーだ。今頃無線機はその下に落っこちて、猿の勉強道具になってるんじゃない？」

セフィアの声に脱力感が生まれる。

「た、隊長……」

何かを求めるように聞こえる呻き声。動かない肢体を必死に動かそうともがく敵兵。だが、セフィアは見抜いていた。

「自害しようにも神経を撃ったから動けないよ。たぶん、麻痺が残るかもね」

ただ動きを封じるだけでは済まさない。救援、応援など自分たちがこの場を離れても安全でいられるように、セフィアは完全に動きを封じていた。

「ほら、レクス。ちんたらしないで、早く支度して」

そんな敵兵をレクスは、哀れみではなく、職理を全うせしめんとする表情で見る。

「で、でも、もう戦闘は終結、したんですよ、ね？」

動けるものはいない。だが、失血を続けているものたちが溢れている。放置すれば失血死することは目に見えている。自害することも許されず、ただ死を待つ敵。そんな姿にレクスの足はセフィアから遠のく。

「馬鹿じゃないの？ 今、私たちを殺そうとしてたんだよ？」

気づくセフィアが呼びかける。

「まっ、待つてください。勝敗はつきました。もうこの人たちは敵じゃないですよ。ただの怪我人です。衛生兵として、そうじゃなくても医療従事者としては、見過ごせませんっ」

レクスは強く言う。

「な、なんの、まね、だ……？」

荒い息の兵士にレクスは手を伸ばし、傷の状況をポケットに入っていたペンライトで確認する。

「喋らないで下さい。力を抜いて……」

打たれた箇所を見る。それにセフィアが馬鹿馬鹿しいと首を振っていた。

「戦場じゃ、真っ先に死ぬタイプだね、レクス」

レクスの背中に掛ける言葉。セフィアも背中を向け、バイクにマスタライズを乗せ、武器の入ったリュックを載せた。

「とりあえずの応急処置です。出来るだけ早く救援を呼んでもらって下さい。僕では、治療出来る状態じゃなくて、すみません……」

倒れている男たちに止血処置を施す。それでも既に銃弾は貫通し、止血帯も脈動に合わせ滲みを増す。痛みを誤魔化す為の鎮痛剤はレクスは打たなかった。衛生兵訓練で学んでいた。戦場で痛みを消すことは死に繋がる。痛みを忘れた兵士は死を忘れ、闘う。結果、失血や神経障害により重症を増すか、最悪死ぬ。そうさせないために無理をさせない。それは痛みを覚えさせ、苦しませる。人は痛みに弱い。戦場だからこそ痛み^{プライド}に苦しむことで戦線を離脱する。兵士としての高慢は、レクスにはなかった。生きることの誇り（プライド）しか、なかった。

「敵に情けを掛けられるとは、国には戻れんな……」

隊長の男が成す術なくレクスに応急処置を受ける。他の兵士たちも肢体に止血帯を巻かれていた。

「レクス。早く行くよ」

「は、はいっ。あ、あの、これ、使ってください」

「何の真似、だ？」

レクスを急かすセフィアの声に応えつつも、レクスは上着ポケットから予備無線を隊長の男の足に置く。

「周波数は分かりませんから、合わせて下さい。こちら側の周波数は削除してますから、不要なら処分して下さい。貴方はまだ軽傷ですが、他の方が重症です。一刻も早く専門的治療を施さないと、後遺症が残ります」

セフィアには聞こえないように耳打つ。男の表情が闇に呻く仲間たちを探すように動いた。

「レクス。早く」

「は、はいっ。今、行きますっ！」

慌てて医療道具を片付ける。

「落ち着け、衛生兵」

だが、セフィアではなく男がレクスに言う。包帯が転がり、男が指でそれを弾く。

「す、すみません。ありがとうございます」

セフィアの負っていたリュックに詰め込むと立ち上がる。

「お前には借りが出来たな。名を、聞かせてくれ」

「レクスです。ユーラシア・レクスです」

男には、戦意はなく、患者として救われた命に苦笑を交えていた。

「レクス。あの少女には気をつける。奴は契約の為には、何も省みない」

レクスとは異なり、この状況において何も感じることもなくマスタライズの調整をしているセフィア。風の中に血の臭いと一つの屍が晒されている。自らが招いた結果に、既に興味を失っていた。

「……では、失礼します」

レクスは男の言葉に答えなかった。ただ、リュックを担いでバイクに駆ける。担いだばかりのリュックをセフィアが奪い、やはりレクスにはシートに重量を載せるリュックを背負わせ、エンジンをスタートさせた。ライトに照らし出される車道。丸みを帯びた闇夜の

光の中に、一瞬男たちの姿があった。

「さ、出発するよ」

「は、はい」

男たちからは恐らく二人は見えなかっただろう。だが、レクスははつきりと見えていた。動かないはずの男たちの腕が、感謝と幸運を祈るようにサムズアップされていたのを。

「お節介。自分を殺そうとした奴を助けるなんて」

「す、すみません。でも、放っておけなくて……」

取り付けたヘッドホンからセフィアの嫌味が飛ぶ。その度にレクスは謝罪の言葉を垂れる。

「それから、ちゃんと見張りしてよ。私のほうが先に気づいてたなんてさ」

「そ、それなんですけど、どうして、分かった、と言うか、分かってたんですか？」

レクスは寸前まで気づかなかった。だが、セフィアは既に先手を打ち、そこを突いた。

「戦場なんて先の読み合い。不要でも先に手を打っておけば楽でしょ？ 別にただの閃光弾だし、無意味に終わっても別に被害は大きくないし」

セフィアの言葉に、レクスが苦笑した。要は運。運が良かったら敵が引つかかった。外れればそれを放置するつもりだったらしい。

「それよりも町に行っただ方が良いかも。ここまで嗅ぎつかれてる以上、町のバーでも時間潰して早朝に立つよ。レクスも寝ないと体持たないでしょ？」

そうは言うセフィアも小一時間ほどしか仮眠を取れていない。

「そ、そうですね。でも、バーなんて大丈夫なんですか？ 僕、行ったことなんてないですよ」

レクスよりもセフィアの方が問題はあつた。だがセフィアは笑っていた。

「平気平気。バーは無干渉地帯だから。早く行くよ。シャワーある

かもしれないし」

夜道は不気味に闇が多い、星空が降り注ぐ。彗星のごとく一筋が道を照らす。セフィアは時折サイトを覗くが、町に着くまで引き金に指を掛けることはなかった。

7th・戦場に安寧なし

夜間の中に星空の集う大地の明かり。それでも閑散としているのは、戦時下における夜間空爆を避けるためなのだろう。

「やっぱり警戒してますね……」

町に響く重音。徐々に小さく停車する。

「こんな時に賑わってる方がおかしいでしょ」

正規国軍による検問。二人は町の外れの小道をすり抜けた。寂れきる住宅。明かりはない。人の気配も無い。明かりのついている店は軍車両に占拠されている。だが、戦場の被害は見受けられない。国軍による占領支配下で守られている。ここでも異質はセフィアとレクスだった。

「とりあえず、休める場所を探そ。出来ればガソリンも入れられると良いんだけど」

「スタンドは恐らく領下にあると思いますが……」

「分かってる。強行突破でも良いけど？」

セフィアがマスターライズを叩く。レクスに殺る？ と聞くように。「だ、ダメですよ。こんな所でそんなことしたらすぐに囲まれますって」

レクスの慌てように、セフィアは笑った。「冗談だと知るとレクスは脱力した。」

「とりあえず、レクスは休めそうな場所を探して」

バイクから二人が降りる。セフィアはリュックから一般的な拳銃を取り出し、バレルに消音器をつけ、腿のホルスターにリボルバーと入れ替えた。

「セフィアは？」

「私はちよつと用事。すぐに戻るからそれまでに探しておいて」

言い残し、セフィアは薄暗く点滅する街灯の向こうへ消えた。取り残されたレクスは、しばしその背中を呆然と見送ると、周囲に警

戒しながらバイクを押しした。

「さて、スタンドはっと」

角の壁に身を寄せ、コンパクトを利用してスタンドの明かりを見る。

「多いなあ。騒ぎにならないってのは難しいかも」

コンパクトを仕舞うと、セフィアは静かに姿を闇夜に映し出す。

「あのお」

装甲車に燃料を補給していた兵士に声をかける。数人の軍人が振り返る。

「何だ？ こんな時間に。今は外出禁止令が出ているんだぞ、早く家に帰りなさい」

セフィアの格好は町の小女にしか見えないのだろう。油断がセフィアの中に笑みを生む。

「お母さんから暖房用に燃料を買ってきてって頼まれたんです」

「ダメだ。今ここは軍用の補給基地になっている。明日の午後には補給車が来る。その時に配給されるもので我慢しろ」

だが、軍人は厳しく帰るように手を振る。セフィアは笑顔を崩さない。スタンドには三人の軍人が車両の傍に立つ。スタンドの建物内には休息中の兵士が十人ほど。誰も外の様子には気づいていない。

「でも、燃料タンクがもう空で、お風呂もご飯も作れないって……」

上目遣い。女に飢える戦場において、男の欲望は容易く崩れる。セフィアは見た目の良さを存分に利用し、男を見る。

「……少しだけだぞ。ついでに夜道は危険だ。俺が送ってやるっ」

「あはっ、ありがとう、お兄さん」

無垢な笑み。少女の美しさは男を呑む。男は呑まれたことにも気づかない愚かな欲をセフィアに向けて。

「こっちだ」

「はい」

男がセフィアをスタンドの影に誘う。油に汚れたタンクに十リツトルほど入れる。セフィアはその男を後ろから眺める。

「なあ、君。いくつだ？」

「私？ 十三歳ですよ？」

意外そうに振り返られる。男の目は欲情の色だった。

「その割には成長は良いんだな」

「えへへっ、そうですね？」

甘い蜜の香りに誘われる虫は、その後花の蜜に溺れる。溺れることにも気づかずに。

「ああ。……少し、俺と楽しいことしていかないか？」

「楽しいこと？」

既に男の意識は偏っている。

「大人の遊びだ」

燃料を入れ終えた男が立ち上がり、セフィアに寄り、ワンピースに裾に手をかける。

「あつ……やつ、だ、だめ……」

「大丈夫だ。恐いことじゃない。気持ちが良いんだ。そのまま力を抜いて」

汚れた手がセフィアの足を撫でる。セフィアの顔は見えない男。既にセフィアの足の美しさに欲情しきっていた。荒くなる鼻息に、セフィアが抵抗の声を漏らす。力は入っていない。

「だ、ダメです……んっ……」

男の手がゆっくりとセフィアの足を撫で回し、裾を持ち上げる。セフィアは待つていたように、演技に熱を入れた。男に身を任せると、男の腰に腕を廻す。男はそれを受け入れたとでも勘違いしたのだろう。セフィアに身体を押し付けるように寄せる。

「良い匂いだ。気持ちが良いだろう……？」

そこで男がセフィアの顔を覗くように顔を上げる。だが、次の瞬間には、その表情は凍り付いていた。

「最悪に決まってるでしょ。何言ってるの？ 馬鹿？」

「んおっ!？」

顔を上げた瞬間、開かれた男の口に鋼の口が突き刺さる。男がセフ

イアの撫でていた腿の部分にセファイアが手を添えていた。それをセファイアは男に恥じらいの抵抗だと感じさせながら、ホルスターの銃を抜き、勘違いしたままの男に銃口を向けた。

「女はね、男の道具じゃないの。勘違いしないでくれる？」

「んんん〜……っ！」

男が口に植え付けられたものが何かを悟り、助けを求めようとした時、静かに男の体が地に落ちた。唾液と血液が消音器から垂れた。消音器をつけた銃口とは言え、多少の音は出る。だが、装甲車がアイドリングしているおかげで兵士は誰も気づいていない。

「あーあ、汚れちゃったじゃないの」

それでも燃料は確保した。セファイアは消音器と取り外し、遺体に捨てる。重いタンクを軽々と持ち上げると、来た道を何事も無かったように歩き出す。

「待て、その女」

「え？ 私？」

だが、そこへ外にいた兵士が寄ってくる。車の陰に倒れている味方の死体を気づかれないようにセファイアが男に歩み寄る。焦りはない。やはり笑顔だった。笑顔こそが戦場の隙を生ませる花となり、セファイアの銃弾がそれを食らう。

「それをどうした？」

タンクに目が落ちる。

「さつき、向こうにいる兵士の方が譲ってくれました」

視線を向ける先には人の気配は無い。

「全く、あいつか。悪いが今は燃料の販売は上から禁止されているんだ。それを返してもらえるか？」

「そ、そんな。今、お金も払いました。これだけでもダメなんですか？」

だが、セファイアは考えていた。今消音器を捨てたばかり、銃を抜いたところで気づかれる。銃の弾数も制限がある。全員を射殺できる状況ではない。

「すまん。命令なんだ。返金はする。奴が受け取っただろう？
ちよつと待っている」

だが、兵は意外な一言を残し、セフィアの背後に回った。セフィアは思わぬ状況に装甲車の裏に回った兵を見送った瞬間、闇の中へ掛けた。街灯のない中でセフィアの姿は消え、同時に先ほどの兵が異常に気がついて声を上げた。セフィアは楽しげに笑っていた。男はやはり馬鹿だと。

「あ、セフィア？ どこに行つてたんですか？」
角を曲がるとレクスが待っていた。探していたのだろう。

「とりあえず人気の無い場所を見つけました。そこにバイクも隠してありま……」

「レクスツ、燃料入れたら町から出るよつ。バイクどこつ？」
レクスの言葉を遮り、セフィアがレクスを置いていく。

「えええつ！？ ちよつ、ちよつと、ど、どうしたんですかつ？」
慌てて追いかけるレクス。角に立ち止まるセフィアに場所を指示し、二人は人気のない町の外れの無人家の敷地内に隠れた。置かれていたバイクにセフィアが燃料を補給する。先ほどの兵士は脳がなかつたか、家庭用使用する軽油ではなく、ガソリンをタンクに入れていた。おかげに苦労することもなく、バイクは腹を満たす。レクスの息は荒かった。膝に手を突き、汗を拭う。

「変態を殺しちゃった」
「ええつ！？ ……んぐうつ」

驚くレクスの口をセフィアが封じる。その時、町に警戒のサイレンが星空に響いた。

「分かるでしょ？ ここはもう敵陣の中なの。ちよつとしたことでもこうなるの。だから逃げるよ。その前に派手にやるけど」

セフィアがリュックの中からいくつかの部品を取り出す。それをマスターライズに装着していく。

「……な、何をする気ですかっ？」
小声ながらも、レクスは突発的なことに適応しようと聞く。

「きつと町の中はどこも嚴重に警戒されてる。酷くなる前に突っ切る。簡単で良いでしょ？」

マスターライズのバレルがセフィアの手より長く、太さを増した。口径は三十ミリを越えて銃ではなく、砲になっていた。そこにリュックから取り出した数発のものはや砲弾を装填し、スライドを引いた。「ぼ、僕はどうすれば……？」

「私がスタンドを爆発させるから、その隙に向こうから出て。とにかくギア上げて加速する。それだけで良い。やって」

セフィアがマスターライズに身体を固定する。急かされ、レクスが慌ててエンジンをスタートさせる。

「私が合図したら一気に出るんだよ。死にたくないでしょ？」

「は、はいっ」

あちこちから軍車両のエンジン音が響く。兵の駆け回る声も聞こえる。だが、セフィアは銃口を上空に向け、時を待つ。

「レディ……ゴッ！」

その瞬間、バイクがその場で跳ねた。今までに無い車体への反動と同時に夜空に光が飛び、暫くした後には夜空を赤い炎が昇る。

「レクスッ、ゴーツ！」

「は、はいっ」

恐れと興奮にレクスはアクセルレバーを強く引き、バイクの前輪が浮き上がり、急発進した。兵士たちは爆発に現場へ急ぐ。その裏をレクスの運転するバイクが加速を続け、逃亡に出る。

「そのまま突っ切ってっ」

「はいっ」

まだ気づかれていない。だが、セフィアはマスターライズのダブルグリップをしっかりと握ると、そのまま身体を外に投げ出す。固定されていたマスターライズがセフィアの体重移動に回転し、バイクもそれに合わせて傾く。レクスが上手く重心を取り、百八十度マスターライズが向きを変え、セフィアがレクスの背負うリュックの上に腰を下ろした。

「やるじゃん？」

「びっ、びっくりしましたよっ。向きを変えるならそう言っておきなさい」

それでもレクスは前方に集中し、ハンドルグリップを強く握り締めていた。

「もつと飛ばして。ちんたらしてるから早速見つかったじゃない」

だが、セフィアは叱咤した。後方から数台の車両の前照灯が視界を白に染める。暗い町が明るさに賑わう。そして、カメラのフラッシュのように途切れ途切れの光と音が飛んできた。

「う、うつつ、撃つてきましたよっ!？」

「大丈夫。レクスは前だけ見て町から離ればいいのっ」

耳を掠める銃弾にすらセフィアは気を止めない。レクスは完全に萎縮し、身を極力縮めてギアを上げる。

「ほーら、もつと集まっておいで」

「な、何言ってるんですかっ!？」

セフィアが後方から銃撃を加えてくる軍を呼び寄せるように挑発する。ただでさえ怯えているレクスには、さらに追っ手を増やそうとするセフィアの真意など分かるはずもない。

「良いの。レクスはさっさと町から出る道を進んで。……へえ、戦闘偵察車と装甲偵察車ね。威力偵察でも企んでるのかな？ どうせなら機動戦闘車とか出せば良いのに。もしかして、甘く見られてる?」

威力偵察とは、敵に対して故意に攻撃をし、反撃に伴う敵の武装能力を調査する作戦の一つ。装甲車が軽戦闘車両などではなく、偵察車両の機関銃装備が限界の車両に、セフィアは揺れるバイクの後部に立ちながら人差し指を唇に当て、首を傾げた。

「甘く見られて良いじゃないですか。逃げやすいってことですよね?」

サイドミラーから後方を確認するレクスは、偵察車両とは言え、そこから放たれる機関銃や、顔の覗かせる兵の小銃にこれ以上の武

装攻撃を望んではない。

「どうせやるなら派手にやるほうが気持ち良いでしょ？ ちまちま相手にしたって、こっちの弾数の無駄遣いにしかならないし」

ジグザグ走行するレクスのバイクの傍らを銃弾が過ぎ去り、民家の壁に破裂を伴う穴を開ける。威嚇射撃ではない、攻撃。当たらない方が不思議な状況だと言うにも拘らず、セフィアは平然とサイトを覗くことも無く待っていた。

「やっぱり同業手じゃないから下手糞だね」

「ぼ、僕にはどうして平然としてられるのかの方が分かりませんって！」

歩兵分隊なのだろう。狙撃手ではない、ただの歩兵。故に狙いを打つと言うよりも、打って狙うという銃方。至近距離を掠めこそすれど、命中はしない。

「あははっ、サイト覗かなくても見えちゃう弾道って、素人ー」

セフィアが笑いながら引き金を引く。闇夜にもかかわらず、往来の車道で小さな爆発が数発炸裂した。セフィアの銃弾が相殺した証拠。被弾予測の高い銃弾だけをサイトも覗かずにセフィアは相殺する。敵兵は気づいていないようだが、容易すぎるとセフィアが笑う。

「セ、セフィアッ、もうすぐ町の出口ですっ」

「そのまま突っ切って先を急いで。それから爆風と破片に頭注意っ！」

「へっ？ ど、どういうことですかっ？」

「気にしたら負けっ。良いから行くの」

セフィアがサイトを覗く。長い髪が尾を引く流星のようにマスタライズの両横を流される。

「さて、遺言は、ないよね？」

セフィアの表情が若干の真剣さを増し、追っ手の先頭車両の吸風口付近に狙いを定める。弾倉を抜き、直接マスタライズに一発の砲弾のようなセフィアの片手には余る銃弾を装填し、スライドをレクスの背中にぶつかりに行くように勢いをつけ、引く。

「出ますっ！」

「了解っ！ こっちも行くよっ！」

大通りではない小さな出入り口。一車線道の狭さゆえに、軍の警戒も検問ではなく、両サイドに兵が立つだけ。木製フェンスをレクスが身を屈めて突き破る。不意の出来事に警備兵は啞然と銃を構えられない。そこをセフィアの長髪が通り過ぎ、セフィアが放った銃弾光が町の中へ、二人と入れ替わりに突入した。

「バアーイ、明日は天国で迎えてね」

過ぎ去る瞬間、セフィアは警備兵にウィンクをすると、後方を向いていた座り方から、再びバイクを大きく揺らして元の立ち位置に戻る。そしてバイクは闇の中へ重低音だけを残し消え去る。

その瞬間だった。二人を追いかける砂嵐のように閃光と共に先頭を行っていた装甲偵察車両が爆発する。駆け抜ける爆熱風に車両上部で銃を構えていた兵はどこかへ消え失せ、熱波による作用で後続車両も爆発を起こし、町の出入り口付近はスタンドの爆発並みに吹き飛ぶ。その爆発の中を抜けてセフィアとレクスを追う車両は一台も無い。二人を追っていた全てが爆煙の中に、戦時に兵が祈りを捧げていた、神の下へ旅立った。

「うわあっ！」

後方から吹き抜ける熱風にバイクのハンドルを取られ、レクスが建て直しに速度を緩め、安定を取り戻そうとする。

「さすが私のロックオン。命中率百パーセントっ！」

セフィアの振り返る先には、夜空を赤々と染め上げる黒煙が、二つ立ち昇っていた。

「……………」

サイドミラー越しにレクスの表情は、笑みを携えるセフィアとは裏腹に、脅威に接した無情すぎる惨状に表情を強張らせていた。

町を抜けてからの追っ手は無い。だが、緊急の指令は星空の中を駆け巡っていると考えて間違いはない。一人の少女と衛生兵に、奇襲部隊と町を統治していた軍が打ち負かされた。敵にとってはラジ

才の娯楽を聞き間違えているようにしか思えない冗談だろう。だが、
事實は起きた。道路灯も何もない荒野を走るバイク。煌めくオリオ
ンの星々につく神は、何を思い二人を見下ろすか。そんなものは人
の夢でしかないのだろう。

8th・レクスの願いと夜の星

「レクス。あそこの岩場付近で休憩しなおそ」

「は、はい……」

小一時間ほどを走る二人は、暗闇の中に一筋を明かりを辿った。荒野に突出する岩場。そこにレクスは再びバイクを止め、セフィアが降り立つ。

「ん〜、ちよつと疲れたね、さすがに」

素振りと言調は伸びているが、疲労感は差して感じられないセフィア。

「今日だけで、何度死んだか、もう分からないです……」

セフィアに振り回され、護衛対象者であるにも拘わらずの傍若無人ぶりに、レクスは憔悴しきった表情で、岩場にもたれ、座り込んだ。

「レクスは休んで。今度は私が見張るから」

差し出される一杯の水。涼などない、喉越しに詰まりを感じさせる水を、レクスは飲み干す。

「疲れてるね。精神的にかな？」

大きく息を吐くレクスを、セフィアは微笑んで見る。もう力が入らないのか、カップをセフィアに返すとレクスの腕は勢いを失った弾丸のように落ちた。

「たぶん、肉体的にも、だと思えます。こんな経験、初めてですから……」

解けた緊張による疲労の増大。肉体的疲労もそうだが、セフィアは分かっていた。レクスが戦闘経験の浅い衛生兵である以上、極度の緊張状態は簡単には解けないことも。だからこそ、セフィアは水を与えた。それが緊張を紐解く一つの切り目だ。

「仮眠を取る前に、星空を見て。それから四回深呼吸するの。鼻から吸って口から吐いて」

セフィアに言われ、言われた通りにする。

「それからゆっくり横になって、自分の知ってる星座を探すの。私的にオススメはオリオンかな。分かる？」

「あ、はい。星は好きですから」

大地に横になるレクス。セフィアが見下ろす。明かりがない以上、双方うつすらとした陰でしか認識出来ない。

「で、その星座を五分間見続けて、そしてから目を閉じて。その後、また三回深呼吸して眠ると、すぐに眠れるよ」

セフィアの口調は静か。何も語らなくなるレクスを他所に、ホルスターについていたペンライトでマスタライズを弄り、リュックの中を漁っていた。

「何、してるんですか？」

「秘密。何も喋らないでゆっくり寝る。疲れ取れないよ？」

「は、はい……」

セフィアに軽く叱咤され、レクスは口を閉じた。沈黙の中に機械音だけが風に吹かれる。

「あの……」

「喋らないって言った。喋ると頭が働いて眠気が飛ぶんだよ」

レクスの言葉を、マスタライズのカスタマイズ中のセフィアが一蹴する。レクスが言葉を呑み、レクスにとっての気まずい夜闇が耽る。

「眠くないの？ なら聞くけど？」

睡眠の沈黙ではない、セフィアにも感じ取れる沈黙の悪さに、セフィアが作業の手を休める。

「あ、はい。すみません。何だか急に静かになると、今度は、その……」

「落ち着かなくなっただでしょ？ それって、新兵にはよくあることなんだよ。だから、私の言ったことをすれば良いのに、へんなこと考えてるから寝れないの」

見透かすセフィア。経験の差が露骨に出る。銃弾の中にいれば、

その煩さに恐怖と共に慣れてしまい、耳の不調を覚えてしまう。だが、正常なのだ。感覚の鈍りが原因。

「無理して寝ても疲れるだけだから、話、聞いてあげる」

セフィアが作業を再開し、レクスが上体を起こす。

「あの、セフィアは色々教えてくれましたけど、どれくらい戦場で戦ったんですか？」

暗闇にセフィアの顔がペンライトに映し出される。レクスは星明りにぼやけている。

「私のこと？ なあに？ 私に興味湧いちゃった？」

愛嬌の声は、相応であり、不相応。

「だ、だって、僕よりも年下の子が、戦場において、銃を持つてるなんて…… 思えなくて」

セフィアが呆気にとられたようにと息を漏らす。手が止まっていた。その手にはロングバレル。その銃口をレクスに向ける。レクスは気づいてはいない。

「私なんて普通。少年兵なんて十歳に満たない男の子が銃持って、敵兵に突っ込むんだよ？ 身体に爆弾巻いて自爆だって、戦場が良くあることなんだから」

「いえ、それは知っています。でも、それは、望まれた兵じゃ、ないですよ？」

少年兵。それは戦争において卑劣な戦法。未来ある子供の命を大人が操り、使い、殺す。拉致された子供もいれば、志願することで家族には報酬が支払われる子供もいる。大人の兵にとつての盾となり、爆弾と化す。非戦闘国からの批判は強く、非政府組織が保護と少年兵廃止に力を挙げている。だが、無くなることはない。

「私は望んでる。そう見える？」

セフィアがレクスに笑いかける。人を、敵軍人を殺すことに躊躇いを持たず、兵器すら破壊する。そこにあるものは笑顔。それを知ってしまったレクスには、セフィアが同じ年の子と遊ぶという概念とはまるで異なる遊びを楽しんでいるようにしか見えないのだろう。

「違うんです、か？」

「ううん。違わない。私は望んでるから、戦争に送り出されるし、契約にサインする。だから敵を殺す。味方に勝利をもたらすの。望んでないのにそんなことして笑えるわけないよね？」

レクスの心の痛みを笑って流し去ってしまうセフィア。

「それは、そうですね……」

セフィアの笑みに、レクスは言葉を飲み込み、会話を続けられなくなる。

「あのおさ、レクス。聞きたいこと、訊いたら？ 別に私は答える範囲で応えてあげるよ？」

だが、痺れを切らせたセフィアがため息混じりに言う。マスターライズのバレルはいっしかドライバーシートを超え、ハンドルよりも前に出ていた。重量にバイクの前輪にまで重みが加わっている。支点と作用点の移動により、車体が若干前方に重みを増す。ようやくマスターライズの重量に後輪に傾きを見せていた車体のバランスが均等になる。

「セグレアのことでしょ？ それに私が敵を殺すことの躊躇の無さ。契約。トレイシエールマスターライズと盾の剣。私の本性。訊きたいのってそう言うのじゃないの？」

セフィアのあけすけな物言いに、レクスは何も言い返せず、喉を小さく鳴らした。

「私たちの契約にはいくつか条件があるの。契約対象者からの質疑には応答する。内部情報以外ね。だから聞いてくれて良いんだよ？ 私たちの存在は戦場にしかないし、それにしか意味が無いし、宣伝になる。だから、訊いたら？」

しかしセフィアは自ら話はしない。聞かれたことにだけ応える主義のようだ。

「だ、だったら、良いんですか？」

機嫌を伺う口調も、もはや今更でしかない。

「何を聞きたいの？ 訊けばスッキリして眠れるかもよ？」

言葉を待ちながらセフィアは銃口の掃除を始める。口にペンライトを咥え、風に靡く髪を、邪魔だと後ろに一括りにして丁寧に残薬と油分を拭き取る。

「じゃ、じゃあ、その、セグレアって何なんですか？ さっきは武器商だと言っていましたけど、どうして人まで戦場に送るんですか？ それも、傭兵じゃないみたいですし、セフィアみたいな子までを、どうして……？」

意を決したレクスの問いかけは、数回の深呼吸の後に静かに漏れた。

「セグレアは、レクスの言う通りだよ。武器商。戦争専門の武器商業社。でも、わたしにとってはセグレアはちよつとだけ意味が違う。それは言えないけど、私はその違う意味で戦場に派遣されて、絶対に契約を全うするの。それが私たちなの。私たちは普通の子供じゃないから」

表面にしか触れられない。レクスの満足のいく答えではない。

「私たちって言うのは、他にもいるんですか？ セフィアみたいな子が？」

一瞬呆気に取られたように手を止め、ライトをレクスに向ける。眩しさに手で隠すレクスに、その指を開くように言葉を返す。

「町の前に襲われたでしょ？ サクラに。あれは私と同じセグレアの契約で戦場にいる。間違いないはず。それに私は狙撃だけど、サクラは剣技。強いよ、あの子。接近戦じゃこっちの分が悪いし」

先ほどの爆発の方が強く印象に焼きついていたのか、思い出したようにレクスが声を漏らした。

「あの時の、あの子が、やっぱり？」

「気配なかったでしょ？ 戦闘において気配を消すことは絶対。私は静止で気配を消すけど、あの子は動作で気配を消す。厄介な子。殺されなかっただけでも凄いくらい」

セフィアはサクラという少女の評価を高める。レクスには意外そうでもあった。

「じゃ、じゃあ、そのセグレアにはそういう子が他にもいるんですか？」

「いるよ。陸海空の状況において、それぞれの能力を發揮する子。今は、そうだね……」

セフィアが語りだす。狙撃手、剣術手、爆撃手、エースパイロット、砲弾手、戦術手、体術手、潜水手、操舵手、後援手、補給手、救援隊、即撃隊の人数を合わせて二十人ほどの幼子の兵がいると、平然と述べるセフィアに、レクスは開いた口が塞がらない。

「ほとんど全員が揃うことはないけどね」

それはつまり、世界中で戦争のない地域はなく、セグレアはその地域にセフィアのように送り込んでいると言うこと。顔を合わせる機会は少ないのだろう。この世界から戦争が根絶しない限りは。

「びっくりした？」

分かっていたようにセフィアが笑う。

「……はい。二人だけでも驚いたのに、そんなにいるなんて……」

シヨックは絶望を含んでいる。だが、セフィアにその感情は無い。「セフィアは、どうしてそんなに平然といられるんですか？ 戦争なんて愚かで醜い殺人舞台じゃないですか。僕には、今だって信じられません。僕がいた村では、セフィアくらいの子供は、皆楽しそうに遊んでました。大人の理不尽な欲求に振り回されることだってなかった」

レクスの言葉に、セフィアは淡々とマスターライズをカスタマイズしていき、自走砲のようにバイクが歪を増し、重武装を施された姿へ変貌した。

「……幸せそうだね、その子達」

セフィアの声が小さく流れる。レクスは聞き逃さない。

「幸せです。子供が戦争にいたこと事態がおかしいんです。そんなのは間違ってる。セフィアだって、セグレアのその子たちだって、普通に暮らしていることが当たり前のはずじゃないですか」

戦争を起こす国があれば、戦争を否定し、根絶を願う国も在る。

そして、平和すぎる日常に、戦争と言う言葉しか知らない国、悲劇を繰り返さない国、保守に走る国、国民が平和に呆けている国。世界は広い。レクスは後者に属する国なのだろう。

「レクス。レクスの故郷はどこ？ この国の出身じゃないでしょ？」

戦乱の中にある国。正規軍ではなくゲリラ軍に所属するレクス。大抵はその国の民で成り立つ軍隊だが、レクスの言動にセフィアは理解していた。

「は、はい。元々はオランダ出身です。今はこの国の医療補佐として入ってました」

レクスはこの国に仕事で訪れ、その能力と人員不足から兵士に召集されたことを話す。だが、セフィアはそこはいつでも良いように受け流した。

「オランダ、ね。BVDの能力の高さが評判だよ」

BVDとは、オランダの国内保安庁。俗に言うオランダの諜報機関でもある。情報収集能力には定評がある。アメリカの十倍、ドイツの二倍もの盗聴があるオランダにて、国民の生活を守る組織でもある。

「それは、よく分かりません。でも、少なくともオランダもそうです。今暮らしていた村も同じように子供たちは笑顔だったんです。苦しい生活でも楽しいことに溢れていたんです」

貧困の国だからこそ、国民は立ち上がり、軍と紛争を起こす。そこに他国の支援が交わり、戦争へと発展する。良くある話だ。支援による媚びと圧力。その下にあるものは経済力と資源力。国民の生活を守る為に兵士は戦う。だが、兵士を動かすものは、それは表向き理由しか意味を成さない。目的はその先にある金になるモノ、だ。幾ら綺麗ごとを並べようと、利益にならない戦争に加担する人間はいない。利益があるからこそ、見込めるからこそ、加担し勝利をもたらす、報酬を得る。国民の安泰など全ては二の次であり、平和を望むことを強調することで国民の信頼を得る。その裏にあるものは醜い欲望でしかない。

「ねえ、レクス」

手が汚れたのだろう。水筒の水で手を洗う静かな音が夜の大地に染み込む。

「……戦争って、無くなつたほうが良いと思う？」

夜空に煌めく星の明かりにも届かない、小さな嘆きのような問い。「当然ですよ。戦争なんて殺人が許される無法地帯です。不条理に人を殺めることなんて許されてはいけません」

一方のレクスは強調する。戦争に意味はないと。平和こそがあるべき姿で、なくてはならないものだ。

セフィアの体は小さく震えることに始まり、やがて堪えきれないものが、ぷつとチャップリンの映画を見始めた瞬間の面白さに、こらえ切れない観客のように、噴出した。

「あはははっ、レクス、貴方ってほんとに幸せ者なんだねっ。私、初めて生で見たよ。そんなこと言う……愚か者」

最後だけは、目は笑っていなかった。言葉が怒の感情に染まっている。暗闇でレクスは脅威を感じる事が無かったことが、セフィアが送るせめてもの情けのように、セフィアは笑う。

「な、何がそんなにおかしいんですか？ 僕が言ったことは世界中の人々が願うことですよっ？」

青年は大人になりきれてはいない。戦場においては兵士にすらなれていなかった。

「そうだね。そうなんだろうね。世界中の人かあ。一体どれくらいの人間がそんなこと思ってるんだろうねえ」

蔑むような嫌味の口調。つまらない物言いは、明かりに集う羽虫のように見ているだけでイライラが募る。人はそれを手で振り払うように、セフィアは言葉で振り払う。

「少なくとも、戦闘で命を張る兵士は、皆そう思っています。誰も好き好んで戦場になんか立てません」

レクスの言葉にセフィアが微笑む。天使のような悪魔の笑みで。

「じゃあ、賭ける？」

レクスが困惑気に目を細める。

「な、何をですか？」

「戦場で兵士は平和を願って闘っているかどうか」

ペンライトをレクスに浴びせる。手で遮るレクスが明るさの中で見たものは、仄かに香る花の甘いセフィアの髪の毛の香りだった。

「賭けは簡単。私が勝ったら、レクスには私のお手伝いをしてもらう」

「……じゃ、じゃあ、僕が勝ったら？」

「レクスの望みを一つ、叶えてあげる。何でもね」

自信があるわけではない。答えを知っている。番組を盛り上げる司会者のように回答者を煽る。レクスは何も言い返さなかった。己の信じる答えが必ずあると思っっている強い目でセフィアを見ていた。「ん？ 何？ お願い事は決まったのかな？」

すぐには思い浮かばない。セフィアは愛嬌ある眼差しで答えを急かす。急かされた者の答えは、単純にして簡潔になる。とつさのことに人の思考は思いに追いつきはしない。セフィアはそれを狙ってレクスを見る。

「はい、決まりました」

意外そうなセフィアの声が漏れる。焦りはない。決意の声。

「僕が勝ったら、セフィア。君は二度と戦場で銃を引かないで欲しい」

レクスの願い。少女が戦争で人を殺すことを止めること。考えていたことをようやく口にした、男の想いがあった。

「それは無理だよ」

セフィアが腰に後ろ手を廻し、背を向ける。見上げている星空は遠い。

「どうしてですか？」

「私が望もうと、望むまいと、セグレアの契約には逆らえない。だから、それは無理」

言い切られ、他には？ と急かされる。

「なら、そのセグレアに、僕を連れて行ってください」

セフィアが呆気を取られ、驚きに噴出す笑いのように、声を震わせた。

「え？ 本気？」

「本気です。戦争にこんなに幼い子が銃を持っているなんておかしいです。セフィアに言っても無理なら、セグレアに申し出をします」「直訴しても、衛生兵には上の人間は通じないと思うけど？」

一ゲリラ軍所属の衛生兵など、セフィアにしてみれば腐るほどの戦場の虫も同じだろう。だから躊躇い無く引き金を引く。害虫を始末する者として。それすらを取り纏める組織に直談判など、どう考えても無駄であり、届きはしない。だが、レクスは真剣そのものだ。滑稽すら通り越しているような。

「ま、それが願いなら、良いよ。連れて行ってあげる。でも、後悔しても知らないよ？」

叶えられることなのだろう。セグレアに連れて行くことは。だからセフィアは了承し、レクスは短く返事をした。

「さ、そろそろ休んで。もう三時間もすれば日が昇るよ。朝陽が出る前には出るからね？」

「はい。分かりました」

もう一度、緊張を解いた体が岩を背に横たわる。

「これ」

「あ、ありがとう」

横たわる身体にセフィアが毛布をかけた。

「おやすみ、レクス」

「おやすみなさい……」

単調な会話。セフィアはリュックから弾倉のような筒状のものを取り出し、長すぎるバレルの隙間に不自然に空いた横穴へ左右三つずつ挿し込み、夜闇の中に長い銃身に棘のように刺さる不思議なもの。最後に取り出す弾倉は、セフィアが両手で運ぶほどに巨大なもので、一息つくセフィアの隣で、歪な武器が仕上がりを月に照らし、

不気味に輝いていた。レクスは目を閉じてから、睡眠に集中したのか、規則正しい呼吸に毛布を上下させていた。

「ごめんね、レクス。貴方は本当に戦士にはなれない、普通の人だよ……」

振り返るセフィアが、勝負にならない勝負をしようとしているレクスに、哀れみのような嘆きを請うように囁いた。

「私たちは、一度死んでるから、貴方には、出来っこないよ」

セフィアは静かに星空を見上げ、すぐにリュックの中を漁り始めた。

9 t h ・戦場の傷

「ん……ふぁ……」

戦場には無い、安らぎ。優しく吹き抜ける朝風が頬を撫でる。朝陽は顔を出してはいない。西の空が微かにグラデーションを帯びる。そこが南半球だとわざわざ気づく者はいない。

「起きた？ 後二十分で出発するよ」

そこには、艶やかとは異なる、清楚な白い花が風を纏い、棘のよう
に銃を両手に抱えていた。

「あ、もう朝、なんですね……」

だからこそ、目が覚める。ここが戦場であると言うことに。

「バンッ！」

心地良い早朝の目覚めに、全身を伸ばすレクスの体はその音に敏
感に反応する。

「な、何ですかっ？」

レクスの眼前にはマシンガンが一丁、額に狙いを定め、その銃者
がにこやかに笑っていた。

「一回死んだよ。よくまあそんなお気楽そうに欠伸出来るね？」

昨晚とは異なる緊張感の欠落に、セフィアが呆れて銃を下げる。

「寝起きにいきなりなんて卑怯じゃないですか……」

レクスが鈍感に立ち上がり、もう一度背伸びをした。そこへ再び
銃口が。

「ババババァーンッ！」

「うわぁっ!？」

だが、レクスの驚きは尋常ではない。一方のセフィアは愉快的喜
劇曲に舞う演者を笑うように、声を張る。セフィアの口音だけでは
なかった。遠くの山から反射音が山彦としてどこまでも音の波紋を
広げた。

「なっ、ななっ、何してるんですかっ!？」

二人の間にあるマシンガンの銃口から、爆発した硝煙と臭いが立ち上り、足元には葉莢が四発転がった。

「ほら、これでレクスは五回死んじゃった。ダメだよ？ 戦場でのんびり構える人間なんて、市民にだって居ないよ？」

遠い空に消えていった銃弾。その着地点はセフィアも分からない。だから気にしない。撃つたところで何も無い、ただの荒野でしかない、この場だから。

「だからって本当に撃たないで下さいよっ！」

目覚めにしては豪快を通り越し、危険な目覚め。強く言うレクスの腕には、鳥肌が走っているのが袖から垣間見えた。

「別に護衛対象者に傷つけることはしないし、させないから、いい加減私を信用してくれてもいいと思うんだけど？」

交代で仮眠を取ることも無く、レクスは朝を迎えた。セフィアの睡眠時間は小一時間。十三の少女にはもちろん相応しくなどない。それでもまるで疲労感を見せない。昨日と変わらぬ姿が、そこには立つ。

「全く……って、何ですかっ、それっ!？」

全身が嫌に目覚めを迎えたレクスが、ふと視線をずらした先にあるものに、驚愕を浮かべる。

「何って、私のトレイシエールマスターライズだけど？」

岩に立て掛けていた盾の剣を背負い、支度を整えるセフィア。レクスは呆然とバイクを凝視していた。

「なんか……すごいことに、なってますんか？」

「うん、なってるよ。私、狙撃手だから、むしろこっちの形の方が普通なの」

狙撃銃も多様に存在しているが、トレイシエールマスターライズは別格、いや、唯一なのかもしれないほどに、銃の形を失っていた。

「これ、銃、なんですか？ 僕にはどう考えても戦闘装甲車とかに搭載されている砲にしか見えないんですけど……」

歩み寄り、近場で目にする漆黒の銃。もやはその一つで戦況を変

えつる兵器。レクスの驚きは、ごく自然なものだが、セフィアを視界に入れる度に、それは異質になっていた。強いて言えば、二輪戦車。身を守る装甲などない。フロントボディのガードが多いくらいだ。身を守るものの無い戦車。レクスにはそう見えるのだろう。

「撃つてみる？」

突拍子も無い申し出。レクスはとても興味のあるようには見えない。むしろ、その異質さに慄いている。

「すごいよ？」

だが、セフィアは撃たせたいのか、レクスの背中を押し、バイクの後部へ押す。

「あ、あの？ ぼ、僕、別に撃ちたいとか思えないんですけど……」
首だけ後ろを振り返るが、そこにセフィアの姿は見えない。レクスの身長が明らかに大きい。兄の背中を押す妹の構図のようで、そうでもない。銃を持ち闘う兵士であれば、より優れ、より驚異的であり、魅力的であり、重厚な武器を自らの手で撃ち、その戦力を実感する。それこそが喜びであり、幸福であり、恐怖になる。

「セグレアに行きたいんでしょ？ だったらこれくらいは扱えないと」

だからさ、とセフィアがレクスを後部に乗せる。セフィアの時に比べ、バイクのバランスが後輪にズれる。銃口が前方から若干の上向きになる。

「あ、あの……？」

年下のセフィアに、不安げな年上のレクス。何をどうすればいいのか、衛生兵のレクスには扱える銃火器の種類が限定され、トレイシールドマスタライズはフルオリジナル仕様。何をどうするべきなのか、まるで分からない。表情にはつきりと感情が表れている。恐らく、他の兵士にしてもそうなのだろう。誰も見たことが無い銃なのだから。

「まず、その引けてる腰を前に出して」

体が>の字に引けていた。セフィアに腰を押され、姿勢が伸びる。

「うん。そんな感じ。で、サイトを使って、目標を定める。あ、まだ引き金に指掛けないで。素人はすぐ撃とうとするから」

引き金に指を伸ばす手を、セフィアが叩いて払う。掴み所をなくし彷徨う腕を、マスタライズのツイングリップにセフィアが導く。

「これ、どう考えても車載式の機関銃のグリップ、ですよな？」

「それをアレンジした私仕様だけだね。ほら、サイトと銃口を合わせてターゲットに向けて」

セフィアの補助を受け、銃口が二百メートルほど離れた、細い岩を捉える。レクスはただ動く銃に触れているだけ、セフィアが全てを己の目測だけで定める。経験がここにも出ていた。

「見えてるよね？」

「は、はい。岩がクロスに乗ってます」

サイトの中心を定めるクロス指針。レクスが無意識なのだろう、グリップを強く握っていた。

「じゃあ、スライドを引いて。ちょっと重いけど、一気に引いてね。じゃないと装填が不十分になって、すごいことになるから」

「え？　すごいこと、ですか？」

拳銃のスライドではない、片手で引くには大きいスライド。スライドまでが取り替えられていた。

「ボン」

セフィアの小さな片手が握り拳から開かれる。戦争下において、それが意味するものなど幾らでもある。だが、共通することは唯一つ。レクスの表情が強張る。

「平気平気。私でも引けるくらいだもん。ほら、引く」

「は、はい」

セフィアに引けるのだから、自分にも。そんな考えがグリップを握っていた腕がスライドを握る。

「あ、れ……？」

レクスの腕が欠陥を浮き立たせ、表情に力が入る。スライドは動かない。二度ほどレクスは息を止めるが、やはりスライドは動かない。

い。動いても数センチ。レクスの顔はいつの間にか、顔を出し始める朝焼けの中に染められていた。

「しょうがないね。衛生兵じゃ、そんなものでしょ」

セフィアの手が、レクスの腕を外し、スライドを握る。

「えっ!? 嘘っ?」

重厚な音を奏でつつ、スライドが引かれ、銃弾が装填される。片手だった。二度目を両手で引こうとし、失敗していたレクスを他所に、セフィアは容易に片手でスライドを引いた。

「はい。じゃあ、もう一度サイトを見て、ロックオンでゴーツ!」

笑い声と笑顔がそこにはあつた。喉を鳴らし、レクスが決意に口から息を吐き出し、引き金に震えそうな指を乗せる。

「い、行きますよ?」

「うん」

セフィアはサイトに集中していたレクスから離れる。レクスは気づいていない。一人でマスタライズに接していることに。

「っ!」

心の中で何を叫んでいるのだろうか。引き金を引く瞬間に強く目を閉じた。狙撃手にはあつてはならない行為。見逃さなかつたセフィアが肩をすかせる。

「わあああっ!?!」

その時、辺りを衝撃波が走り、地の砂が浮かび上がり、弾け飛んだ。空に轟く、激しい振動。七回の超音速の爆音と、衝撃波。そして轟き、山彦となる音。もはや銃の領域ではなかつた。激動による反動でバイクが数メートル、エンジンすらスタートしていないロック状態にも拘わらず、後退し、驚きと言う恐怖に叫んでいた。波動の波が駆け抜けた荒野は、巻き上げられた砂塵が朝風にたゆたう。

「うーん、なかなかいい調子かな」

だが、その波動風に髪を揺らしながらセフィアは満足げな表情を浮かべていた。

「……あ、え……?」

何が起きたのかわからないレクス。何も聞こえなくなり、風いだ音に恐る恐る臉を開く。恐怖に声は震えていた。

「……な、なに、これ……？」

マスタライズは白煙を上げている。それも棘のように突出した六つの出っ張りの接続部と銃口。燃え尽きた兵器の末路のようにレクスと共にそこにはあつた。

「レクス上出来。ターゲットは木っ端微塵だよ」

セフィアが指差す。標準距離ではない、測定距離。その照準の先にあつたものは、マスタライズ同様に砂塵の中に消えていた。

「う、そ……？」

大砲とは明確に違う。砲弾は射出速度により衝撃に差が出る。ミサイルの正確性と炸裂性能。空気を切り裂いた傷跡が、大地に一閃を残していた。地が銃弾の軌跡に抉れ、その線の消えた先には、何もなかった。

「炸裂性能も上々。こっちは成功品かな」

レクスによるセフィアは、弾倉を外す。レクスの手のひらを超え、銃弾が収まる弾倉には、マスタライズ同様に黒色に染まっていた。「な、何が、起きたんですか？」

「このマスタライズのカスタマイズは、超々長距離射程狙撃銃なの。射程は四千が基本。今のは二百しかなかったからね。衝撃波が弾が炸裂する前に逃げ道作れなかったから、負荷がこっちまで来ただけでも大丈夫。バイクのサスペンションが上手く作用してくれたから、怪我してないでしょ？」

マスタライズに固定していたベルトを外し、レクスが地に降りる。まだ衝撃が残っているのか、足元はおぼつかない。だが、怪我はしていない。

「あ、あの、意味が分からないんですけど……？」

だが、医療知識はともかく、武器の知識は浅はかなレクスには理解力が乏しい。

「こっぴうこと」

セファイアが水の入った予備のボトルを一つ、大地に零していく。水溜りが一定量を飲み込んだ大地に生まれる。セファイアがそこに水滴を一滴をたらず。小さな波紋が広がる。

「この波紋の中心は、トレイシエールマスターライズね。それで今のターゲットが、これ」

もう一滴を少し離れた場所に落とす。二つの波紋がぶつかり合い、波紋が揺らめく。

「射出された波動は拡散して消える。でも、その到達点が射出点に近いと、射出点の衝撃が緩衝される前に、炸裂の何倍も強い衝撃波が混合して、さらに強い衝撃波を起こすの。だから、こうなったわけ」

あけすけとは言うが、そう簡単に起こりうるものではない。艦船の砲も、航空機のミサイルも、戦車のロケットですら、そのようなことは起きない。

「何なんですか、これ……化け物じゃないですか……」

今まで戦場に登場したことの無い銃。その範疇を超えているというのに、セファイアはそれを銃だという。レクスは混乱と異様に、静けさを取り戻すマスターライズを視界に納める。

「じゃあ、行こっか。早く行かないとワクチンの効能が消えちゃうし」

だが、セファイアはそれすらも気に留めず、冷め行くマスターライズと自身を昨夜のように繋ぎ、レクスを急かすばかりだった。

朝陽が顔を覗かせる東の空へ向かう一筋の道。武装バイクが走り出す。傾く影は奇抜だ。走り出し、ギアが一段上がる時、レクスの視界にはマスターライズを自らが撃ち、砲弾の直撃を受けたように破碎された岩屑が波紋状に散乱していた。

「まだびっくりしてるね？」

「そ、そりゃそうですよ。これ、おかしいですって」

レクスの頭上にある一筒。孤高に聳える銃口。道の悪い路面振動に揺れる。レクスはわずかに身を屈め、ハンドルを取る。

「世の中のおかしいことなんてね、出回ってないだけだよ。出回れば、それはよくあること、見慣れたものになる。だから私にはおかしくないの」

ヘルメット装着はレクスだけ。速度が上がる度にセフィアの髪は路面と平行に靡く。細くなる瞳は、まだ見えてこない契約の目的地を見ているのか、賭けの結路を辿っているのか、朝陽に構えるマスタライズを静かに掴んでいた。

「もうそろそろだね」

「はい、見えてきましたよ」

荒野の中に影が生まれる。そして影が消えていく。陽は昇り、高みを目指す。その眼下に文明の地が芽生える。だが、そこに花も実もない。

「賭け、どっちの勝ちかな？」

「……僕は、そうだと信じています」

近づく町は、二人の賭けの結果を表し、そして二人の短い旅の終わりの地でもあった。朝を告げる鐘楼が風を浴び、鳩を舞わせ、鐘音を響かせた。教会は戦況において民の安全を保障するものではない。だが、兵士は絶り、祈る。故郷の地を踏む為にいるはずの無い神を。その宿る地は教会。だからこそ逃げ込む人々。神を思う兵だからこそ、教会は踏み込まない。

「始まつちゃってるね」

「あつ」

鐘楼が崩れ落ちる。弾幕が空を襲う。四筋の航空戦闘機体が轟音を響かせ、風を超え、町に白煙の翼を悪魔が降らせる。その立った一筋が鐘楼を折る。破片を伴い崩れ落ちる音色は悲しみの旋律。神を讃える歌など奏でない。

「戦争で最も脅威は空。恐いね。あんなのが落ちてきたら私でも一発だよ」

「酷すぎます。国を守る兵隊が、あんなことを……」

レクスは下唇を噛むように上唇で覆う。だが、セフィアは小さく

笑った。

「貴方たちがクーデターを起こさなければ、戦争なんて起きなかった。責任はどっちにあると思う？」

戦争は突如開始はされない。段階を踏み、拒絶の果てに暴力へ発展する。全ての秩序は破棄され、殺人を以って英雄が誕生する。英雄など讃えるに値しない殺人犯であるにもかかわらず、捌かれることが無い、幸せな時間であるかもしれない。セフィアはだからこそ、罪の認識を持たず、銃を取る。

「私たちの邪魔だね、あれ」

町に近い高台。後は揺るかな坂道を下れば戦闘の最前線。朝陽と同時に空には逃げ惑う鳥たちが羽ばたき、空の脅威にさらされる町は破壊され、大地は地が弾ける。全ての生物は容易く死へ誘われる。そこへ向かうこと、それは恐怖。だが、契約と任務は果たすべき責務。

「レクス、止めて」

「え？ あ、はい」

高台の傍らにバイクが止まる。町の空には旋回し、空爆を行う敵がいる。国を守る軍が町を破壊する。それは最前線における敵を殲滅する為の行動であり、罪にはない破壊行動。そこに敵がいる限り、それは正当なのだ。

「あの、何をするんですか？」

「ん？ 撃ち落とすんだよ？」

バイクを降りるセフィアはマスターライズのグリップを空へ傾ける。傾斜角の先に、空の王者が地を伏しにかかる。だが、その王者を地を這う狩人が静かに狙いを定める。

「ええっ！？ 戦闘機を相手にですかっ！？ 無謀ですよ。戦闘機に銃で応戦なんて意味が無いですって」

航空機の装甲は銃では打ち破れない。空気抵抗、気圧抵抗、様々な要因をクリアするからこそその空を制する。そんなものにカスタマイズされたオリジナルの銃であろうと……。

狩人は、その手の武器に己の全てを乗せ、獲物を狙う。火が吹いた。地を波が襲う。空へ消える人間では把握出来ない速度。鋭利な音が風を劈く。

「あ、え……？」

四機あつた戦闘機のうち、一機が急速に転回した。不自然なほどに。

「次、行くよ」

セフィアが引き金を引く。銃口をすばやく何も無い空へと向ける。そして待つ。

「レクスツ、私の後ろに隠れてて」

言つと同時に波動がセフィアの小さな身体を大きく揺らす。セフィアの二本の足が地を滑る。バイクの車輪が地との摩擦に焦げ臭さを漂わせる。空ではまた一機が不自然に機体を揺らしている。だが、二機とも損傷を受けたような形跡も、被弾煙を上げることもない。だが、確実にその高度を落とす。二機は同じ方向へ進む。その先にあるものを目がけるように、そこへしか飛ぶことが出来ないように。「セ、セフィアツ、気づかれましたよっ？」

通信による把握だろう。二機は高度を下げ、最初の一機のパイロットが脱出した。期待は急速にバランスを崩し、ロールするように町の外れの荒野に墜落する。空へと噴煙を上げる火山のように黒煙と火柱が昇る。レクスは驚きに呆然立ち尽くす。その前に居るセフィアは、片手を引き金に沿え、もう片手を背中の剣の柄に掛け、引き出す。

「私の後ろから動かないで。死ぬよ」

剣を抜き、セフィアがこちら側に気づく戦闘機に向かい、銃口を構える。レクスはセフィアの腰に抱きつくように身を縮込める。セフィアが抜いた剣を、己とマスターライズの間突き刺す。剣の刃には穴が開いている。そこへセフィアが腕を通し、引き金の遊びを消す。

「来るよ」

セフィアとレクスの体が剣の中へ消える。そこへ戦闘機の機銃が両翼の付け根から光を発し、地を抉り、迫る。乾散する音が地鳴りを呼び、やがて伸びた機銃の軌道が二人へ直撃する。鈍音から金属音に変化する音色。その衝撃に剣が揺れる。

両脇を通過する銃弾が直撃音の衝撃で押しってくる。そこへ強い衝撃が加わり、レクスはその衝撃に後ろへ飛ばされる。戦闘機のエンジン音が激しく耳打つ。レクスは転ぶ。セフィアは立つ、その足はその場を動いてはいない。

「うわああああっ！」

そして響くレクスの叫び。後方からの轟音に胎児のように身を丸めた。それは機銃を受けた中で、セフィアの撃ったマスターライズによる撃墜。距離を置いた後方に墜落した戦闘機の爆発。恐怖の中でその爆発と熱風、轟音には自らが被弾したものと思ったのだろう。……レクス。何してるの、そこで？」

セフィアの声が後ろで倒れこむレクスを蔑む。

「……………い、生きて、る？」

恐る恐る体の硬直を解放する。戦場にて最も愚かな体位。視界の中に飛び込む炎上する機体が三機。残機は既に戦闘状況の悪化と、状況確認の不備、戦力後退により、撤退したのか、既に遠い空の中に鳥のように姿を小さくしていた。

「怪我、してないよ、ね？」

轟々と燃え盛る敵機。熱波と燃料、搭載弾の放つ異臭が鼻の感覚を犯す。喉を蝕む化学製品の刺激。その中で、レクスは状況をようやく理解したのか、自分の両脇に空いた穴に恐れながらも身体を起す。

「は、はい……………平気で……………セ、セフィアッ？ どうしたんですか、それっ」

後方の状況に気を取られていたレクスが、セフィアに駆け寄る。

「平気。大したことないし」

真白に穢れ無きセフィアのワンピース。戦場の花びらのような美

しさに、戦場には相応の色でありながら、その強さを見せ付けるセフィアには異質な色。赤。出血だった。無慈悲に人を殺し、躊躇いも悲しみも無く戦場で悠を打つ少女の血液は、人間だった。

「大したこと無いって、大したことですよっ、それっ！」

レクスが思わずセフィアの腕を取る。その腕は盾の剣の穴の向こうの引き金を握っていた。

「撃墜されたパイロットの怒り、受けちゃったね」

腕には力が入ってはいない。垂れる細い腕には、滴る紅い液体が大地に流れ落ちる。鮮血は白の乾いた大地に黒味を帯び、乾いていく。だが潤いは滴り続ける。セフィアはまるで止血処置をしようとはしない。無傷のもう片手で盾の剣を抜く。レクスの運転でついた傷には、更なる傷が残る。数発の衝突痕。貫通こそ耐えたが、裏刃に比べての損傷は大きい。バイクの車輪も銃撃を受け、パンクしていた。フロントボディにも貫通跡が残る。走行は不能だった。マスタライズは無傷だが、セフィアの弾倉の入ったリュックにも焦げ痕が残り、いくつかの弾が転がっている。

「ここからは歩くしかないね。そう遠くないし、ワクチンも無事。

レクスも怪我してないし、行ける行ける」

剣を再び背負うセフィア。その仕草に出血した腕の血がワンピースに付着する。

「行けるわけ無いじゃないですかっ！ 何言ってるんですかっ。ちよっと待ってください」

セフィアの背負っていたリュックを取ると、止血剤と包帯、ゴム紐、消毒アルコール、脱脂綿など、止血処置に必要なものを即座に取り出す。

「沁みますけど、我慢して下さいね」

ゴム紐で止血箇所より上部を圧迫し、脱脂綿で血を拭き取り、消毒アルコールを含ませた脱脂綿で傷口を消毒する。そこに止血剤を噴きかけ、脱脂綿と包帯で圧迫止血をする。

「……………」

処置の痛みと負傷した痛みは比にならない。治療の痛みなど感じないのか、セフィアはその手際の良さに呆然と小さく口を開けたままだった。

「暫くはまだ滲みますけど、止血剤が作用してくると大丈夫だと思えますし、銃弾も直撃じゃないので、大丈夫だと思えます。でも、あまり動かさないで下さい。血流が激しくなると血管が膨張して血小板の作用が遅れますから」

処置に有した時間は十分程度。セフィアの腕は垂れたままだが、その手を流れる鮮血は、綺麗に拭き取られ、アルコールの臭いがセフィアの手を染めている。包帯に血も滲んではこない。あまり力が入らないようだが、セフィアがその手を目の高さに持ち上げ、角度を利用して確認する。何も言葉は発しない。手際の良さと腕の確かさに感嘆の吐息を漏らしていた。

「一応の応急処置にしか過ぎませんので、出来れば町の診療所とかで治療した方がいいと思います。傷口も軽いとは言えないくらいでしたから。焼くって術もありますけど、やっぱり女性には縫合したほうが後に残らないので」

てきぱきとレクスは先ほどの怯えなどどこへやら、セフィアの治療により汚れた者を持参していた小袋に密閉し、リュックの中に仕舞う。

「……レクス、何者？」

見事な処置。短期間による医療技術の発揮。セフィアが初めてレクスのことに関心を持つ問いを言葉にした。

「え？ 衛生兵、ですけど？」

意味を理解していないのは、やはりレクス。そうではない。セフィアはそんなことを知りたいわけではなかった。

「そうじゃなくて、何なの、この処置」

だが、セフィアも聞き方が不自然を招く口調。

「へ？ あ、すっ、すみませんっ！ 何かおかしかったですか？
痛みますか？」

伝わらない双方の本意。見事な処置を不始末な出来に受け入れるレクスは、慌てて確認しようとするが、セフィアがそれを遮った。「何で、こんな腕があるの？　すごいじゃない。何で戦場で衛生兵なんかしてるわけ？」

セフィアは理解したのだろう。その腕の良さがあるなら、ゲリラ軍とは言え、前線に赴かせたりはしない。軍医レベルの腕と判断したのだろう。

「え？　それは、分からないですけど……」

上からの指示に従うだけ。恐らく上の人間はレクスの腕を知らないのだろう。だからこそ、初めからあつた経験者と言うものを、衛生兵として訓練し、戦場へ送り出した。前線と言う戦域を今はじめて経験しているからこそ、セフィアがその能力の開花を知る初人^{ついで}と言っわけだ。

「はあ……借りが出来ちゃったね」

セフィアが息を吐きつつ、バイクからマスタライズを引きずり降ろす。

「借りって、これくらい、衛生兵としては当然です。それに助けてもらってるのは僕の方じゃないですか」

落ち着きを取り戻す二人だが、その周囲は残骸が炎上し、町中にも不気味な黒煙が立ち上っている。時間は無い。

「レクス。町に入るのは少し待って」

マスタライズの脚部を肩にかけ、必要な弾倉をいくつか腿のホルスターに取り付け、ワンピースのスカートを平然と捲り上げる。

「わあっ！？　ちよっ、な、何してるんですかっ！？」

とっさのことに目を反らせるレクスの顔は赤い。捲りあげられたスカートの下に覗かせる白い足と下着。ホルスターを巻くその足は、色気よりも武装による非人間的姿があつた。

「ん？　別に見られて困るものはないけど？」

その言葉に反応してしまうは、やはり男の性。罪の意識と性の葛藤。戦場にて禁欲生活を送る若い男には、その刺激はやはり大きい。

レクスも理性による抑制と葛藤しつつも、やはり見てしまう。

「……………え？」

だが、その瞬間には欲望は疑念に変化し、理性が大きく働いてしまふ。

「セフィア……………？」

セフィアの少女の体。捲られたワンピースの下に露出する肌。しかし、下着は見えていても、肌という肌には、清らかさは無かった。大腿部、脇下、腰、あらゆる箇所にナイロン製のホルスターがあり、そこに弾倉、銃、手榴弾など、戦闘に合わせた武器が仕込まれている。そして何よりレクスを驚かせるもの。

「どうした、んですか、その傷……………？」

綺麗な顔立ち、手足の精錬されたスタイル。だが、捲られた中にある身体には無数の傷、腫れ痕、火傷痕、手術紺まで、清楚な少女の身体ではなかった。肌を露出する場所にだけが美しさを保っている。

「ああ、これ？ 訓練とか実践で怪我するの。契約がある以上、顔とかは綺麗にしてもらえりけど、身体までは時間ないしね。いっつも無傷ってわけにもいかないし」

リュックから取り出した弾倉をホルスターに収納したセフィアは、道を外れた茂みの方へ歩き出す。後を追うレクスは、シヨックなのだろう。戦場で殺人を犯す少女が平然としているその裏で、身の犠牲を払い、それすら当然のように受け入れていることに。

そして、そのことに気づくことも無く、夢物語を言葉にした自分の情けなさ。衛生兵としての心眼の欠落に。

「あ、あの、何でこんなところに？」

町を見下ろす茂みの中、マスターライズの脚部を開き、大地に横たえる銃身を、セフィアはサイトを使い、町の中へ銃口を構え、自身の身体もつつ伏せに屈めた。後方でレクスは腰を下ろし、両膝をつき、その様子を見つめる。迷彩服のレクスはともかく、セフィアの白と付着し、乾燥していく赤は目立つ。だが、気にすることなく銃口を眼下に向け、サイトで状況を確認する。茂みの中にまで響く銃撃戦。何人が生き、何人が死ぬ。そんなことはもうどうでも良い戦況。落ちた機体のパイロットがどうなったか、付近にいる可能性も否めない。だが、セフィアは周囲を警戒するレクスに指で招く。

「前線、こつちが劣勢だね」

レクスにサイトを覗かせる。

「あつ……」

人だったものが転がっている。男女子供、年寄り、何でもありだ。

だが、尋常ではない数が腐り、獣、虫の餌になり、やがては穢土になる。痩せこけた犬が死体に鼻を寄せる。そこへ銃弾が飛ぶ。新鮮な血液が大地に吸い込まれ、犬の血か、その犬の元へ倒れこむ兵士のものなのか、男が犬の上に倒れ、二つは動かない。動物も人も関係なく死んでいく。レクスは静かに顔を上げる。気持悪さもあるのだろう。サイトの先で倒れた男が、己と同じ服装を纏っていたことに気づいたかとはかく、死んだ。その事実は戦争では当然のこととでしかない。生きることへの執着が招く結果だ。

「ね？ 市民は生物兵器の餌食。こっちの兵も残存兵力が少ないし、向こうはきつとワクチン接種済みの精鋭部隊。部隊数の把握はしてないし、レクスも多分知らないでしょ？ 状況は不利。私のマスタライズで撃ち殺せる数は六十。残りの弾倉じゃ、全部は狙撃は出来ないし、直接乗り込んでも、今がこれだから確実にって保障は出来ないね」

セフィアの言葉が意味するもの。ワクチンを届ける為には町へ行かねばならない。だが、サイトが拾う状況に、負傷したセフィアと戦闘経験の乏しいレクス。セフィア単独でなら余裕はあるのだろう。セフィアは戦場を楽しむ少女だ。

「じゃ、じゃあ、このワクチンは……？」

レクスの腕の中にある保冷機能のついた小型保管庫。ソーラーパネルによる電力確保による冷蔵保存可能な保冷庫。その中には仲間を救うための対生物兵器抗生物質が既に注射器に収まっている。正規軍の撒いた兵器に対応するワクチンがあるということは、国の中で分裂した組織があり、情報が渡っている。だからこそ精製される薬。だが、セフィアにはそんなことはどうでも良い。契約に従うだけ。だからこそ、笑うのだ。

「もちろん、契約は果たすよ。心配しなくても、私の契約はレクスとワクチンを無事に前線部隊のところまで護衛することだから」

力強くは無かった。腕の包帯には赤みかわずかに滲む。策を練っている表情。レクスは何も言えなかった。

「とにかく、まずはここから敵を極力撃つ。そして、町に行つて部隊と合流する。武器も補給物資も支援は期待出来ないだろうから、レクス、貴方にも撃つてもらうけど、撃てるよね？」

人を殺せと見る。すぐに怯え、身を縮込める衛生兵だ。状況の劣勢を知りながら尻込みをしている余裕は無い。レクスの答えを聞く間もなく、セフィアは大腿部のホルスターから、黒のマスタライズに装填される真白の弾倉。セフィアと同様に不自然な弾倉だった。

「レクス。聞いて」

「あ、はい？」

サイトから敵の潜伏位置を熱源、赤外線、光学増幅機能を使役し、小さく息を吐き、笑顔の集中力を消す。あまりセフィア自身余裕が無い。負傷した腕を庇うように片方と頬にグリップを固定し、身体が傾くが、狙いは定めることは可能だった。

「多分ね、私、最後まで護衛出来ないかもしれない。だから、ここ出来るだけ敵を殲滅するから、いざとなったら、自分一人でそれを届けて。私のバックアップに期待ばかりしないで」

だが、セフィアの銃口は定まらない。探しているように動きを止めない。

「それは、やっぱり……あの子、ですか？」

定まらない銃口の狙いは、兵士を狙わない。位置を把握しただけに留まり、目的は別を狙う。

「いないの。それに嫌な胸騒ぎもする。良い？ 私に何があっても、レクスは任務を果たすことだけに集中して。前線なんだから皆死ぬか生きるかしかない。やれるでしょ。男だもんね」

やはり返事は待たない。不意にセフィアが銃口を固定し、引き金を引く。

「ごちゃごちゃしてもしょうがないから、始めるよ」

マスタライズが銃弾を射出する。茂みの葉が揺れ、弾ける。サイト先の敵軍が倒れ、その場に緊張が起きる。一瞬にして警戒する兵士と、撃たれた兵士を看護する兵士。だが、即撃は死を選ぶセフ

イアの銃弾。引き金を引いてはスライドを引く。白い薬莖が一回の銃撃に三発弾け飛び。射出音は一発だが、この弾倉にある銃弾は三発発射されているようで、狙撃標的者になったものは、脳天、喉元、胸元を同時に撃たれていた。臨床試験と実地で実践する効果測定の結果に、セフィアは満足げに引き金を引き続ける。レクスは何も出さず、その小さな背中を静かに見つめるしかなかった。

弾倉を抜き、新たに弾倉を付け替え、引き金を引く。次々と分らない狙撃手に倒れる兵士。町までの距離はおよそ六百。倒れる兵士と狙撃箇所を見た軍兵のいくつかは、射出方角に気づき、サイト越しにセフィアと目が合う。だが、その瞬間には兵士の姿はサイトから消える。

「セフィア、血が……」

銃の反動にセフィアの負傷箇所からは血が止まらなくなる。それを気にする暇はない。

「平気。それよりも町に行く支度を整えてて。もうそろそろで道が空くから」

一時退却を強いられる中で、数人の兵士が発砲してくる。正確な射撃ではなく、なだらかに下る傾斜地に散発的に穴が開き、砂塵が舞う。レクスは身を屈め、ただ時を待つ。

「下手糞。私の相手がそれで勤まると思ってるのかな？」

銃弾は貫き、男は死ぬ。遺言は大地に埋まる銃弾に添え、花咲く日を待つ種植えだった。

「戦場の男なんて、ほんと、最悪」

サイトを覗くセフィアが嫌悪を見せながら引き金を五回引いた。

「え？ 何か言いました？」

「うん。何でも。戦争の被害者は、その場だけじゃないってこと。理解出来なかったレクスを他所に、セフィアが銃を茂みの先から引き抜き、空の弾倉を捨てた。

「うん。とりあえずこれで時間は稼げるはず。向こうの部隊もこっちに気づいてくれると思うんだけど。生きてれば、ね」

セフィアが片手で身体を起こす。負傷した腕は垂れたまま。マスタライズの射撃の反動にやはりこれまでの余裕はなく、不肖に伴う痛みと熱に、微かに汗を滲ませていた。

「ここからは今までと違うよ。覚悟は出来た？」

「はい。大丈夫だと思います」

自信はないが、セフィアの姿を見て、思ったのだろう。子供が大人を守る為に強く在る。それでも果たそうとする契約と言うものに躍起になる姿に、動き出さないわけにはいかないのだろう。戦争に反対する立場で戦場に立っているレクスなのだから。

マスタライズの不要な装備をセフィアは外し、その場に捨てる。

脚部、バレル、グリップ、加速射出装置、次々と武装解除されるマスタライズは、やがて片腕に抱ける小銃のようになった。空になったホルスターを体から解放し、それも捨てる。背中の剣と片腕の銃。セフィアはそれで契約を終わらせるつもりのようなようだ。

「あのさ、レクス。ありがと、これ」

セフィアの腕の包帯。血は滲むが適切な処置にそれ以上の傷は悪化は見せていない。

「へ？ あ、いえ。これが僕に出来ることですから……」

思わぬ感謝に照れるレクス。

「戦場にレクスみたいな人間が沢山いれば、面倒ごとも早く片付くんだけどね」

それは、少女の言葉であり、状況を解した狙撃手と衛生兵との契約だった。

「そうですよ。だから僕は信じているんです」

自信を持つ言葉に、セフィアは笑顔を見せる。服と腕には血痕がある中で、それは二相応だった。

「だから、レクスはきつとこれを使えない。でも、使わないといけない。だから、これは私からのプレゼント」

大腿部のホルスターから一丁の銃と弾倉を取り、レクスに渡す。意味が分からずにレクスは受け取りつつ、意味を求める目を向ける。

「ねえ、人ってどうして出会うと思う？」

だが、セフィアはまるで関係を持たない質問を投げかける。

「え？ 出会う、ですか？」

「そう。人が出会う意味って何だと思う？」

不可解に首を傾げた後、銃を見ながら応える。

「添い合う為、ですか？」

自らも解しない答え。セフィアは笑いながら一蹴する。

「それ、出会った後だよな？」

「あ、そっか……。じゃ、じゃあ、えっと……」

この状況下で考えるのは難しいだろう。レクスは考えようとしつつも、考えることに考えを巡らせている。それを見て、セフィアが言う。

「人はね、死ぬって知ってるから、出会うの。怖いもんね。知ってるのに経験したことがないことって」

「え……？」

レクスの視線がマスターライズを見つめるセフィアを映す。

「死なないって知ってたら、戦争は起きない。商売もしない。食べないし、寝ないし、キスもしない。だって、出会うことに意味がないもん。出会っても飽きるから。でも不死なんてない。だから人は恐がるの。死ぬ恐さを過去から知るから、怖い相手を殺そうとするし、生きようと命を削って働いて、食べて、寝て、抱き合って子供を作る。ねえ、レクス。キスって、好き？」

レクスは呑まれた。少女の甘い笑顔。大人の色気の艶髪。何もない自然。休む銃弾。契約を果たすだけの少女に、衛生兵は言葉を返せない。

「え、あ、う……」

レクスの初さにセフィアが笑う。

「純情だね、衛生兵なら研修で裸くらい何度も見てると思ったのに、経験ないんだ？」

「あ、当たり前ですよ。研修は研修で医療なんですから」

何もない茂みの中。それは状況が異なれば、また別の意味になることだろう。

「この契約が無事に終わるかどうか、もう一つ、賭けない？」

セフィアが空に向けた指を、レクスに差し向ける。悪巧みを考える笑みも、先の言葉に少女と言う概念を女性というものへ変化させてしまったレクスには、見抜けない。

「か、賭けて、何を……ですか？」

「もちろん、キス」

セフィアが自身の唇に当てた指先を、レクスの鼻先に当てた。

「そ、それって……ダメな時の、リスクがないですよね？」

「契約満了なら。だが、契約の未完ならば……。」

「あるよ。死ぬ。それだけ。どっちに賭ける？ 私はもちろん前者」
レクスは？ と視線で急かす。そこにいるのは、十三の少女ではなかった。レクスは言い返す言葉が詰まる。だが、セフィアはいつもの笑みで笑うだけだった。

「決まりだね」

そうしてセフィアは町へ向かい、茂みの中を歩き出す。呆然としているレクスは、その小さな背中に嬉しさなどを覚えることが出来なかった。

「死ぬから、出会うなんて、残酷ですよ、そんなもの……」

そう一言想いを口にする。聞こえないセフィアはマスターライズに銃弾を装填していた。

「出会いは、恐いから、死ぬから、じゃない。生きるから、共に在りたいから、誰もが平和を願うはずなんです」

レクスは静かに渡された、まるで形見のような銃を握り締め、ワクチンの箱を抱え後を追った。

茂みを抜けると、広がるは先ほどの光景の続編。燃え尽きる戦闘機の残骸。町の中からは銃音が止んでいた。崩れた教会の鐘楼が既に静けさを保ち、舞う粉塵が町を白肌色ぼやけさせている。だが、二人の足はそこで立ち止まっていた。

11th・刃と銃と少女と

「……待ってた」

開けた荒野の道。路肩は緑に茂みを見せているが、そこは荒野だった。黒い装束を纏い、腰に日本刀を差すサクラが佇んでいる。乱れる白髪を結い上げることなく、風に吹かす。凍てつくように不動にて道を封ずる懽然たる姿。セフィアの黒髪は艶を帯びているが、サクラの白髪は纏まりを得ていない。

「どつりでいなかっただ？」

「……ボクは、契約の名の下に、ここにいる……」

対峙する二人に、レクスは身の丈の差して変わらない二人の少女に違和感を感じる。

「言わなくても、私も同じ。私の邪魔をするの？」

「……セフィアは、ボクの……邪魔、を、する？」

双方の契約と言う言葉。それを果たすことに執着を見せる。だからこそ、険悪ではなく、殺伐とした殺気が漂う。レクスは動けずにいる。

「セグレアがこんなことするなんて思わなかったけど、状況は、分かっているでしょ？」

「……ここは、戦場。障害は、斬り払う……」

「なら、私は撃ち抜くだけだよ」

無表情のサクラと、笑顔のセフィア。敵対する二人が同志だと解しているレクスは、飛び出そうと足に力が入る。戦争で仲間の少女が殺し合おうとする。そんなものを肯定するほど、レクスは悪を持ち合わせていない。だが、その足は止められる。

「レクス。ここですばらくお別れだね。町の敵は暫くは様子見に動かないはずだから、今のうちに部隊と合流して、治療してあげて」

「え？ セフィアは？」

一人で行けということに、セフィアを案じる。振り返るセフィア

は苦笑を浮かべていた。この状況を見て理解しろ。そう語っている。足止めをするから、先へ抜けて任務を果たせ。それが契約の達成になる。何も言わずとも理解しないではいられない。

「サクラはそこいらの兵士じゃ比にならないの。レクスなんて一瞬で首を取られるよ。良い？ 三カウントで私の左から走って」

「で、でも」

「良いからやるの。そして、契約を果たしてきて。レクスなら出来るからっ」

セフィアが強く言うのとカウントを取る。

「……それがワクチン……やっぱり、持ってた……」

サクラの視線が冷徹にレクスを射抜く。竦みそうになる足をセフィアが庇うように前に立つ。

「悪いけどサクラ。レクスの邪魔はさせないよ。私が契約を未遂にしたことなんてないんだから」

銃のスライドを引く。カウントは一を切った。

「レクスッ！ 何があっても死んじゃダメだからねっ！」

ゴーツ！ とセフィアが銃を構え、発砲した。町へ続く道を明けのようにセフィアがサクラへ回り込み、その後ろを半ば自棄になったようにワクチンのケースを抱きかかえながらレクスも駆けた。

「……行かせ、ない」

だが、サクラも動く。銃弾を身体を傾け交わし、セフィアの背中を狙いに刀を抜く。斬りに行くのではなく、貫き。切先が峰を地に反らし、上体が捻られる。セフィアはレクスを背に、銃を撃つ。乾発する銃奏が風を切る。だが、当たらない。

「レクスッ！ そのまま町まで突っ走って。すぐに追いつくからっ」

「は、はいっ」

急ぐ他は無い。呑気に話している暇も無い。立ち位置が逆転したとは言え、間合いはサクラに味方している。

「……ワクチン、渡す」

サクラの日本刀が大気を薙ぐ。セフィアは横に流れる刃に身を屈

め、足元に銃を撃つ。そこに二本の足は既に無い。

「させないって言ってるでしょっ」

影は二つが重なる。セフィアが小銃にまで変化したマスターライズを空へ向け、連射する。

「……これじゃ、ボクは……倒せない」

射程内に収まるサクラは舞い散る花びらのように軽やかに長刃を操り、刃を地に振り下ろす。セフィアの放つ銃弾が日本刀に火花を散らし、弾ける弾がサクラの上着を切り裂く。刃はそれでもぶれを見せない。

「っ……ん。……ほんとにぶった切っちゃうんだ、信じらんない」

攻撃から防御へ移行するセフィアは、振り下ろされる刃に地に伏す。背中の盾の剣がその刃を受け止める。

「……日本刀は、追隨を、許さない……」

意気込む声など発しない。うつ伏せのセフィアに、振り下ろした刀を突き刺しにかかる。セフィアは再び眼前にあるサクラの足に銃を撃つ。サクラは刀を上げ、後方へ飛ぶ。銃弾が追い、地に等間隔に野うさぎの巣のように穴が開く。

弾倉の弾がつき、セフィアが腿のホルスターにすばやく手をかける。だが、サクラは速い。地を蹴り、砂塵をわずかに蹴り上げ、セフィアには刃の長さを見失わせる程に曲線を描く刃を地に平行に射抜きにかかる。片手はマスターライズ、片手は弾倉。いくら銃の扱いに長けたセフィアとは言え、弾倉を装着し、スライドを引き、銃口を差し向け、引き金を引く。この動作には遅れが生じる。

「少し、くらい、待とうって気、ないの……?」

剣を抜く暇はなく、マスターライズでその剣を受け止める。切先が銃鋼鉄に金切音を漏らす。

「ない」

セフィアの体が後方へ強く押される。サクラの力は異常なほどにセフィアを滑らせる。

「ほんと……厄介、だよね……仲間同士、って」

その瞬間、サクラの体が前のめりに力の作用点を失う。惰性により刃の軌道が乱れる。

「でも、力じゃ、私も負けてないんだよっ」
「っ」

そこへセフィアの剣が風に鈍音を交えて、強く横に払われる。足元にはマスターライズがあつた。浮いた足を一瞬地に着け、後方へ飛ぶが勢いが足りない。そこはまだセフィアの剣の間合いだった。横に振る太剣をサクラが日本刀を地に突き刺し。滑る。

「はあああああつ！」

だがセフィアの剣は止まらない。日本刀の峰が剣の刃を受け止め、一瞬の光が散る。

「……弱い、力」

サクラの前には三つの線が走っている。それだけ滑らされた。だが、日本刀もサクラも平然と構えを取り戻す。

「さすがに、片手じゃ無理だね、サクラには」

剣を握る腕はか細い一本。もう片腕に握る力は無い。マスターライズの弾倉を持つのが精々のように垂れる。足元に無造作に転がる重鉄鋼物は、裁断されている。鉄さえも切り裂いている日本刀に、セフィアは剣を見合わせる。

「……ぼろぼろ。剣が泣いてる」

「色々あつたの。私のせいじゃないんだからね」

単調な会話はそれだけで場を和ませる効力を持つ。しかし、この場においては間合いを計るための道具に過ぎない。

「……ボクの、用は、セフィアにない。……退けば、斬ら、ない」

サクラの契約。それは明確に言葉にせずとも、セフィアと敵対にある以上、ワクチン輸送の阻止。兵士の殺戮を優先すれば戦況は収まる。だが、それをしないのは、その価値が無い。敵兵を殺したところでワクチンの存在がある以上、町の人間の生き残りの情報が広まれば、虐殺を国が負う。ならば何もせずワクチンさえ町へ入れなければ、死を待つのみ。町での戦闘は残存兵の殲滅だけではない

のだろう。

「私もサクラに用はないよ。撃たないで済むなら、それが一番、でしょ？」

セフィアのマスターライズは使用不能。あとは戦後の子供の玩具になるか、人類の産物遺物になるか。

「……狙撃手スナイプは、剣術手ソディストには、勝て、ない」

その武器が銃でない狙撃手なら。

「でも、負けてないよ、まだ」

セフィアが太剣を斜め上空に振り上げる。サクラはそれを振り下ろす刃で受け止める。双方の力に震える刃は、削れ、高音を響かせる。サクラの日本刀が強く太剣に上圧を掛け、切先を地に植える。サクラの両腕に、セフィアの片腕は持たない。剣の防御力を以つても、その代償の重量には長時間のスタミナはない。セフィアは切先を地に植えたまま柄を前へ押し出す。サクラが振り下ろした刃を手首を捻り、上空へ振り上げ、太剣に刃を走る。耳を劈く音はやがて太剣を超える。

「……ツーハンドソードは、動きが遅い……」

セフィアの盾の剣は、基本は両手剣。それを片手で扱うリスクは通常の倍を超える。力と素早さの衝突は、素早さに比が出てしまうものだ。その上に日本刀の切れ味は神の作り出す娯楽のものではない。神が生み出し、人間が天を目指さぬ為互いに容易に殺しあう為の鋭刃を有する万能の逸品。振り上げた刃を受け止める為に持ち上げようとするセフィアの腕が、血管筋を浮き立たせる。だがサクラは早い。踏ん張りを利かせ、力で押すセフィアだが、サクラはまるで踏ん張ることをしない。流れる水面を滑る木漏れ日の葉のように、動きの延長上に流すように振る。

「……日本刀は、力を入れずとも、触れれば、裂く。それじゃ、勝てない……」

降伏するなら擁護する。敗戦を受け入れる。刃の軌道は無尽に向きを変え、隙を突く。対応するセフィアの表情の中に、遅れが生じ

始め、額の横から一筋の汗が垂れる。速度を上げる切先については両手が必要だ。それを無理して使役する負傷した腕には、止まった血流が熱を帯び、滲み出す。

「怪我……珍しい」

「でしょ？ 私もそう」

会話を剣音が劈く。遠くに響く再開の銃発が観客のように状況を急かせる。

「時間、無いかもしれないね。急がないと」

「……勝てる？」

サクラには、セフィアはこの剣岳で突破するしかないと見ている。セフィアもそのために疲労する腕を上げ続ける。

「私は、契約失敗だなんて、汚点は残さないよ。背中への傷は、恥、でしょ？」

追い越すに至らない、ついていくだけのセフィアの剣。元来が狙撃手だけに狙いは良いが、剣術を基本にするサクラには見切られる。そこを突くことは嫌味であり、勝利への鍵。押していた足元の大地を滑る線は、セフィアに状況を変貌させる。

「剣士も……同じ。だから……」

サクラが間合いに距離を置く。セフィアも体制を整え直す。わずかの間を風が吹く。審判の鐘の音を待つ、腹を空かせ、勝者にのみ与えられるわずかな食事を得る為に、仲間であるうと、誰であろうと狩る。その欲望に支配される愚かな奴隷のように、町から一際響く銃弾の鐘の音が遥かに高い、平和の空へ響いた。

「契約の為に……」

「……斬るっ」

一蹴りに全ての力を注ぎ、圧縮された脚力を解放するサクラ。その腕は刀を滑走する車輪が持ち上がるように、切先から持ち上げられる。セフィアはそれを阻止する空気の抵抗のように、太剣を、いつかの戦場で掲げた勝利の輝きのように、陽光を綺羅星のごとく片手で輝かせ、振り下ろす。

その一瞬で、決する為に、契約を完遂させる為に、サクラは町へレクスを殺しに。セフィアは町へレクスを殺させない為に。

衝突する波動は水の冠を生まず、砂塵を風に溶かすこともなかった。

「……………え？」

振り上げたサクラの日本刀が、想像以上に重量感の無い障害を薙ぎ払う。セフィアの姿は、そこにはなかった。振り下ろされた太剣が無人に落ちる。サクラの刀はそれを上空へ弾く。甲高くは無い、鈍る金音が大気に波のように拡散し、剣は弾き飛ばされるボールのごとく飛ぶ。風を切り放物線を辿る剣に、サクラは瞬時に腰に巻いていた紅い帯に隠し差していた短刀を抜き、抜け切らない力の情性に、前に出る脚を後方へ向き直すように飛び、捻る体の勢いを利用して、左腕の短刀を上空で投げた。

「……………っ」

サクラの体が飛び跳ねた勢いではなく、衝撃に太刀を手にしていた腕が背中に弾かれる。揺れる身体で着地するサクラは着地の衝撃に、水を張ったグラスを落としたように、荒野に血が流れる。鈴鐘のように日本刀の太刀が綺麗な音色を発し、転がる。

「いったあ……………」

攻撃の激動が静粛を宿す。

「……………卑怯」

サクラが腕を庇うように押さえる。ノースリーブの上着の肩から垂れる血液は、脈動に合わせ、勢いが上下する。セフィアの銃弾が肩を撃ち抜いていた。サクラは一对一の剣による決着を望み、力を圧縮し、放った。だが、セフィアはそれをしなかった。素振りだけを見せ、サクラが太刀筋に着眼していた際に、ホルスターに隠していた拳銃を抜き、放たれる情性に即座に対応出来ないサクラの隙を突き、発砲した。戦場だから、義ある闘いは存在しない。

「策略、よ。……………良い結果じゃ、なかつたけどね」

セフィアが、未熟の果実をかじった様に表情を崩しながら、負傷

していた腕に手を掛ける。そこには包帯を赤に染める銀の刃。セフィアの手の甲を射抜いている。刀を抜くことは剣に比べ、難しい。曲線を描く刃は独特に損撃を与える。セフィアの手は小さい。そこに刃が手の甲と平に姿を見せている。瞬時の攻撃に完全にセフィアの片腕は機能を失い、ワンピースには血飛沫が模様を描き出す。抜かれた箇所の出血は著しい。セフィアはワンピースの裾を血の付いた短刀で切り裂き、とっさに止血する。サクラの短刀を投げ捨て、それをサクラが血を腿の生地で拭う。

「これで条件は、そろったんじゃない？」

双方片腕負傷。武器はセフィアが腿のホルスターに装着していた拳銃が一丁。ホルスターには弾倉が一つ。拳銃の残弾と合わせても五十はない。一方のサクラは隠し持っていた短刀が一本。落ちる太刀を瞬間的に見るが、セフィアが拳銃を発砲し、太刀が二人の間合いから消える。銃弾は減り、対するは短刀一本。太刀を拾いに下がれば、サクラは蜂の巣にされる可能性が高まる。一方のサクラの剣術の腕は確かであり、距離をとるうにもセフィアは、サクラの短刀は攻撃用ではなく、主に防御、もしくは投擲による武器だと把握していて、安易な行動は腕の損傷を彷彿させる。同じセグレアから派遣された契約少女であり、知らないはずが無いのだ、互いに。

煌めく太陽に照らされる、光と影を成す風体の少女二人。対を成す腕が垂れ、負傷により体力の消費は著しい。大人ではない以上、幾ら異質な存在であれど、所詮は人の子。負傷が大きい以上、疲労は募る。

「……………ひとつ、良い？」

セフィア同様に止血処置をするサクラの表情は疲労は浮かんでいないが、感情は出ていない。

「……………セグレアは、同じ戦地に、対立させない。……………じゃあ、ボクらは、どうして？」

「私も知らない。ルーシユは何も言ってなかったもん」

町には再び銃弾の飛び交う円舞曲が流れる。終わるまで繰り返さ

れるその旋律は、何を招くのか。国を思う内紛の末路は安寧ではないだろう。

「あ、でも。私、この前はそっち側だったの。サクラも知ってたでしょ?」

「……地域が違うだけ、だった。でも、ボクは継続。セフィアは、寝返った」

「寝返ったってひどくない? 指示に従っただけなんだけど。でも、問い詰めないとね」

「……生きて、帰れ、たら……」

会話が終わると、二人の目に、光が宿りなおす。

「ボクは、セフィアを、殺して、ワクチンを奪う……」

サクラは短刀を抜き、片手で握り締める。

「私も、レクスが心配だから、手っ取り早く行くよ」

腕に力が入らなくなったセフィアは、口でスライドを引く。

シングルアクションと間合いの狭い短刀。静かに二人は動き出す。隙を見せてはいけない戦場の中で、その一歩が隙になることを良く知る二人だから。

「戦争って、くだらないよね」

「……でも、ボクたちは、戦場でしか、生きられ、ない……」

ワンハンドアクションのセフィアが横に飛ぶ。一筋両断のサクラは直進する。大人にも把握しきれない、尋常ではない脚力と腕力を先を急ぐこの場で発揮する。

「だね。だから敵は……」

「……殲滅する」

互角になった状況で、神の暮らす空へ神々の芸術品として、秀でた二人の少女は唯一と誇示のために、一人は銃を、一人は刀を煌めかせた。

12th・レクスの任務

セフィアに言われて町まで走る。何回も坂道で足が躓きそうになる。セフィアの銃撃の音が戦闘を意味して、何故か僕はその乾いた音に安堵も覚えていた。

「これさえ皆に届ければ、良いんだ」

僕の任務。それはこの政権に対立する派閥の幹部から流れた情報ルートから漏れたワクチン精製術を得た、新薬ワクチンを前線にいる人々へ届けること。セフィアには仲間について言っただけ、本当は町の生き残りの市民がいれば、その人たちにも投与する。正規軍が国民を巻き添えにしたこの戦争を、市民の批評の目に晒し、世界中に響かせるため。自国内の戦争とは言え、対外政策も進行している。僕ら側は国内ではゲリラなんだろう。しかし、町を生物兵器の実験に貶めたその事実を公に晒し、貧困に喘ぐ民への救済と安寧を他国に発信すれば、現政権に懸かる火の粉は瞬間に燃え広がるはず。僕の行動が国の政策の一つだとしても、僕には一人でも多くの命を救うことが、何よりの任務。戦争に民を巻き込んではいけない。同じ国民が対立し、武器を取ることば間違っている。平和はある。その信念とセフィアのような哀しい子供が、この世界からいなくなることを思うと、僕の足は町へ進んだ。そうしなければ危なかった。

「セフィア、大丈夫かな……？」

背中からは小銃のような持続的銃音が聞こえる。狙撃手なのに、その歪な銃は、どこまで彼女を戦場へと駆り立てるのだろうか？

「僕は、僕のことをしないといけないんだ……」

あんな少女が銃を持ち、戦場に立って、僕を守った。この先は僕一人。逃げるわけには行かない。後で追いつくって言っていたんだ。僕が待つていないといけない。だから急ごう。まだ、相手は戦闘を停止したままだ。このままなら何とか……。

セフィアの狙撃により兵数を減らし、体制を整えなおし、進退を

決めかねていた町の空に、突如轟音が轟き始めた。

「迫撃砲っ!？」

もう町の入り口まで着たその時、近くの青物屋の壁面が爆発し、看板が振ってきた。攻撃した様子は感じられない。衛生学校でも習ったことを思い出した。

「風向きは、こっち方面か。急がないと」

迫撃砲は命中率は低い。その代わり、曲射砲とも呼ばれるだけに射出管の角度である程度の距離を自由に描ける。ただ、砲弾の軽さは風に流され、精度は悪い。戦術としては射出の単位時間が短い。だから数で圧倒する。それこそ、打ち上げる陸の雨だ。近くにいたら危ない。街中を迫撃砲で攻撃するなんて、恐らく航空部隊の援護が到着すれば、それこそ先ほどの空爆の二の舞になるかもしれない。時間がない。僕に出来る戦闘はない。セフィアに渡された銃だつて、上手く扱えるか自信なんてない。怖い。足が震えてる。輸送ケースを抱きしめ、僕は走る。

「うわっ!」

奇怪に風を突っ切る空からの爆撃に、目の前の石敷の通りが砂塵を巻き上げる。負傷はしなかった。でも驚いた勢いで倒れ、両手で身体を庇ったせいでケースが転がる。

「あっ……」

ここは爆雷の中。あちこちで破壊される音が聞こえてきて、どこからとも無く崩れ落ちた破片が飛んでくる。こんなに痛い雨は経験したことがない。どこにも安全な場所が無いのに、安全な場所を探そうと本能が働く。兵士が興奮状態に陥る意味が分かった。

焦りと苛立ちと恐怖が混合すると、正断が出来ない。逃げるべきか、身を庇うべきか、セフィアに助けを求めべきか。……最後は無理だ。だからケースを取りに小路地から町の大通りに転がるケースへ駆ける。どこに部隊がいるのか、まるで分からない。町の中で聞こえる銃撃戦も、ただ恐いだけ。流れ弾がどこから出てくるか、迫撃砲がいつ落ちてくるか。心臓が速すぎて痛みを感じさせるくらいに

強く血液を送り出してる。

「あ……」

大通りのケースを拾う為に、角を出た。敵はいない。距離はあるみたいだ。でも、その瞬間、耳の後ろ辺りから背中を、ぞっと怖気が走って、足が立ち竦んだ。兵士が五人、死んでいた。その傍らには成人を迎えていないような、セフィアより少しばかり成熟している若い女が全裸で横たわっていた。兵士の中には、数人が下半身を露出し、脳天を撃ち抜かれている。瞬時に理解できた。歩み寄り、男たちを見る。既に息の根は無い。女の腕をそっと取り、脈を探る。「……なんてことを、同じ国民なのに……」

既に虫の息。暴行され、顔は青白く腫れ、微かな体温は消えている。兵士の遺体の状況に、それが誰の手によるものなのか、すぐに気づいた。そして良く見れば、全裸の女は一人じゃない。口から血液を垂らし死んでいる者。腹部にナイフが刺さっている者。後頭部を撃ち抜かれている者。全て女。全裸で犯された形跡を残し、死んでいた。無残に壁に寄りかかるように血を溢れさせた男もいれば、子供は無造作に顔面から地に沈み、体の一部を欠かれた者は少ない。気持ち悪さと同時に、悲しみと怒りが湧く。

「どうして……」

腐敗の進む死体は、徐々に飢えた獣を呼び寄せ、風の中に悪魔を引き寄せる腐乱臭を撒き散らす。レクスは呆然としていた。シヨックを拭えないのだろう。ワクチンのケースが、付近で爆発した破片の崩れ落ちる粉塵を浴びている。

「無関係なのに、どうしてこんなことを。子供まで無差別に殺すなんて……」

それを手がけたであろう兵士を見る。もうその命は無い。脳天、喉元、胸の三箇所を見事に直線に射抜かれている。セフィアはあの時、この女性の犯されている現場に気づき、五発撃った。レクスの抱く感情とはまた別のものを抱いて。

戦場で犯される女性はその後の扱いも酷いものだ。家族に見放され、

孤独に死ぬ。守るものなんて無い。戦後の復興期は、誰しもが生き残る為に躍起になるのだから、見捨てることなど茶飯事。知るセフィアだからこそ、平然と兵を殲滅した。立ち直ることは出来る。そう願うからこそ、女性は殺されはしなかった。だが、レクスは処置を諦めた。虫の息とは言え、持ち合わせている医療具はない。セフィアがサクラとの戦闘を繰り返す場に残っていた。任務を優先した結果だ。何も知らないからこそ、呆然。

「許せない……許していいはずが無い」

憤りに握り拳が震える。どれだけ力を入れても、怒りが湧いてくる。でも、僕に何が出来る？ セフィアのように僕は人を殺めることは出来ない。人に罪を償わせることも出来ない。出来ること。それは治療だけだ。でも、それじゃ救えない。人を救うことを任務にここにいるはずなのに、僕には救えないんだ……。いつか、セフィアが言っていた。戦争は神の戯画だと。そう、なのかもしれない。神により作られ、守られ、壊される。それが戦争。平等に作ることに失敗した神だからこそ、全ては雌雄があり、数を増やした。でも、人間は欲望を多く持ちすぎた。結果がこうなった。神は干渉してこない。ただ、誰が死のうと生きようと、それを茫漠とした時の中で見ているだけ。全く愚かなことでしかない。悲しかった。同じ人間同士が、こんなことをするなんて。

「……やるべきことを、僕はするしかないんだ……」

どれほど戦争を憎もうと、平和を望もうと、口では言える。だが、レクスに追従する力はない。だからこそ、この現実を知り、絶望する中で、立ち止まらないことが唯一、セフィアとの再開を約束して生き残る為だった。

レクスが大通りに転がるケースを拾いに出る。四方を通りが走り、脇には店舗が破壊された傷跡がどこまでも広がっている。この区域での戦闘は終了したのだらう。だが、聞こえてくる銃声は、再びその轟音を増していく。

「……うあつ！」

レクスがケースを拾い上げようとした瞬間、転ぶ。足から崩れるように。前のめりに倒れ、ワクチンケースが伸ばした手の先にある。何に躓いたのか、レクスが振り返る。

「っ！……ああうう」

一瞬、何で転んだのかと思った。躓くものなんてなかったのに。それで振り返ってみたら自分の足からドクドクと血液が溢れていた。それを目視した瞬間にその箇所から熱が襲う。熱い。そう感じた瞬間に痛みが来た。ふくらはぎから脛に鋭くもあり、鈍くもある重たい痛みが声が出た。

「ど、どこから……うっ」

後方からの射撃だった。落ちた膝の辺りに硬いものがあつた。弾頭で、僕の血が付いていた。ワクチンを運ぶことが出来ないととっさに判断して、匍匐^{ほふく}前進になりながら建物の影に歩く。

「はあ、はあ……」

距離にして十メートルも無い。なのに壁に背を預けた時には、脂汗が垂れ、呼吸が上がっていた。血圧が低下してる。とっさのことでも症状の把握が出来るくらいに意識はある。ただ、痛みに堪えるのはきつい。止血しないと、失血ならびに感染症。この環境下なら間違いなくすぐに感染する。

「うっ、く……」

筋肉が燃えているような体内からの熱みは痛い。多分骨を掠め。神経は切れていない。筋肉側部を貫通させられた。歩行は困難。店の小箱に足を乗せ上げ、ズボンを十徳ナイフで裂き、関節部を締め上げる。チョッキに予備として入れていた包帯とブランデーを取り出し、消毒代わりにかけた。

「ああっ、つくう……」

余計な熱さが全身を焼く。消毒用ではない。だから体内に沁みるアルコール分に痛みよりも熱さに筋肉が無意識に緊張を起こし、つたような激しい痛みに襲われる。負傷兵の治療の痛みを初めて知った。口にタオルを入れられ、踏ん張る力の強さは、僕も危険性を

理解していても、やっぱり齒軋りが鳴った、清潔な布は無い。拭き取るものは無く、包帯を強く巻く。滲み出す血液に落ち着こうとするけど、なかなか上手くいかず、逆に自分でも分かるくらいに、焦りと死の恐怖、痛みに関心音が勢いを失わない。シヨックを起こさないよう、深く呼吸をする。シヨック症状を起こせば死んでしまう。分かってるからこそ、意識を集中して腹式呼吸に努める。少しずつ落ち着く気持ちに、足を見ないようにする。視覚は脳に認識を与える。その感覚は直結して誤認を招く。シヨック症状はその類。僕は死なない。この戦争が平和的に終結をして、死ぬ必要のない人々が救われることを見届けるまでは、死ねない。父さん、母さん、妹のリリの無念が報われることが起きるように。そして、セフィアやサクラと言っていた少女たちが戦場に立つことを止めさせるために、セグレアと言うものに訴えるまでは、僕は死ねない。強く何度も思った。

「よし、行くう」

痛みは引かない。わずかにアルコール分の麻痺がある。立ち上がることが出来ても、歩くことは辛かった。血が足に流れる度に鉄球をつげられたような重さがある。

「んっ……んっ……」

引きずりながらワクチンのケースを取りに戻る。どこから銃弾が飛んできたのかわかって、知らなくていい。来た道には血路が出来てる。もう位置は知られている。警戒するにも発砲音は聞こえなかった。もしかしたら、セフィアに撃たれた？ いや、でもセフィアはサクラと闘っていた。僕を庇って。もしこれがセフィアの狙撃ならセフィアはこっちに来るはず。姿はどこにも見えない。だからきつと、どこかに敵が迫ってる。

「とにかく、急がない、と」

待つてる仲間がいる。届けられるのは僕だけだ。きっとセフィアは来てくれる。守ってばかりじゃダメだ。家族を守れなかったんだ。セフィアがここへ来れなくても、僕が助けられるくらいにならない

といけないんだ。

レクスは痛みを堪えながら歩いた。

風が、小さな渦を瞬間の風の中に舞いた。

転がるワクチンケース。レクスの瞳が、口が、大きく開いた。乾燥した空気には湿気は無く、レクスの唇はひび割れている。

「ああ……あああ」

静かな足取りが急く。痛みにはズボンが血で滲もうとも、レクスは引きずる足を急がせる。

雨も無いのに、大地が潤っている。

ケースの外面を伝い流れ落ちる液体。レクスが手に取る。ぼたぼたと液体が流れ落ちた。

「な、何てことを……っ」

ワクチンケースの両サイドに弾創痕。そこから零れている液体。

ガラス片も吹き出ている。注射器だと知るレクスは、貫通した方向を睨んだ。誰もいない。砂塵を纏う乾燥風が、崩れ落ちた瓦礫片を撫でていく。弾奏は近くなる。迫撃の雨はいつしか止まり、空が静けさを取り戻す。大通りの真ん中で、レクスは目の前で殺された赤子を拾い上げ、悲しみに劣情した父親のように、ケースのふたに手をかける。

「一……二……三……」

縦置きにされていた注射器と、呼びのワクチンの入れられたビン。ケースの中は液体とガラス片に溢れ、無事を保っていたのは三本だけの注射器。元々入っていたのはその十倍近く。割れていた。零れ落ちるワクチンが、レクスの手を伝い、肘から垂れ落ちる。レクスの手は震えている。前線にいる部隊は百人以上。戦闘開始後に幾らが敗戦したかの情報はない。だが、生き残りが三人であることはまズない。聞こえる弾奏は多い。

「これじゃ……仲間を……」

救えない。苦しんでいるかもしれない仲間への薬が無い。一瞬で破壊されたワクチンに、レクスはその場を動けず、ケースの中に視

線を落としていた。遙か遠くで一筋に光る発砲に気づくことも無く。

一発の銃声。一筋の無音。風は止み、太陽が荒野を白く染め上げるように輝いていた。溶解した戦術品の残骸の匂いは鼻腔を劈き、脳に麻痺をもたらす。だが、花は咲き続ける。切られた大気は既に音に戻り、貫かれた風はどこかへ消えた。サクラの短刀の切先に触れた血が転々と穢土となり、セフィアの銃弾の裂け目がサクラの血を弾く。無情と無垢の殺し合いが、観客のいない星のドームで繰り広げられる。銃声と斬撃、駆ける足音、乱れる呼吸。鳴り止まない鐘の音のように、それは不快であり、爽快でもあった。

「やる、ね。サクラ……」

小さな堰が漏れ、唾液混じりの血液が口端を伝う。腕には無数に切り傷があり、ワンピースだった白は、赤の染める割合が増し、土に巻かれ、その下の幼さの残る身体が垣間見えている。

「……どう、して……?」

同じく口端に血を垂らすサクラ。白髪も赤の模様が浮いている。脈動に合わせ湧水のように横わき腹付近が赤に染まり続ける。

「簡単。私の任務は、ワクチンと、衛生兵を送り届ける、こと。邪魔は排除、するけど、ワクチンも、衛生兵も、ここには、いない」
二人は抱き合うように、互いの上体に身を寄せ合い、バランスを保ち、そこに立っていた。セフィアの腕にはサクラのわき腹につきつけ、血を浴びる拳銃。サクラの腕にはセフィアの左肩関節付近を貫通する短刀。日の光に陰となり、二人は照らされている。水溜りのようにしみこむ血液に全身を汚されていても、倒れはしない。

「サクラの、契約は?」

関節部に刺さる短刀を握り、サクラから離れるように抜く。血が粒になり、サクラの頬に涙を描いた。

「ワクチン輸送……阻止。でも、ダメ。ワクチン……ここに、ない」
撃たれた箇所突きつけられている銃を退け、傷口を確認するよ

うに触れる。二人の息は上がり、二人の身体が脈動に合わせてわずかに揺れていた。

「じゃあ、さ」

二人の唇は当初より赤みを失っている。互いに乱れた髪は荒野の土煙を浴びて汚され、乾き続ける血液は黒く変色していこうとしている。サクラは短刀を振り、血液を払うが、その勢いに身体から血が飛ぶ。そして表情には、疑問。勝敗は決着してはいない。

「こっちに、来ない？ 戦争で寝返りなんて、罪にならないよ？」

セグレアのことを知る。任務失敗の先にあるもの。

「……哀れ、み？」

不機嫌になるサクラの表情は、あどけなさが残る。セフィアよりも幾つか年下のようだ。

「違うよ。お互いに、武装は、完璧じゃない。闘うなら、最高の自分で、やりたい、でしょ？」

マスターライズも盾の剣も無いセフィア。日本刀のないサクラ。双方欠落した状況での戦闘。

「……セグレア、は？」

「平気、だよ。私がどうとでも言ってあげる。それに、これは元から理不尽。私たちが、一つに納まれば良いんだよ。ワクチンは、ないん、だもん」

だから、ここでの戦闘は終結にして、合意の下に一つになる。セフィアの提案に、暫くの呼吸音。

「……何を、したら、良いの、ボクは？」

短刀がぶら下がる。血が滲み出す。サクラの体もセフィアの身体も、わずかに震えている。だが、セフィアは無表情に首を傾げ、その提案を飲み込んだサクラに笑った。

「……セグレアに、怒ってくれた、人がいる。その人を、セグレアに連れてくの」

誰もが知るセグレアは、武器商であり、戦争下のみに移動する戦争屋。兵士と戦場、武器しか知らない二人には、それは意外。セグ

レアに賛意を持つ者は多く、セフィアたちへの要請も尽きない。その中で、たった一人の衛生兵が反感を抱いた。

「……あの、ひ弱そうな、兵……？」

斬る価値もないと、一度は相手にすらしなかったレクス。それがそんなことを言うとは思ってなかった。サクラの顔には微かに驚きがある。

「そ。それに賭けもしてるの。負けたくないでしょ？」

「……負ける、賭けは、しない」

サクラの言葉に、賛同に笑むセフィア。

「この怪我じゃ、お互いに使えるもの、最後かも」

セフィアが所々が切り裂かれているワンピースを捲りあげる。露になる下着も、わずかに膨らみを見せる胸も、土や血で天使の輝きを失っていた。その胸下にあるホルスター。そこには一丁の銃が銀の輝きを照らし出す。

「……もう、一丁、は？」

サクラも同様に黒の装束を捲りあげる。日焼けの無い、不健康なほどに白い肌の両腿部には、黒く輝く八本のナイフが巻きつけられていた。

「渡しちゃった。使えるかは知らないけど、お守り代わりに、ね」

「……今なら、ボクの、勝ち？」

両手の指の間にナイフを挟むサクラが、首を傾げる。不気味に伸びる悪魔の手のように、無垢な表情が刃の爪を磨ぐ。

「普通のも、一応、トウーハンドだよ。負ける自信なんて、私は無いよ？」

負傷した腕には先ほどの拳銃。無傷の腕には研ぎ澄まされた銀装飾の超大型回転式銃。少女の手には起きすぎる代物。およそ五百ミリほどの全長がある。両手の銃はバランスの取れないほどに差が出ている。

「……勝敗は、死になる。だから、行く？」

「うん。早く行かないと、レクスが殺されちゃうかもしれないし」

だが、セフィアは容易に操るように、サクラに行くよう振る。肯くサクラは、一步を踏み出す。しかし、一步を地に着けた瞬間、倒木のように、顔面からその場に倒れ、白髪が広がった。

「その前に、応急処置、だね」

「……血が、足りない……」

顔を上げることも億劫のようにサクラが眩き、セフィアも脂汗を滲ませながら、レクスの置いていった処置道具を漁り始めた。戦場に荒れ狂う二つの少女の風は、この時だけは、ハリケーンの目に入ったように静かに血の臭いを漂わせていた。

どうすれば良い？ 考える。たとえ部隊に合流しても、どうやって感染者に治療、もしくは感染予防に当てられる？ 三人分だなんて、最悪、仲間同士で取り合いが起こる可能性だってある。でもだからって、ワクチンを投与しなければ、遅かれ早かれ仲間が死んでいく。市民だって助けられない。生きてる人がいた。でも、助けられなかった。目の前で死んでいくことを見ているだけなんて、僕はなんて愚かだ。戦場において、医療従事者は全てにおいて平等で仁を以って己の技術を遺憾なく発揮する。それが軍医たるもの。じゃあ、道具も無い、薬も無い中で何をすれば良い？ ここでじつと助けを待つ？ 無理だ。助けなんて来るはずが無い。支援があるなら僕は一人でここまで派遣されることは無い。きっと、これは捨て身なんだ。最悪、捨て駒としてでも。

「セフィア……」

ああ、こんな時に僕はやっぱり頼りないなあ。年下の少女に請っているなんて。

「ダメだ。出来る限りは尽くさない」と

今は、やるしかない。それだけだ。

「っ！」

壁に手を着き、立ち上がり、違和感に角から一瞬大通りに視線を飛ばして顔を引く。その一瞬で分かった。足元が揺れている。人間

の走力の小さなものと、不気味な小刻み。視界に一瞬で捉えられたのは、正規軍の陸上部隊。しかも特殊部隊の紋章が何となく見えた。歩兵師団に機動戦車隊の中隊が大通りを闊歩していた。収まった高鳴りが冷たさとともに湧き上がる。いつの間に、ここまで侵攻していたのか、まるで気づけなかった。足の痛みに気を取られてた。

「どうすれば……」

僕の武装は、セフィアに渡された一丁の銃。リボルバー式の大型銃。輪弾倉はない。つまりは五発。精錬された射撃訓練を受けている軍隊に比べて、僕らはゲリラでしかない。全うなものは受けていない。勝機を見出せたとしても、倒れるのは五人。何人が居るのかも分からないのに、飛び込めるわけが無い。

「残存兵がいる可能性があるっ。路地裏、小道までくまなく探せっ。市民の生き残りも全て殺害しろ。状況が終了次第、この町は連中の手による無差別殺人の地とする」

声で分かった。少なくとも十五人以上はいる。手榴弾一つも無い、僕に勝てるものは何もない。死ぬんだ。直感的に感じて、足が竦んでしまう。死にたくない。殺された家族の無念を報いたい。負傷した人たちを助きたい。やりたいことはあるのに、やれるものが無い。間髪のない銃声が路地の合間を掻い潜ってくる。生きている人が近くにいたんだと、もう過去の事象になってしまふ未来の恐怖。どうすることも出来ない。鼓動が強くなる。身体が寒くて震える。投降すれば助かるだろうか？ 無理、かな。この町を無人街にするまで戦争は終わらないはず。生き残りは全てが証言者。濡れ衣を着せ、殲滅し、英雄を生む。正規軍は戦争で魔女裁判を表現している。ならば、逃げるか死ぬか。この国のどこに逃げ場があるんだろうか。もう、ない。ここを制圧し終われば、次に行く。掃討は終わらない。「貴様っ！ 何者だっ」

「っ！？」

大通りの戦車部隊とは逆の小道から銃を構える音がした。心臓が跳ね上がると言う気持ちを実感した。頭が真白になる。

「隊長つ！ ゲリラの生き残りですつ！」

大通りからも挟まれる。緊張と恐怖でどうにかなりそうなくらいに、焦る。

「まだ居たか。報告のあつた数に差異があつたようだが、これで最後だろう」

部隊長らしい三十代後半のひげ面の男が戦車の上で僕を見下ろす。今の言葉で仲間が全滅させられたんだつて、分かつた。でも、その時には、逃げ場の無い、小さな黒い穴がいくつも向けられていて、無意識のうちに両手を掲げていた。セフィアの銃を持つ手が震えて

「ん？ 奇妙は銃だな。おい」

「はつ。アブラムス。こい」

「はい」

銃口に貫かれて動けない僕。情けないけど、恐いんだ。

「お前、その銃を下におけ。腕を頭に廻して壁に着け」

殺されることは分かつて、逆らえない。銃を足元に置いて、後頭部に両手をあて、壁にくつついた。こんな所、セフィアに見られたら、罵られるんだろうけど、無理だ。

「動くなよ」

背中に突きつけられる硬いものに目を閉じた。神よ、今こそ我を救いたまえ。祈るしかない。

「ん？ 何だ、この銃は？ 隊長。この男、怪しげな銃を有していました」

銃を持った男が先に戻つて、アブラムスと呼ばれた男がゆっくりと銃を向けたまま戻る。

「ほお。奴ら、独自に武器の製造まで行っているのか。まあいずれ突き止めてやる。その前に、試し撃ちと行くか」

隊長が降りる。こつちに足音が近づいてくる。

「貴様、衛生兵か。衛生兵の分際でこんなものを持つているとはな。これは俺たちが検証に没収する。そして、貴様。分かるな？」

ヘルメットが小突かれる。殺される。恐くて動けないのに、心臓

だけは異常に動いている。もう、何も言えない。走馬灯すら駆け巡らない。

「遺言があるなら聞いておいてやるのか？」

重厚な音が一つ、首筋に響く。後は引き金を引くだけなんだ。マラソンをしたわけじゃないのに、この鼓動は辛い。頂点に達する恐怖に思っしかない。

(セフィア……っ)

結局合流なんて出来なかった。任務も達成出来ない。市民の命だつて救えない。これは髪が僕に与えた罪と罰なんだろう。どんなに国を浴したいと思つても、これは許されない行為で、神が使わした兵によつて魔は排除される。家族の下へ行けるだろうか。もう、死んでしまえばきつと怖いことなんてないんだろう。セフィア、ごめん。賭けは、僕の負けだよ。

「セフィアに、ありがとう、と伝えてくれませんか？」

「良いだろう。伝えておこう」

偽りだと分かっている。それを信じるのが救いだと、信じることで救われると誰もが神を慕うから。最後まで心は落ち着かない。これから死ぬんだと言つ恐怖は、尋常じゃないほどに苦しい。銃弾の痛みは知った。だが次は即死かもしれない。どうなるのか、ただ、恐くて、胸の中でセフィアの名を呼び続ける。

ひたすらに、恐い時間があつた。

「うあっ」

「ぶぐ……っ」

その声に、身体が極度の緊張に強張つた。ばばば、ばばば。と銃声がして、死んだと思つた。歯が力チ力チ鳴っている。ただ祈つて目を閉じて、その時を待つしかなかった。銃弾が身体を貫くまでの時間が、途方もない時間に思えた。

「敵襲っ！ 敵襲っ！」

「どこからだっ!？」

後ろの首元に突きつけられていた銃の感触が消えた。でも、すぐには気づけなかった。

「上で……うあっ」

上? 周りを見る余裕は無い。耳元で銃声が劈き、恐さにしゃがみこんでしまった。

「何者だっ……こ、子供っ?」

「レクスツ。ありがとうを言うのは早いんじゃないの? まだ契約終わってないよ」

え?

今、何が聞こえた?

「構うな、殺せっ」

幾重にも重なり、周囲の音を掻き消す銃声の乱舞。断末魔の声もある。でも、聞こえた。

「……セフィア。……歩兵は、ボクが……やる」

「オツケー。じゃあ私は車、ぶっ壊しちゃうから」

銃声の中に、飛んだぞつ、と聞こえた。僕は、恐る恐る身を小さくして、瞼のカーテンを開いた。シェイクスピアのハムレットの終幕部の剣術試合で、全ての真相を知り、毒剣の負傷で死んでいくハムレットの悲劇の中で知る、するべきかしないべきか、と言う迷いの中に見出した光を、僕は感じた。

14th・花は散る

「オーケー。じゃあ私は車、ぶっ壊しちゃうから」

サクラの分までセフィアは処置を施した。輸血用血液は無く、代替の生理食塩水でサクラは立ち上がるまでに回復していた。二人の少女は全身の至る所に包帯を被る、戦場の歪な姫君だ。

「……ん」

サクラが先に酒場の屋根部から飛ぶ。実を小さくし、両手は交差させたまま、指の間にはそれぞれ四本の黒い爪が、銃弾の中を落ちる。三メートルほどの高さからサクラが着地する。兵士が銃を一斉に向ける。

「それで殺せるなら、私が殺してたよ……サクラのことは」

それを見送ったセフィアは、レクスを取り囲む兵士の中へ降りたサクラとは別に、大通り側の酒場の屋根から路上停車している戦車二台、軽装備ジープ三台、装甲車一台の車両の中へ飛び降りる。その間にスライドを口で引いていた。

「お、お前、何でそっちにいる？」

隊長の男がサクラを見て、目を見開いている。何故レクスを庇うように立つのか、疑問なのだろう。

「……ボクの、役目は、契約を……果たす、だけ。仲間は、初めから、いない」

サクラは腰を低くした体勢で、近くにいた兵士へ飛ぶように駆ける。

「くっ……」

慌てて兵が銃を構えるが、そこにサクラの姿はない。体勢を低くするサクラに、兵が銃口をレクスから向き変える。だが、サクラは残像を残すように次の瞬間には別の場を跳ねる。近くにいた兵の足に腕を振る。

「うあああっ！」

兵の両足から血が跳ねる。狭い路地の中で銃弾が行き交う。その中でサクラは兵士の足を切りつけたと思っただ時には、その兵の後ろにいた兵の首先に猫の手に握るナイフで撫で、そのまま男の腹部に飛ぶように蹴りを入れ、男を弾いた勢いでサクラは銃口を向けている男へ鷹のごとく鋭く、無表情でナイフを持つ両腕を翼のように後方へ広げた。

「くそつ、裏切りか。殺せつ。こいつら全員生かしておくなっ」

「……ボクの、仲間は……セグレア、だけ」

裏切りでない。初めから仲間でもなかったと、サクラは誇示しつつ、颯爽と男たちの合間を掻い潜る。レクスの周囲を銃弾が飛び交う。酒場のゴミ溜のように小さくなっているレクスは、目の前の黒い風を捉えることは出来ない。気づいた時に気づく。兵士が血飛沫を上げ、叫びとともに死んでいく。何が起きているのか、分かるものはサクラ本人だけ。飛んで地に着く瞬間には、兵士の脳天から上体を四本の赤線が走り、その瞬間には隣にいた男が飛び上がるサクラのアップパーに切られる。そこにサクラは居なかった。

「くつ、くそつ！ てつ、撤退しろっ！ 撤退だっ」

倒れる男は七人。息はあるのだろう。血が鼓動に合わせ出血している。だが、それを助ける暇などないと判断した隊長の男は、生き残る兵に大通りの戦車隊に戻れ、と合図を送る。サクラはそこで動きを止める。両手の黒いナイフからは、粘着な血がゆっくりと垂れ落ち、服にも新たな赤い水玉模様が浮かんだ。

「……無駄。誰も、逃がさ、ない……」

背を向け駆け出す兵に、サクラは開花する花のように腕を広げ、静かに息を吸い込むと、鋭眼で腕を勢い良く前に突き出す。その勢いに八本のナイフが逃げる兵士たちを襲った。ドミノのように倒れる兵士。サクラは静かに息を吐き、力を抜いた途端、兵の目が止まることも無く、小さな身体が、静かに傾いた。

「……やつ、ぱり、血、足りない……」

「え？ あ、え……？」

目の前でサクラが倒れ、敵なのか味方なのかの判断が出来ないレクスは戸惑いながら、頭を守る盾にもならない腕を、静かに下ろした。

「戦車二台にジープ三台、機動車一台、ね。うん。楽勝楽勝。じゃあ、行きますかっ」

セフィアは路地裏の銃声をBGMに、屋根から飛び降りる。

「ん？ だ、誰だっ!？」
待機していた兵士が気づく。

「さあ、誰でしょう?」

あどけない笑顔を全開に、セフィアは負傷した腕に持つ拳銃の引き金を引く。最初に気づいた男の鼻頭に穴が開いた。

「お、おいっ! どうしたっ? 敵かっ!？」

倒れた男に兵士が声を張り、そこに気づく波が広がる。だが、セフィアは速い。戦車から顔を出す兵士を二発の狙撃で仕留め、反対側に停車していたジープの通信兵と、運転手を三発の銃声で静める。ただ楽しげに駆け回る子供のように、セフィアはワンピースを揺らす。血と土で輝きを失ってはいるものの。

「敵だ。子供を使っているぞっ」

「子供だなんて、酷い。私、ちゃんと成長してる淑女なんだけどなあ」

兵士たちが戦車と装甲車に身を隠すように乗り込む。一台のジープが走り出す。

「逃がさないよ」

利き腕に持っていた、超大型リボルバーの引き金を一つだけ引く。マスターライズの比ではないが、セフィアの全身が揺れ、ジープのドライバーシートのヘッドクッションが吹き飛び、フロントガラスを粉碎した。そのままジープは操縦者を失い、路肩の鍛冶屋の建物に突っ込んだ。

「良い破壊力」

それを見ていたセフィアは満足げに背中 of 戦車と装甲車に目を向ける。相手の声は聞こえてこない。代わりに戦車の砲筒が銃口で機械的な音をセフィアに照準を合わせ、隣で道を封じていた装甲車上部の有線機関銃が下方へ銃口を向ける。

「女の子相手に、そんなことしちや、だめ、なんだよっ！」

弾を装填しているわずかな間。装甲車の機関銃が先に火を噴く。車体が小刻みに揺れ、視界に砂塵が舞う。セフィアはその瞬間に戦車の方へ駆け飛ぶ。包帯からは血が滲んでいる。機銃がそれを追って戦車の重厚なボディに火花を咲かせる。セフィアは装甲車とは対面部に身を隠しながら、上部ハッチに手をかける。片腕の拳銃は口に咥えていた。

「ふあふあふあら、ふあふい、ふあふえふえふふえ」

中から鍵、かけてるね。そう言いたいのだろう。セフィアの腕でもハッチはびくともしなかった。戦車の標準距離は遠い。零距离での砲撃は意味を成さない。セフィアに乗られている戦車は動くことを振り払おうとするが、巨砲の砲身が車体を大きく揺らせることを阻む。隣には仲間がいる。その向こうの装甲車から機銃が飛んでくるが、戦車片側面だけに被害を与え、装甲の強度が徐々にさがされていく。兵装の銃弾とは規模が異なる。対戦車、対ヘリ用の銃弾の威力は侮れない。それを理解しているからこそ、すぐに銃撃は止む。だが、セフィアには兵の姿は確認は出来ない。角の先の路地からの戦闘は静けさを見せてきている。

「しょうがない。こうするしかないね」

セフィアが戦車の小さなフロントウィンドウに銃口を手向ける。銃撃戦の中でも自適に快音を轟かせる為に、戦車や装甲車は防御が徹底している。そのため、視界は狭い欠点があり、セフィアはそのただでさえ狭い視界部に、リボルバーの銃口を宛がう。

「すぐ楽にしてあげる」

ぱん、ぱんぱん。と三発。強化ガラスを一発で吹き飛ばし、二発で搭乗員を討つ。一瞬にして戦車は沈黙の壕になる。エンジンはか

かったまま。燃料の臭さが漂い、セフィアはすぐにその車体から飛び降り、後ろ手から真ん中の戦車へ移る。移動はすばやく。後方から再び戦車に乗り込んだセフィアは、腿のホルスターからリボルバーの弾倉を代え、今度は戦車側部に銃口を宛がう。隣には装甲車の機銃が向いている以上、正面の攻撃は危険。だが、ここは安全。そう判断したのだろう。戦車の構造を理解しているように、操縦者と弾装填手の位置を探るようにボディを小突く。不気味に静かな反応が戻ってくる。

「うらああああっ！」

だが、その時だった。機を待っていたように、一人の兵士がハッチを豪快に空け、小突く音で位置を把握していたのか、セフィアに向かつて狙いを定めることも無く、小銃を乱射した。

「あ、うっ……」

セフィアが車体から飛ばされる。拳銃が手を離れ、セフィアは腿に手を振れ、そのまま身体を捻りながら、口でピンを抜いた何かを空へと投げ、大地に倒れた。

「あ、うっ……いったあ……んもお……」

包帯が弾け、そこから更なる出血を起こしていた。さすがのセフィアもそのまぐれの射撃の被弾に、表情を強張らせていたが、身体を起こそうとはしない。そのまま大地に伏せている。

そして、数秒後、セフィアの隣に鎮座する。地上を治める最強の車両が大きく揺れた。隙間と言う隙間から、瞬間的に炎が噴出し、黒煙が立ち上った。

「んもお、また汚れちゃったじゃないの……」

戦車二台は物言わぬ墓標。一台は即撃射撃による搭乗員の殲滅。もう一台は手榴弾による内部爆発。兵士が少しでも弾いていれば、その隙間から内部に降下することなく、セフィアに危機があった。

「くそっ。戦車がやられたっ」

セフィアの執行に装甲車の中から一人が降りて、仲間の無事を確認しようとした。

「まてつ！ まだ外に出るな」

顔だけ出す男。セフィアは立ち上がることなく、戦車の後部に腰を低くして、銃を構えていた。

「こんなに、ボロボロなんて……笑いものじゃ、ないの、馬鹿」

自嘲なのか、兵士に対しての怒りなのか、リボルバーが轟音を轟かせた。二人の男が次々と倒れ、一人は車両内に落ちた。体のバランスの崩れたセフィアの片側は血にまみれ、戦車に身を寄せるように装甲車へ歩む。機関銃がセフィアに向くが、セフィア的位置が車に近すぎて、銃が照準距離を得ない。その間にもセフィアは装甲車によじ登る。見える下着を気にする余裕などない。それを気にする者もいない。セフィアは片腕で銃を持ち、開いたままのハッチに腕だけを出す。

リボルバーの輪式弾倉が回転すると、内部にいた男の声が悲鳴を漏らす。

「助けてなんか、あげないよ。レクスを護衛するのに、傷つけたし、私だってこんな恥さらしだから、ね」

四発の銃声が内部を明るく染める。一発ごとに生半可ではない反動がセフィアの傷を痛め、表情を苦しめる。戦車内には兆速の銃弾の炸裂する音に、内部にいる男たちの断末魔が一瞬で消えていく。セフィアの身体がその代償に大きすぎる銃の反動をもろに受ける。最後を放った時、セフィアの腕がとうとう反動に弾かれ、銃が空に煌めいた。

「あつ……」

セフィアの小さな身体が、そのままの勢いを引き継ぎ、虚空にひとひらに舞う花びらのように、落ちていく。だが、綺麗なものではない。小さく華奢な体が装甲車のボディを転がり、数度の衝撃の後に、セフィアは転げた。

「はあ、はあ……レクス、大丈夫、かな……」

頬につく砂。血に零れる大地。空は青く、広がった。セフィアは仰向けに、その景色を最後に見ていた。溢れる血が静かにその出血

を沈めていく。

「あー……やだな、また、死んじゃうの……」

サクラとの負傷に、大型リボルバーの反動の衝撃がセフィアの身体を痛め、落ちたときにさらに傷ついた痛みに、セフィアの瞳孔が虚ろになっていた。無理を押ししていた衝動の波に飲まれていた。

「セフィアッ！」

止んだ銃声の恐怖。兵士が消えた。ゲリラが勝利を収めた。二人の少女の手によって。だが、静かに寝息すら立てない少女たちは、衛生兵の呼び声にも応答することが、なかった。

15th・セグレアの少女と衛生兵

「……さて、この現状をどう報告するか、だ」

静けさが支配する前線。戦闘は終結している。だが、その静寂もいずれ喧騒に変わる。果てる町であろうと、通信途絶の状況下では確認が行われる。それが地上部隊か航空隊かはともかく、偵察が来るのは時間の問題。そこに一台のスポーツカー。降り立つ男は煙草を吹かし、青空に集結の白煙の煙草を穿き捨てる。

「セフィアッ！　しっかりしてっ！」

少女に課した契約は、ワクチンを前線部隊に届けること。その為の衛生兵の護衛任務。そして、少女に課した契約は、ワクチン輸送阻止。

「これは、サクラの契約が満了、と。だが、部隊が全滅とあらば、セフィアの契約は無効、だと。これ即ち、双方の契約は未遂ではない、と」

男が歩いていく。そこにはサクラとセフィアが横たわり、衛生兵がいた。

「こんな無理な身体であんなに動くからですよ。しっかりして下さいっ！」

衛生兵が二人の少女の胸部を圧迫し、人工呼吸で蘇生措置を取る。「……ふう。敵は殲滅させたか、と。まあやるべきことはしたなら、良いだろう」

二本目の煙草を咥え、火をつけながら衛生兵に影を落とす。

「おい、貴様」

「え？」

レクスが顔を上げる。太陽に白く眩い姿があった。

「もう良いぞ。あとは俺の仕事だ」

男がセフィアとサクラを両肩に抱える。

「な、何をするんですかっ？　何なんですかっ？　その子達はまだ

……」
息を吹き返していない。レクスはそのままでは死んでしまう、と腕を伸ばす。

「問題ない。こいつらが生きることを選んだ以上、死なせはしない。お前は早々にこの町を出ろ。直に軍の偵察部隊の偵察の後に本隊が来る。こちら側の部隊の合流には間に合わん」

男が二人を車へ連れて行くこととする。

「で、出来るわけじゃないですか。今この子達に蘇生措置をしなければ完全に手遅れです。僕は衛生兵です」

だが、レクスが道を封じるように断つ。片足を引きずりながらも、必死な形相で。

「言っているだろう。こいつらは死なん。後の処置はセグレアの私情だ。お前には関係ない」

男は一蹴し、レクスの脇を通り過ぎる。

「セグレア？ 貴方はもしかして、セグレアの人間なんですか……？」

レクスの問いかけに、男の横目が鋭くレクスを射抜く。レクスの腕が止まる。

「だったら、どうする？」

男の鋭眼にレクスが一瞬たじろぐ。だが、意を決した顔で口にする。

「ふ、二人をセグレアに連れて行くなら、ぼ、僕も連れて行ってください。セ、セグレアには、その……」

男の視線に最後まで言葉が出ない。

「セグレアに何の用だ？ 依頼か？ なら俺が仲介してやる。現場はどこだ？」

「ち、違います。止めさせたいんです」

とっさの言葉に、男が反応した。

「止めさせたい？ 何をだ？」

男はその間も車の後部座席に、人形のように動かない二人を静か

に横たわせる。ドアを閉め、レクスとセフィア、サクラが一枚のドアに隔絶される。このままでは二度と……。レクスは感じ取ったのだろう。言葉で男が車に乗り込もうとするのを止める。

「こんな子達が戦場で戦争をしていることをです」

レクスは二丁の銃を男に差し出す。一丁は無傷の輝きを誇り、もう一丁は土と血に汚れていた。だが、その二丁は二つで一つ。全てが同じ銃だった。

「この銃まで使ったのか、セフィアは」

受け取る銃を意外そうにダッシュボードに仕舞う。セフィアがその銃を扱うことが相当に思ったのだろう。

「何故、こんな子供を戦場で戦わせることを当然のようにするんですか。僕には理解出来ません」

「そんなことか」

呆れたようにレクスの言葉を受け流す。レクスの表情が開く。

「そんなことってっ！ 今すぐ治療しないと死んでしまうようなことをさせて、何とも思わないんですかっ！」

「思わんな」

即答され、レクスは言葉を詰まらせた。男が運転席のドアを開け、煙草を投げ捨てた。

「ふ、ふざけないで下さいっ！ 良いわけが無いでしょうっ！ 子供ですよっ？ ことなくならないことに子供を利用してはいるなんてセグレアは非道ですっ」

男の眉が微かに動いたが、車に乗り込む。だが、ドアはレクスが押さえていた。

「非道、か。そう思うのであれば、そう思えばいい。生きることが求めた先にあるものが契約。セグレアは生かしているだけだ。勘違いをするな」

鋭く、レクスに退くように見るが、レクスは動かない。

「どういう、ことですか？ 生きることが戦場で人を殺すことに、どう繋がるって言うんですか」

レクスを面倒な奴と認識したのか、男が懐から再び煙草に火をつけ、その煙を故意に吐き出す。レクスに向かって。分かっているからこそ、レクスはそれを受け止めた。

「お前、セフィアに何を吹き込まれたかは知らんし、どうでも良いが、セグレアは強要はしていない。この結果になるために、こいつたちは命を張ってお前を守った。まあ、サクラがどうも寝返った形跡もあるが、セフィアの入れ知恵かだろう。だがな、こいつらは自らが契約して、戦場に立つ。それだけだ」

エンジンがスタートする。静かな街中に爆音が響く。

「だからって、子供を戦場で人を殺させるなんておかしいじゃないですかっ」

男がサングラスを外す。綺麗な青い瞳が愁いを含んでいる。

「お前、名前は？」

会話を外す。熱を冷まさせるように。

「え？ レクスです。ユーラシア・レクスです」

「レクスか。なかなか良い名前だな。だが、言葉には気をつける。

セフィアは一般的な軍の階級では元帥に相当する。お前の経験の全てをセフィアは既に経験した上で、こうなった。安易な覚悟があると思うか？」

レクスの視線が後部座席で意識を失っているセフィアに向く。そこに男の言葉が降る。

「セフィアとサクラがここまでの状況になることなんて、そうないだが、お前を守る為に、そして、お前の任務を阻止する為にこうなった。こいつたちが望まないのなら、ここまですることがあると思うか？」

男の言葉に、レクスは考えるように視線を動かす。疑問があるように。

「セフィアは、契約の為だと、固執しているように戦ってました。それはセグレアという組織がそう仕組ませたことなんじゃないですか？」

男の言葉は擁護。レクスはそう感じたのだろう。レクスにとってセフィアの方が信頼に値する時間を過ごした相手だ。そして子供は純真である。だからこそ、信頼出来るものはそちら。そう思っているようだ。

「仕組みせた、とくるか」

男が若干の失笑を浮かべた。

「……そうかもしれないな。だがな、こいつらは戦場無き場で生きることが出来ん。武器を取り、他者を殺す。戦場に仲間も何も無い。ただ生きるために契約を果たす。それがこいつたちの恵沢だ」

それが恵まれた選択だと言われても、レクスは納得した顔はしない。それこそ根本的に間違っている。そうとしか思えないのだろう。レクスを見て男が鼻で笑った。

「なら、聞こう。お前はこいつたちを解放してやることが出来るのか？」

「え？」

男が目を向けるセフィアとサクラは生きているのか、死んでいるのか、判断の難しい状態。

「セグレアは単に戦場を商売に持ち込むだけだと思うな。生かす為に死なせることはしない。だが、それが契約である限り、こいつたちは戦場で人間を殺すことを躊躇わない。お前にそれを止めさせ、こいつたちをそこのガキのように過ごさせることができるのか？」

真剣な眼差しは、言葉を詰まらせる。空を二機の戦闘機が通過した。轟音に尾を引き、上空へ昇っていく。

「分かりにくいか？ 簡潔にしてやる。お前は救うことが出来るか？ 鎖で繋がれることでしか生きられない少女を」

契約と言う鎖。生きるために契約を全うする。その為にどれほどの負傷を得ても、闘い続ける。大人の器ではない、小さな身体に極限の無理を強いてまで。

「……救えるとか、救えないとか、そんなものじゃないと思います」

二人を見た後に、レクスは男に応える。

「セフィアは、笑っていました。僕にはとても制限に生きる女の子じゃなくて、ただ、何も知らないだけの女の子にしか見えません。子供の順応性は高いものです。やるうと思えば、どんなことでも子供は出来るんです」

笑みは本物。ただ、居る場所を間違えただけ。だから、環境さえ普通であれば、その笑顔はもつと輝くことが出来ると、レクスはセフィアとサクラに普通の子供を映し出す。

「出来るかどうかは、俺たちの関与すべきものじゃない。俺はあくまでこいつらの送迎手だ」

「え？ そ、そうなんですか？」

唐突な告白に、レクスはセグレアに深く関わっている人間だと思っていたようだ。

「セグレアはレクス、お前の考えているほどに小さくは無い。そのセグレアに今の意見を言える気があるか？」

男がサングラスをかける。先ほどの戦闘機が軍の偵察機だと分かったのだろう。この場を離れる支度は整っていた。

「ぼ、僕はセフィアと賭けを、しました。まだ、それを果たしていません。ここで、セフィアと別れるなんて、出来ません」

「賭け？ また、セフィアは下らないこと。まあ、時間も無い。言うべきことを意見するなら、軍を抜ける。そうすれば、お前を連れて行ってやらんでもない」

レクスのお話を聞くのが面倒になり、分かりきった答えを上の人間から言わせようと責任転嫁のように男が告げる。

「軍を、ですか？」

「その腕章を捨てる。セグレアは国も軍も関係ない。要求に応える。それがセグレアだ」

ここで腕章を捨てること。それは戦場の放棄。町の人間で生き残りがいるかもしれない中で、治療することは出来ない。レクスの持つものは全てが軍の支給品。ゲリラとは言え、それなりの道具があ

った。セフィアが持ってきたリユックにはまだ医療道具がある。だが、ここで軍を捨てればそれは許可無くの仕様は罪。

「……それも決められない、か。お前、この道を引き返せ。セフィアの契約も終わった。もう無関係だ」

男が半ば強引にドアを閉めた。ギアが入り、エンジン音に深みが増す。そんなことすら即断出来ない奴に用はない。男はここで契約解除を宣告し、セグレアに向けてアクセルを踏み込もうとした。

「ま、待つてくださいっ」

同時にレクスの腕の布が剥ぎ取られ、地を這う風に揺れ落ちた。ウインドウが開く。

「今、確実に治療が必要なのは、この二人です。医療従事者として目の前の少女の命を見過ごすことは、出来ません」

「町の生き残りがいるかもしれないぞ？」

わざとの揺らぎを与える。レクスの決意を鈍らせる嫌味。

「……そ、それは、そうかもしれない。でも……」

決断は完全ではない。

「一つ。戦場での生き残り方法がある。見捨てることだ。たとえ生きていようが、見捨てることで助かるものもある。お前にそれが出来るのか？」

見捨てる。その言葉にレクスの顔がわずかに変わる。この町で見かけた女。今頃は命が尽きているだろう。消えかけた命だったのだ。それをレクスは一度、見捨てた。やらねばならないことを優先した。

「……出来ます。ここへ来て、僕は助けられたかもしれない命を、見捨ててしまいました」

「民を解放する為に働くゲリラが市民を見捨てるか。やることがむちゃくちゃだな、お前たちは」

悔いを残すレクスに毒を浴びせる。レクスの表情が心痛に滲む。

「……戦争がある以上、願い全てが叶うなんて、思えません。でも、止めさせる為に出来ることはあると思います」

レクスにとつてのそれが、セフィアとの出会いの衝撃から始まっ

たものだろう。一人でも戦争に巻き込まれる未来ある子供を救いたいのだろう。幾度となく守られ、その命を削っているセフィアとサクラを見て、レクスは悲しみを覚えるばかりだったのだ。

「その先に待つものが、穢れきつた大人のエゴでも、か？」

「もし、そうであるなら、僕は許せません。子供を道具にするなんて、誰が許すことがあるんですか」

連れて行ってください。レクスの言葉にある思い。男が懐から一枚のカードを飛ばす。名刺だった。

「乗れ。その意見を言える口があるならな」

レクスの視線はカードに落ちる。

「……ルーシユ・アトランテ。戦争孤児、強化教育育成、課？」

見慣れぬ役職を持つルーシユ。会社名はやはりセグレア。

「早くしろ。乗らんなら、用はない」

「あつ、まつ、待つてください」

発進ようと窓を閉めるルーシユを見て、慌ててレクスが助手席に乗り込む。ドアが閉まると同時に、レクスの身体がGに座席に押し付けられる。破壊され、形を残す戦争遺物が通りに鎮座している横を、ルーシユの車が砂塵を巻き上げて町を出て行く。幾らの死人の身体が横たわっているのか、どれほどの血が流れているのか、時折ルーシユの車が不気味な揺れと共にタイヤ痕を赤く残していた。

「見たくないなら、見るな。軍が合同火葬して埋葬はする。お前はもう軍人でもない」

レクスを見ることなくルーシユはギアをあげ、加速させる。

「……分かっていきます。戦争と平和くらいの区別は、持ってます」
揺れる車内で、二人の少女が重なるように動く。

「なら良いが、覚えておけ。一度でも死んだ人間の心は開かん。戦場で生き残るには、一度は死ぬことだ」

人を殺すことに躊躇いを持っていては、殺される。

「あの、聞いてもいいですか？」

レクスの問いかけに、ルーシユは何も言わない。気まずさにレク

スが息をのむ。

「セフィアと、サクラは、どうしてあんなことが出来るんですか……？」

無慈悲に圧倒的な戦力としての力の発揮。何人がその犠牲になったことかは、レクスには定かではない。

「死んだからだ」

一言で返される。あまりにもあっけない一言だった。

「し、死んだって、生きてるじゃないですか」

振り返り見る二人は、血がまだ微かに滲んで出ている。生きている証拠。だが、急いで処置をしない限り、その小さな灯火は消えてしまう。レクスは何度も後方を振り返っては、二人の腕から脈拍を測っていた。

「何も知らないのは、お前だけだ」

ルーシユがバックミラーを一回見る。

「いつまで寝ているつもりだ。もう契約は双方終わりだ。叱りはしない」

「……え？」

レクスがルーシユを見る。すると、後部座席の二人がゆっくりと瞳を開け、身体を起こした。小さく長い息を吐きながら。

「セ、ファイア……？」

瀕死の重傷でありながら、起き上がるセフィアとサクラ。

「あはは……さすがは、ルーシユ。相変わらず、良く見てる、ね」

「……ボクは、今、起きた、だけ」

二人の少女がバックミラー越しに、起き上がっていることに、レクスは開いた口が唾然と閉じることを忘れていた。

「ど、どうして……？」

あちこちから出血の後が見え、傷が生々しさを残している。だが、表情は平然としている。

「言ったる。こいつらはそこいらの平凡なガキとは違う。子供だと思っていると、首を取られるぞ」

レクスを他所に、セフィアは自身の任務が結果的には果たせなかったことに、ミラー越しにルーシュを見る。

「怒らない、の？ 私、契約、達成出来てないよ？」

「……ボク、は、出来た、けど……セフィアに、ついた……」

二人はルーシュの顔色を伺う。

「確かに、不自然な点はある。だが、セフィアの契約はワクチンを届けることだ。部隊が全滅した以上、その契約は自動的に破棄される。サクラの場合はワクチンが輸送されなかった以上、どうとあれ、契約は満了だ。セグレアが求めるものは結果で十分だ」

ルーシュの言葉に、二人が安堵したように息を吐いた。

「そっかあ。良かった」

「……うん」

二人が顔を見合わせ、笑んだ。

「レクスは、無事、だったんだね？」

「え？ あ、はい」

セフィアに比べると負傷は足のみ。軽症とは言えずとも命にまで影響は無い。

「賭け。どっちの勝ち、かな？」

セフィアの言葉に、レクスがはっとした。この戦場で生き残ればキス。死ねば死のみ。結果としては生きていた。二人とも。セフィアの笑顔に、それを思ったのだろう。顔が赤くなっていた。

「そ、それは……」

「私の勝ち、だね」

だが、レクスの言葉をセフィアが区切る。

「え？」

その意味を理解していないレクス。

「知ってたでしょ？ レイプされた女がいたの。私が殺した兵士。だから、私の勝ち」

命をかけている男しかない戦場はなかった。生きる為の戦闘だけではなく、女子供を乱雑に扱う兵士がいた。それをセフィアは銃

弾で倒した。レクスの信条は叶わない。

「そう、でしたね……」

信じていたものはなかった。そのショックは大きい。だが、見捨てることもしなければ、今はなかった。後悔しようにも後悔出来ない思いに、複雑な面持ちをしている。

「セグレアに、行くんだよね？　でしょ、ルーシュ？」

「そつだ。お前たちの治療と休暇が要る」

「じゃあ、レスクにはどうしてもらおっかな？」

賭けの勝利は、セフィアの手伝い。ぼろぼろになりながらもセフィアはどこか楽しそうに笑っていた。

「あ、それとも、あっちが良いかな？　男の子には」

既に車は町を出て、荒野を疾走する。車内に響くギアチェンジの振動とエンジン音。セフィアの言葉に、レクスはもう一つの賭けを思い出したのか、表情が一変する。

「……なんで、顔、赤い、の？」

サクラの静かな視線がバックミラーから、レクスを見る。

「何だ？　セフィアと何か他に賭けていたのか？」

さほど興味はなく、当事者同士の自由とでも思っているのか、ルーシュは一応の形で問う。

「え？　い、いえ。な、何でもありません」

「ああ……んふん。ナイショだよ。ねっ、レクス？」

その恥実を助長する用に、セフィアが笑った。ぼろぼろの身体に浮かぶ笑顔だけは、レクスを悲しみの事実を知った時のように輝いていた。

「どうでも良いが、セグレアのことを甘く考えるな。セフィアもサクラも分かっているだろう」

「知ってるよ。だって、私たちだもん」

「……うん」

二人が肯きあう。

「でも、初めてだよ。レクスみたいな一般人がそんなことを思っ

くれたのって。だからいいじゃない。ルーシュもそう思ったから、連れてきてくれたんでしょ？」

「……結果が、全てじゃ、ない」

レクスは一人取り残される。三人はもう答えを知っている。だが、それでも別の答えがあるかも知れないと、限りなく小さな可能性をレクスに見出しているように。

「お前たちがそこまで身を挺して守った男だ。無意味だと判断した時は、トレイシエールマスタライズと盾の剣と、暁、紅、エイツナイフはこいつに弁償させる」

武器が無い二人に容共をある程度察しているルーシュがレクスに言う。

「え、それって、僕がですか？」

「そうだよ。ここに来て、逃げ出せるとでも思ってるの？」

「……セグレア、は、どこまでも、追いかける」

セグレアでセフィアのような子供が戦力となっていることを止めさせる為に乗り込んだ。だが、セフィアはそのつもりは毛頭ないとも思っているのか、もう手遅れだと示唆するように笑う。

「へ、平気です。そうでも受けて立ちますっ。ほ、僕は、戦争に加担する全てのものが無くなれば、戦争は二度と起きないと思ってます。だから、セフィアたちが闘うことがないように、僕はセグレアに行くんです」

レクスの言葉に、車内は空気が異なる。熱の差がある。

「あ、あれ？ ど、どうかしたんですか？」

空気のおかしさに気づくレクス。その瞬間、車内が笑いに包まれる。

「ねっ？ こんな人なんだよ？ セグレアにだってこんな人いないよ？ それに医療技術は十分あるし、使えるよ、きつと」

おかしそうにセフィアが笑う。

「……セグレアに、意見できることを、知らない、無知は、ボクらも、いない」

「なるほど。こいつは驚きだ。命知らずな男かと思えば、とんだ恥知らずか。上が何と言うか、次の契約までの暇つぶしにはなりそうだな」

ルーシュまでもが鼻で笑った。一人理解できていないレクスは、混乱した表情を浮かべるしか出来ていない。

「レクスには、私たちの運命を解き放てそうな気がするの。だから、セグレアでもしっかりしてね。背中が私を守ってあげるから」

「……ボクも、見届ける……」

唐突に言われ、レクスはセグレアという組織の茫漠とした姿に、疑問を感じているようでもあったが、セフィアの笑顔に言葉にはしなかった。

「お前がどれほどの男なのか、俺も見届けさせてもらうとするか」

「え、えつと……よく分かりませんが、僕は、もう戦争で人を殺す子供を増やしたりしたくないだけですから」

状況を理解していないが、やるべきことを確認するように言い聞かせていた。

「ハウスで皆、なんて言うか、楽しみ、だね……」

「……その前に、治療。まだ、ふらふら……する」

サクラがシートに身をゆだねる。セフィアも同じように力を抜き、目を閉じた。

「ふっ、二人ともっ？」

「気にするな。寝ただけだ」

すぐに正しくなる吐息。レクスが慌てて二人の状態を確認しようとするのをルーシュが宥める。

「お前、こいつらに何をしたかは知らんが、こいつらには期待はさせてやるな」

そこで一言、ルーシュが心情を明かす。先ほどまでの明るさは、セフィアとサクラの話に、嘘で便乗していたように、今は愁いに満ちていた。

「こいつらは、兵士を殺すことしか知らん。飴は与えすぎると悲劇

の欲を生むぞ」

「子供がそんなことをしていることを止めさせるだけです。こんなに愛らしい笑顔を持つているんです。持つものを花束に変えるだけでも、きつと変われます」

シートに座りなおすレクスはルーシユと同じ方向を静かに見た。

「そうだと良いと、言えるものなら言つてやりたいが、セグレアにいる子供は、強制された子供はいないことだけは、今のうちから考えておくことだ。言つただろ。一度死んだ奴の心は、取り戻せはしない。身を持つて知れば良い。その為に、俺はお前を連れて行くだけだということ覚えておけ」

ルーシユの言葉が最後だった。何も言わせないルーシユの沈黙に、レクスは後部座席であどけない寝顔を、惜しげもなく見せる二人の少女をミラー越しに見ていた。明るく笑いながらも、その身体は深く傷ついている姿を痛々しげでありながらも、生きていることに安堵したように。

「帰ったら、髪、梳いてね……」

「ん？ セファイア？」

不意に聞こえた囁き。振り返るセファイアは寝息を立てていた。

「寝言だろう。寝て居る時だけは、普通の子供さ。戦場に咲く花も、開かぬ時の色は分らんもんだ」

微かにそんな愛らしい寝言のようであり、恐らく夢と現実の狭間に溺れている言葉。

「戦場に咲く冷花。そう呼ばれているんですよね？」

「セファイアか。まあ、そうだな」

「子供にそんな酷いことをつけるなんて、僕はやっぱり許せそうにありません」

眠っているセファイアがレクスには本性に見えるのだろう。何も飾らない無垢。そうとしか見えない。

「それを見極めるのは、セグレアに着いてからすることだ。お前のやろつとしていることの規模は、こんなもんで済むようなことじゃ

ない」

ルーシユは静かにクーラーを作動させる。涼風がセフィアとサクラの前髪を撫で始めると、透き通る風の心地良さに、二人の少女の寝顔は一層深まっていた。

「それでも、僕はこの子達の笑顔が、あるべき場所で、あるべき姿で、自由にあつて欲しいんです」

それを見るレクスは、家族を殺された悲しみや憎しみを、セフィアやサクラのような子供に生んで欲しくはない。だから、やるんだと、強い瞳を保っていた。

15th・セグレアの少女と衛生兵（後書き）

一応、ここまでで区切りの作品となります。

まだ続きはありますが、連載は今後の評価などで判断しますので、
評価・感想おまちしております。

閲覧ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5125g/>

ロックオン・バーディー ～契約少女と衛生兵～

2010年10月8日13時05分発行